

竜泉窯青瓷盤の 形式と 年代



はじめに

1. はじめに

近年の貿易陶磁研究は編年研究を一段落させ、機能や組成などから都市性・地域性を論じるようになってきたように思える(1)。

事実、碗皿などの大量に出土する形式は編年が確立しつつあるが、今回取り扱う盤ほか壺瓶類の編年は非常に遅れている。機能論を扱うためには、これらのような機能的に異なるものの年代を明らかにすることを先行させる必要がある。

生産と消費の問題は交互に関連しており、生産の年代を明らかにすることなく、消費の様相を考えることは本来不可能である。生産年代と廃棄年代は、窯址出土品以外ではその間に格差があるものと見て間違いなく、搬入されてから廃棄されるまでの使用期間が消費の様相を知る手がかりとなる。より深い消費の研究のためにも、実証的な編年研究は今日の貿易陶磁研究にとってもっとも必要なものである。

具体的な消費の実体を明らかにしようと試みる研究も行われ始めている。鈴木康之による搬入と廃棄のモデルがその好例である(鈴木1996)。このような理論をより実証的にするためにも正確な年代を知ることが大切である。

遺跡出土の貿易陶磁から遺物の使用のあり方、いままで単に「伝世」と片付けられてしまった層位に対する古形式の出土を、消費の側面から確かめたものとして高く評価する。このようなモデルを実際に取り入れた例は少ないが、個々の破片の精密な分析によりそれらが可能となるであろう。

また、日本国内と中国での年代観の違いという問題が浮上してきている。陶磁器は、土器と異なり使用年数が長いのが通常である。土器の編年に照らし合わせ、陶磁器の年代を決めたとしても、それによりわかるのは廃棄の中心である。土器のように生産-消費-廃棄の時間差があまりないと考えられる場合は問題にはならないのだが、使用年代が比較的長く考えられる陶磁器の場合、廃棄年代というものは、使用された中心の年代でも搬入の時期を示すものではありえないのである。出土量の多い時期ではなく、遺跡で出土し始める時期や搬入の状況を保存している遺跡(沈船遺跡など)、窯跡の資料を重要と考える。従来のように遺物量の中心を求めることは間違った解釈を生むおそれがある。本論では中国での紀年銘共伴資料・一括資料を中心に、日本国内の調査例で重要と考える出土状況のものを補足的に使用している。

盤型式にとどまらずそのほかの器形についても同様の作業を行うことが必須であり、その積み重ねにより、日本出土の貿易陶磁の特性面がより明確になっていくだろう。碗・皿についても比較的編年研究が進んでいるとはいえ、特徴的なグループ、人形手と呼ばれる内面印花文碗の発生や雷文帯碗の変遷の過程などつきつめて考えることの可能なものについて考察を加える必要がある。より深い理解を得ることによって、貿易陶磁研究における消費と流通の問題もさらに進展させることができる。

本論では特に盤形式について南宋から元への転換を明らかにすることを目的としている。

搬入と廃棄のモデル (鈴木1996)

	第1期	第2期	第3期	第4期
搬入量	20	10	0	0
保存量	20	14+10=24	16.8	11.8
相続量	$20 \times 0.7 = 14$	$24 \times 0.7 = 16.8$	$16.8 \times 0.7 = 11.8$	$11.8 \times 0.7 = 8.3$
廃棄量	$20 \times 0.3 = 6$	$24 \times 0.3 = 7.2$	$16.8 \times 0.3 = 5$	$11.8 \times 0.3 = 3.54$

2. 第一形式 凹縁盤について

竜泉窯青瓷盤の第一にあげられるものは、口縁鏢部を凹状にくぼませ、内外面無文、20.0センチメートルをやや下回る口径、高台足端部のみの露胎といった特徴をもつ一群である。内壁から口縁部にかけてやや強く膨らみ、一段稜をつくって口縁凹面に続く。

図版1-1に示したものは、メトロポリタン美術館蔵の青瓷盤（東洋大観1977a）で口径17.1センチメートル、内外面無文である。同じ形式の例が四川省簡陽東溪園芸場墓葬址（図版3-1,口径17.5センチメートル 四川文管会1987）および四川省什放県窖蔵より出土している（図版1-2,口径16.6センチメートル 四川文管会1978 朱伯謙1998,図145）。

簡陽東溪園芸場墓と什放窖蔵の二箇所遺物の組成は、同じく四川省の遂寧金魚村窖蔵（遂寧市博1994朝日新聞社1998）のそれと類似していることが注目される。第一の型式についてその年代を確定するために、三遺跡における出土資料の比較を行なってみよう。関連が深いと思われる9器種について検証する（図版1～図版6）。

まず始めに、上記の三遺跡に共通して見られる長頸瓶について述べたい。口唇部を帯状に肥厚させ、頸部は直立し、なだらかに胴部につながっている。胴部はまるみをおび、輪高台に続く。釉剥方法は端部露胎である。

中国での紀年銘共伴資料としては、開禧元年(1205)紀年銘共伴の青瓷長頸球胴瓶（図版1-6 黃顧寿 1989 朱伯謙1998,図107）と、嘉定六年(1213)紀年銘共伴の任晞靖墓出土の長頸瓶(図版1-7 湖北文管1964)の二例がある。任晞靖墓の出土品が遂寧・簡陽・什放で出土している長頸瓶に類似している。開禧元年墓品は12世紀までさかのぼる可能性のある資料で、この類似品は三遺跡では確認できない。

遂寧出土の鎬蓮弁文碗には二種類があり、角高台タイプおよび砧青磁タイプとされている（森1998）。つぎにこの鎬蓮弁文碗について考えてみたい。遂寧において、角高台タイプは外底無釉、砧青瓷タイプは端部露胎と釉剥の方法でも識別することができる。

遂寧のものについては特に弁幅の広いことが指摘されている（森1998ほか）3。特にその傾向を明確にするために13世紀後半の鎬蓮弁文碗の紀年銘資料をとりあげて比較してみよう。

その第一は博多遺跡群第62次調査地点の713号土坑で発見された青磁鎬蓮弁文碗である(図版3-6,3-7,3-8,福岡市1995a)。三点が重なって出土し、そのうち一点に墨書で年銘が書かれており、文永2年（1265）と考えられている。図版3-8に示したものが銘が書かれていたものである。角高台で外底無釉、やや腰の張る器形で腰から口縁にかけてなだらかに開く。他の二点もほぼ同様の特徴をそなえ、特に図版3-7の腰の張りが明瞭である。図版3-6は内底に印花文を配置し、釉が酸化ざみで暗黄緑色に発色し、ともにやや鎬蓮弁の施しかたがあらう。

中国国内の紀年銘資料は浙江省史繩祖墓および潘氏墓の二例が知られている。

浙江巨州史繩祖墓品（図版2-5,口径15.4センチメートル 巨州市文管会1983 朱伯謙1998,図135）は、咸淳十年（1274）墓誌共伴で、小さい高台は輪高台で端部露胎である。蓮弁の幅が遂

寧出土品とくらべると非常に狭いことがわかる。麗水市潘氏墓出土品（図版2-6 口径17.9センチメートル 朱伯謙1998,図136）も同様に輪高台、端部露胎で蓮弁の幅もやはり狭くなっている。

湖南省桃江窖藏出土の鎬蓮弁文碗（図版2-8 口径14.7-17.5 益陽博1987）もこれら二つの紀年銘共伴遺物に近い特徴がある。桃江窖藏は遂寧・簡陽・什放の次世代に位置付けられる一括資料として重要である。

鎬蓮弁の幅は、時代が下るにつれて狭くなる傾向にあるようで、神奈川県立歴史博物館の青瓷碗（図版2-7,口径16.6センチメートル 神奈川歴博1995,図67）および陝西省略陽県八渡河窖藏出土青瓷碗（口径14.5センチメートル 漢中文化館 1976）が弁幅の点からみて遂寧窖藏と桃江窖藏の中間に位置すると思われる。神奈川県立歴史博物館のものは端部露胎で、腰の張りはなくなっただけに口縁に続く。この例では鎬を造りだす際に二回削りを行ない弁幅を調節しているのがよくわかる4。

什放窖藏出土の鎬蓮弁文碗の中には、やや狭い弁幅のものも含まれており（図版2-4）、遂寧における出土資料の全体像を把握していないので断言は出来ないが、弁幅の比較的狭いものについても同時期に存在する可能性はある。

鎬蓮弁文碗には角高台-外底無釉品と輪高台-端部露胎品の二種類が存在する。13世紀中葉の、博多遺跡群出土品は前者、同じ時期に相当する史繩祖墓・潘氏墓は後者にあたり、双方を比較すると角高台品の方が輪高台品に比べて腰の張りが強いという特徴があることが分かる。この特徴は、13世紀前葉の遂寧の段階では腰の張りのよわい角高台品が存在することから、時代が下るにつれてより明瞭になっているように思える。碗の分類・編年については本稿の目的ではなく、すでにいくつかの編年案が出されているので5、詳しいことは割愛して遂寧・什放の資料の年代が13世紀第三四半期より前の段階に属しているものであることを確認しておくに留める。

つづいて曲口碗について述べる。曲口碗は遂寧窖藏（図版4-1）で出土しているが、簡陽および什放ではみられない。遂寧の曲口碗の類例は浙江省竜泉大窯杉樹連山Y2出土品（口径13.2 朱伯謙1998,図134）にあり、南宋後期に比定される6。曲口碗に類似しているものに束口碗があり、桃江窖藏（図版4-2）および浙江省史繩祖墓（口径10.5 朱伯謙1998,図138）に出土例を見出すことができる。束口碗は天目うつしとされており、曲口碗との前後関係が考えられる。曲口碗が天目を参照して束口碗に変化した可能性がある。曲口碗からは三遺跡の共通性を見出すことはできないが、13世紀中葉の束口碗との関係から遂寧の年代が13世紀前葉にさかのぼることの証左となりうる。

蓮弁文深碗としたものは、多く蓋をとめない、口縁端部に施釉しない場合もある。三遺跡の中では遂寧(図版4-4)のほかに簡陽東溪園芸場（図版3-10,図版4-3）で発見されている。

酒会壺については、以前はこの器種は元以降にしか見られないと言われていた。酒会壺は遂寧窖藏・簡陽東溪園芸場で同一のものが出土しており、底足部のつくりなど、元に多く見られるタイプの酒会壺と比べて初現的な様相を呈す。先の紀年銘資料とあわせて考えると、相対的に元との前後関係が導きだされる。

双耳炉については遂寧窖藏と簡陽東溪園芸場で出土している。遂寧品（図版5-2,器高14.5,口径

18.5 朱伯謙1998,図124)は高台端部とともに口縁も露胎にしており、蓋がともなっていたことがうかがわれる。耳は竜をかたどっている。簡陽東溪園芸場品(図版3-11,図版5-1,器高14.1センチメートル、口径11.1センチメートル)は耳の造形がやや不明瞭になっており、口唇部が外反している。博多遺跡群博多築港線関係第3次調査の10号溝から出土した双耳炉(図版3-12)は簡陽品に比べて非常に小形だが、口唇部を外反させる例である。10号溝の埋没年代はおおよそ14世紀代と考えられている。耳は欠損しており形状は不明である。やや厚味のある輪高台で端部露胎となっている。

盃は什放窖蔵(図版5-3)と簡陽東溪園芸場(図版5-4)でほぼ同一のものが出土している。

そのほか五管瓶、筍形瓶が三遺跡の比較資料としてあげられる。筍形瓶は遂寧窖蔵および什放窖蔵でほぼ同形のものが出土している。遂寧出土品は什放出土品に比べて胴部がより強調されている。五管瓶は遂寧と簡陽東溪園芸場において発見されているが、簡陽出土品は肩の部分が平坦に近くなっており、遂寧のようなふくらみがない。また蓮弁文も施されておらずやや異なった様相を示す。

第一形式の年代については、資料の全体が報告されていないことや実物を見ていないことが問題だが、遂寧・簡陽・什放三遺跡の組み合わせから大きく見て同一時期の遺構と考えられるため、三遺跡の年代は、任晞靖墓の紀年銘共伴資料の存在から13世紀前半の早い段階と言えるであろう。従って第一形式の年代には13世紀前葉が考えられる。

第一形式の日本国内における出土例を現状ではみいだしていない。第一形式は、貿易陶磁としての性格を持ち始める第二形式のプロトタイプとしての位置付けが可能であると思われる。

3. 第二形式 折縁盤の形式と年代

第二形式は第一形式と同様に、一段の稜を設けて口縁鏝部を成形しているが、鏝部外端を上方に持ち上げる折縁口縁となっている。第一形式にみられた鏝縁部全体を屈曲させる特徴がより明瞭になっている。第二形式の内壁文様には、無文・鎬（陰刻蓮弁）文・櫛目文・蓮葉文などが見られ、外壁に文様をもつものは稀である。外壁無文という共通した文様パターンが第二形式の特徴のひとつである。

3-1 無文盤

第二形式にはいくつかのタイプ、文様パターンが存在する。まずはじめに、この形式の中でも比較的早く位置づけられるであろう無文盤に焦点をあててみよう。内外面無文・端部露胎といった特徴は第一形式と同様だが、口径が大きくなり、口縁部の造りも全体的な屈曲から端部を持ち上げる折縁口縁の特徴が明確になっている。

図版6-3に示したものは五島美術館蔵の青瓷折縁無文盤である（愛陶1995,図版63）。口径は22.5センチメートルをはかり、輪高台、端部露胎という特徴をもつ。

この形式は日本国内の遺跡からの出土例が多く知られている。博多遺跡群では、35次、42次、48次調査地点ほかに出土例がある。図版7-1(図版6-4,口径22.4センチメートル)は35次調査地点の包含層から出土したものである。釉は全体に開片（貫入）が入り、焼成がやや不十分で胎土は赤変している。施釉法は端部露胎となる。42次および48次のもは破片だが釉調は整っており、五島美術館品とよく似ている。

鎌倉では佐助ヶ谷遺跡および今小路西遺跡について図示するが、他にも二の鳥居遺跡ほか鎌倉では多く出土しているタイプである。

今小路西遺跡（鎌倉市1995）では3面（図版7-8～11）と5面で出土し、3面は14世紀前半以前、5面は13世紀中葉から後葉の年代が与えられている。

佐助ヶ谷遺跡（佐助1993）では第8期出土遺物中にすでに確認できる。図版7-2（図版6-5）は第7期建物17出土の盤で口径21.5センチメートル、博多遺跡群第35次調査地点出土品と同形である。佐助ヶ谷遺跡では第8期から第1期までの遺構群が確認されている。8期...13世紀第3四半期、7・6期...13世紀第4四半期から14世紀初頭、5期...14世紀前半、4期...14世紀中葉と考えられている。佐助ヶ谷では形成の早い段階から第二形式の盤は出土しており、すくなくとも13世紀第3四半期にまでさかのぼることが言える。

竜泉窯の窯址での発見もいくつかみられる。はじめに図版7-4に示した上巖児村窯について考えてみよう。図版7-4の折縁無文盤は同型式の中に12.5から17センチメートルと口径に幅があり、出土地点はY1およびY5の堆積中である。内外面無文で足底まで満釉とある。おそらく端部露胎と考えられる。出土層位から南宋晩期から元、13世紀後葉が考えられる。竜泉金村窯ではT4(1層)か

ら折縁無文盤が出土している（図版7-5 張翔1989）8。出土した無文盤は端部露胎でその時期は南宋晩期を中心とした前後が考えられるがT4の年代幅がひろいため細かい年代をきめることは困難である。

寧波唐国寧寺出土の折縁無文盤は窯址出土品や日本出土貿易陶磁と比較して器体が薄い9。図版7-6はT2(5層)から出土しており、口径15.0センチメートルをはかる。図版7-7はT1(5層)から出土し、口径22.0センチメートルである。ともに端部露胎と考えられる。後者は高台形が、高台内面を垂直にし、外面をなだらかに胴部につなげる「臥足」の形状に近い。

折縁無文盤は第一形式の後継と位置付けられる。佐助ヶ谷における出現時期、窯址出土例からその年代は13世紀中葉と考えられる。

3-2 鎬文

第二形式には無文の他に、陰刻蓮弁文(鎬文)を内面に配するものがある。こちらはより明確に日本全国で遺跡から出土しており最も多いタイプといえる。ほとんどの場合外壁には文様を伴わない。

鎬文盤は南宋代に特定できる例は少ないが、その中でも初現的なものを見ていこうと思う。

まず、小形品で、盤の範疇には入らないものであるが、同様の文様パターンをもつ洗の紀年銘共伴資料がある。鷹潭徐氏墓出土品(曲利平1996)は、宝佑癸丑(宝佑元年...1253)7月没の墓誌が伴っており、口径12.4センチメートルの小形で、内壁鎬文、外壁無文で内底の文様の記載はない。輪高台で釉剥は不明。小型の製品は鎌倉・博多を中心に日本各地の鎌倉時代の遺跡で多く出土しており、今小路西遺跡の例でも13世紀中葉の面から出土している。内壁に鎬文をほどこし、外壁無文の文様パターンは13世紀中葉以前、13世紀第2四半期にまでさかのぼるものである。

竜泉金村窯では口径16センチメートルをはかる折縁鎬文盤が出土している(図版8-1)。出土地点はY2(1層)で、南宋晩期から元初期に比定されている。輪高台で端部露胎である。

口径30センチメートルをこえる大きな折縁鎬文盤では、内底に劃花蓮華文を配する例が多くある。町田市立博物館(町田市博, No.185 図版11-1)、新安海底沈船遺跡(図版11-2,11-3 三上1981,図171 文化公報部1984,p266, 図版32-44)、高安県窖藏(図版6-6 高安県博1982)などがあげられる。

町田市立博物館品は口径34.5センチメートルをはかり、高台形は臥足、釉剥法は端部露胎である。全体的にゆがみがあり、器高に8.3センチメートルから9.3センチメートルまでの幅がある。器体は浅い緑色に呈発するが、高台内部は暗緑色を呈する。

新安海底沈船遺跡で同様の折縁鎬文盤が出土している。図版11-3に示したものは町田市博品がやや直線的に広がるのにくらべて胴部のふくらみが強い。高台形は臥足、釉剥方法は端部露胎である。新安海底沈船遺跡は紀年銘遺物を伴っており、1323年以降に沈没した一括資料である。これらに類似する中国の資料に、江西省高安県窖藏出土品がある。239点の出土資料のうち、168点が青瓷である。青瓷盤は28点出土し、そのうち折縁盤は5点みられ、新安海底沈船遺跡品と同じようにやや深い器形をしている。高台形は臥足で口径は33~34.3センチメートルをはかる。4点は内

壁鏤文（内底劃花蓮華文2点、ほかの2点が印花文）、1点は内壁に海浪文（蓮葉文）、内底束蓮文を配する。ともに外壁無文で釉剥方法は不明である。この窖蔵の年代は、報告では元晩期に比定されている10。内壁に蓮葉文を配するタイプは新安海底沈船遺跡でも確認できる（図版12-3 文化公報部1984,p.267,図33-45）

杭州市窖蔵出土の青瓷盤5点のうち折縁盤は2点が確認できる（杭州考古所1989）。図版12-1は前述の劃花蓮華文を内底に配する文様パターンをもつもので、口径34.5センチメートルをはかる。図版12-2は口径33.4センチメートル、内底の文様が印花団鳳凰文となる。釉剥方法は劃花蓮華文のほうは端部露胎と思われる。

内底に印花文を持つものとして青田県鶴城鎮窖蔵出土品を図版11-6に提示した（朱伯謙1998, 図206）。高台形は臥足で端部露胎、口径33.5センチメートルをはかる。内底には折枝花を印花で施す。

日本出土品は博多・鎌倉を中心に多く存在するが、博多遺跡群博多築港線関係第三次調査地点3面出土品（図版8-2,11-4）を提示してある。胴部から口縁にかけての破片であるが、鏤文の施し方が均一であり、首里城出土品（図版8-3～8-5）と比較すると造りが丁寧である。口径は31.5センチメートルをはかる。首里城出土品では、図版8-3が輪高台/外底無釉、図版8-4が輪高台/環状釉剥、図版8-5の高台形は臥足であり釉剥方法は判然としないが外底無釉であると思われる。

同様に口縁部片であるが、よく似ている折縁鏤文盤が太宰府史跡SX1200から出土している。この溝は1330年紀年銘遺物を伴っており、新安海底沈船遺跡と同様重要である。

福建省の草寮後山窯址作坊(中村廻揺村古窯)で竜泉窯青瓷が出土しており、その中に折縁鏤文盤が含まれている（図版9-1,9-2 福建博26）。ともに高台形は臥足、釉剥方法は環状釉剥である。図版9-1は内底に菊花の印花文を配置する(口径19.6センチメートル)。図版9-2（口径18.5センチメートル）も内底に印花文を持つが、不鮮明であり判別できない。

また、寧波唐国寧寺においては、第6層（北宋代）から出土している青瓷菊弁文盤に注目したい（図版9-3 寧波考古研1997）。この資料は素地が薄く、内底と高台裏に6個の支釘痕が残っている。口縁部の特徴は折縁で外壁無文、内壁は型により菊弁文を押ししている。厚く低い高台は玉壁高台のように思われ、釉は外底面に及んでいない。口径は17.5センチメートルをはかる。竜泉窯系の製品とは考えにくい。竜泉窯の折縁鏤文盤に祖形の存在する可能性を示唆するものであるが、現状では資料を把握しきれていない。

明代末期の紀年銘資料に伴って折縁鏤文盤が出土している（図版11-5江西工作隊1983）。江西省朱由木墓がそれであり、由木は墓誌の記載から崇禎7年（1634）に没している。口径37.5センチメートルをはかり、小さい輪高台となっている。釉剥については言及されていない。内底は印花牡丹文である。新安・高安県窖蔵のものにくらべると口径に対する器高の割合が低くなっている。17世紀前葉同時代の遺物とは考えにくい、竜泉窯末期の製品であろう。

首里城京ノ内（沖縄県1998）では焼失した倉庫跡が発掘された。1453年の志魯・布里の乱または1459年の失火で被災したものと考えられており、15世紀中葉を下限とする一括資料である。遺物の年代には幅があり図版7-12にあげた鏤文盤はもっとも末期的なものとして位置付けられる。口縁部は肥大し外底は無釉とするが、高台内側を含めて一部外底面にまで釉が流れ込んでいる

。 鎬文盤の年代は、13世紀後葉を中心とした時期に輪高台・端部露胎品があることが分かる。それに続き14世紀以降の臥足・環状釉剥/外底無釉品に変化して受け継がれている。

3-3. 櫛目盤

次に櫛目盤について述べる。外壁無文という特徴は鎬文盤と共通しているが、内壁の陰刻蓮弁文は施文手順省略のために櫛目を代用している。

博多・堺・沖縄を中心に出土例が見られる。図版8-7は博多遺跡群第40次調査地点出土の櫛目盤で、高台形は臥足、釉剥方法は外底無釉で一部高台内に流入している。口径は24.7センチメートルをはかる。内底面には不鮮明だが印花文が施されている。博多遺跡群では博多築港線関係3次調査IV面10号溝からも出土しており、14世紀代が考えられている。

そのほか首里城京ノ内の櫛目盤を提示した（図版9-4,9-5,9-6,9-7）。内底の施文はすべて印花による。釉剥方法には環状釉剥と外底無釉が見られる。

櫛目盤は鎬文盤との前後関係から14世紀中葉以降の明代の製品と考えられる。

また、その他の文様パターンを持つ折縁盤として、簡陽東溪園芸場墓葬址で出土している双魚文盤を取り上げておきたい（図版10-1 四川文管会1987）。口径24センチメートルの折縁盤で、外壁に鎬蓮弁文、内底に印花双魚文を配置し、魚の食べる藻を劃花であらわす。高台形は輪高台である。2点出土している。

この資料の類例を知らないが、関連する遺物として博多遺跡群出土の印花双魚文碗を提示した（図版10-5）。角高台で外底無釉である。腰の部分の張りが強く、この特徴は竜泉窯青瓷碗のI-2またはI-4類にみられるものである（森田・横田1978）。内底には印花双魚文（図版12-4）を配し、劃花で藻を表現する。竜泉窯青瓷碗I-2、I-4類は12世紀後半から13世紀前葉の年代が考えられており、これと同種の文様を持つ簡陽の盤も12世紀後半にさかのぼる可能性が出てくる。資料を実見していないので現状では簡陽の年代、13世紀前葉と考えておくことにする。

4. 第三形式 直縁盤の形式と年代

第三形式の口縁は直立しており、第一、第二形式のような鰐部をもたない。この形式では12世紀代にさかのぼる一群の存在が確認でき、竜泉窯における盤の初現として位置づけられる。はじめに初現期の盤について見ていこう。

4-1 初現期の竜泉窯青瓷盤

このタイプでは図版15-2に示した深 青瓷博物館蔵品（口径15.4朱伯謙1998,図78）が古式と思われる11、内壁は、口縁下に無文帯をおき、一条の圈線を境に以下劃花による草文とその間を埋める篋點文によって飾られる。外壁は口縁下に一条の圈線がめぐるとともに文飾はなく、輪高台である。

中国国内においては窯址出土品を中心に資料がみられる。竜泉大窯12ではY4(2層)およびY2(2層)から出土している（朱伯謙1989）。Y4出土品（図版13-1）は外壁に蓮弁文を配する。この蓮弁は12世紀後半の青瓷碗に見られる、内部を櫛搔で充填するタイプと同種のものである。口縁部はわずかに外反する。内底には小さい圈をもうけ、内底周辺部から内壁にかけて櫛搔を伴う蓮華文を配する。口径15センチメートル、高台形は鎬蓮弁文碗の角高台タイプのもと同じつくりで外底無釉であると思われる。Y2出土品（図版13-2）は底部片であるが、高台径12センチメートルをはかる大盤で、推定口径は30センチメートルをこえる。Y4出土品と同様、外壁に櫛搔で内部をうめる蓮弁文をもち、内底には団花文、内壁には蓮華唐草文を配する。窯道具が付着しており、高台端部のみ接している。釉剥方法は端部露胎であると考えられる。

提示した資料は南宋前期（図版13-1）および南宋後半（図版13-2）のものとしてされている。

竜泉溪口窯の報告では、北宋器物として底部片がとりあげられている（金祖1962）。図版13-3に示したものがそれで、外壁の文様は欠損のため不明であるが、高台の形は大窯Y4出土品に近く、内面は櫛搔を伴う蓮華文が施文されている。

竜泉安福窯（図版13-4 中国科学院1981）品は、内壁に櫛搔をともなう唐草文が施される。この盤は元代遺物として紹介されており、口縁部を巻き込む形につくり、外壁は無文である。口縁の形状は類例が少なく特異な例である。

竜泉金村窯ではT1(1層)から二点出土している（図版13-6,14-2）。図版13-6は内面の文様は莖部を櫛で表現する蓮華文で、図版14-2は内面を花にみたて、弁で区画している。弁内にはしべを劃花であらわす。後者は竜泉窯系青瓷碗I-4a類に見られる文様パターンと一致しており、12世紀後半の年代が考えられる。

竜泉安仁口(図版14-1,14-3,14-4)では入窯湾3号窯および碗圈山2号、同3号窯より出土している。安仁口では入窯湾3号窯が南宋代とされており、嶺脚窯・碗圈山窯は元とされている。碗圈山2号窯出土品（図版14-3）と碗圈山3号窯出土品（図版14-4）は口縁部の特徴と法量に違いがあるが、

文様パターンは同一のもので、櫛搔を伴う3単位の蓮葉文を用いている。

中国国内の遺跡では寧波唐国寧寺の第5層から口径18センチメートルの直縁盤が出土している（図版13-5 寧波考古研1997）。内底には二重圏線と劃花唐草文を配する。口縁は大窯Y4出土品と異なり直立する。第5層は南宋後晩期から元初期の層である13。

鎮江市呉家門元代建築遺址（鎮江考古所1996b）では、劃花花文が内面に施される盤が12層から出土している（図版16-16）14。高台形は角高台で釉剥方法は不明。口径18.8センチメートルをはかる。口縁部はやや外反する。

また、新安海底沈船遺跡において同様の型式の盤が出土している（図版15-1 文化公報部1983,p.63,図51-76）。

これらの一群の青瓷盤の年代については亀井明徳の草創期竜泉窯の研究により年代推定できる（亀井1992）。亀井は北宋から南宋の竜泉東部地域を三段階に区分した。竜東1期(12世紀前葉)の特徴である篋點文を持つ直縁盤の例としては図版15-2、深 青瓷博物館蔵品があげられる。そのほか上段窯(竜東BY13,竜東2期)および碗扱山窯(竜東BY24,竜東3期)出土器物に、直縁盤がみられる。竜東2期に相当するものの文様は櫛搔を伴い、内底中央部に径の小さい平坦部を設ける特徴が見られる。図版13-1(竜泉大窯),13-3(竜泉溪口窯)などがこれに相当する。竜東2期の年代は12世紀中葉とされている。竜泉大窯出土品の方は、内面の特徴は竜東2期に該当するが、外壁の蓮弁文の特徴からは3期に属するものとも考えられる。竜東3期の製品は内底面を広くとり、一部櫛搔をともなう蓮華文や区画式の花弁文などが施文される。また、外壁の櫛目を内包する蓮弁文もこの時期の特徴のようである。竜東3期に相当するものとして図版13-6,14-2(竜泉金村窯)があげられる。竜東3期は12世紀後葉と考えられている。

これら初現期の製品群は、釉調・施文体系・施釉技法の面から、南宋後半から明にかけて続くものとは別の流れにあると考えられる。竜泉窯では、1200年前後を境に釉調合技術の変革および端部露胎による施釉法が確立（砧青瓷の成立）するが、青瓷盤においてもこの変化を受けた痕跡が認められる。安仁口碗圈山2号、3号窯および新安海底沈船遺跡から出土している内面に3単位の蓮葉文を配するものについては、平縁貼花文盤に用いられる蓮葉文との前後関係から、13世紀後葉という年代観が考えられる。

4-2 鎬蓮弁文盤

外壁に鎬蓮弁文を持ち、内壁無文という共通した特徴のある一群である。これらは、遂寧窖蔵・簡陽東溪園芸場・什放窖蔵の三遺跡から出土しており、第一形式と同じ年代が考えられる。

簡陽東溪園芸場のものは口径23.5センチメートルをはかり、輪高台で端部露胎の製品である（図版15-5,16-1 朱伯謙1998,図140 四川文管会1987）。内面は内底に圏線を一周させるが、それ以外は無文である。外壁に遂寧窖蔵・什放窖蔵出土の青瓷鎬蓮弁文碗とおなじ幅広の蓮弁文をもっている。簡陽東溪園芸場ではこのほかに口径18センチメートルの鎬蓮弁文盤が出土している（図版16-2 四川文管会1987）。腰の張りが図版16-1と比べて強いがその他の特徴はほぼ一致している。

桃江窖藏で出土している鎬蓮弁文盤は簡陽出土の盤に比べて弁幅の狭いことが明確にわかる（図版16-3,16-4 益陽博1987）。このことから碗と同様に盤においても鎬の幅は時代が下るにつれて狭くなる傾向にあることが言えそうである。

その他、浙江省紹興の繆家橋遺跡、寧波唐国寧寺、新安海底沈船遺跡（図版15-4 文化公報部1988, p.422, 図11）などで類品の出土例がみられる。繆家橋遺跡では、井戸1からやはりやや弁幅の広い鎬蓮弁文をもつ直縁盤が出土している（図版16-5,16-6 紹興県文管委1964）。共伴の青瓷からは13世紀中ごろの資料であると思われる。図版16-6は口径11.8センチメートルをはかり、博多遺跡群ほかに類例がある。博多築港線関係調査5次調査2面において端部露胎の口径11.3センチメートルの小品が出土している。寧波唐国寧寺では第5層から出土しており（図版16-7）、こちらは角高台で外底無釉の例である。

窯址出土品では、竜泉大窯、安仁口、上巖児村窯などに出土例を求められる。図版16-8は大窯Y2出土品で窯道具が付着している。口径16.9センチメートルをはかる。上巖児村窯出土品のうち、Y1床面からのみ出土しているものは、同窯のなかでも古い時期に位置付けられる。Y1床面から出土しているものとして、図版16-11および16-13があげられる。図版16-11に示したものは、内底の釉を環状に剥いでいる。外底面の釉剥方法は不明である。口径17センチメートル。図版16-13は口縁部にキザミをもつ口径17.4センチメートルの盤で、輪高台で外底面は無釉である。また、Y1のほかにY2からも出土している製品では、蓮弁の幅がやや狭くなっているのがわかる。輪高台の端部露胎品（図版16-10）と角高台の外底無釉品（図版16-12）がある。

日本国内の遺跡出土例については、鎌倉を中心にいくつか例が見られる。ここでは佐助ヶ谷出土品（図版16-14）を示した。第5期建物5から出土しており、端部露胎で、弁幅のやや狭いタイプである。

年代は第一形式と並行、13世紀代前葉を中心とした時期と考える15。上巖児村窯の出土例から、14世紀代にまで引き続いて生産されていたと考えられ、その製品は弁幅の減少という特徴から年代の序列が推定される。さらには新安海底沈船遺跡では劃花蓮弁文の直縁盤（図版21-4 文化公報部1988, p.502, 図221）が出現しており、いれかわるように鎬蓮弁文は衰退していくようである。この推移は14世紀前葉ごろに起こったと考えられる。

直縁鎬蓮弁文盤は13世紀前葉から14世紀前葉という比較的長い年代が与えられ、鎬の幅により変遷がうかがえる。鎬の幅は鎬蓮弁文碗と平行して変化しており、碗の年代と相互同期させて編年を考え直す必要があるだろう。

4-3. 直縁無文盤

簡陽東溪園芸場では直縁盤の無文形式が出土している。例が少ないので断言はできないが鎬蓮弁文盤と前後する13世紀前葉の成立年代が考えられる。

竜泉大窯Y4(2層)からは口径15センチメートル弱の製品が二種類出土している。口縁部をやや外反させるもの（図版17-2）と口縁部にキザミ目を持つものである（17-4）。双方ともに角高台である。

上巖児村窯Y1出土品は、口縁部をやや内湾させている（図版17-6）。口径16センチメートルで釉剥は端部露胎である。Y1の上層から出土している。

そのほかの直縁無文盤としては安仁口嶺脚窯出土品（図版19-8）、柏林坊水流湾遺跡出土品（図版19-9 福建文博24）、安福窯出土品（図版19-10 中国社会科学1981）などがあげられる。簡陽および竜泉大窯出土品は南宋前期にさかのぼる可能性があり、上巖児村窯出土品も南宋から元初頭にかけての製品であるが、安仁口・柏林坊・安福のものは元から明に位置付けられるものである。無文盤については時間幅が認められる。

今小路西南谷3面でも直縁無文盤が出土している（図版17-1,17-3）。図版17-3に示したものは、高台から口縁にかけて直線的に開く胴部をもち、後述する鎬文盤の今小路西遺跡または博多築港線関係調査出土例と器形・法量ともにほぼ同一のものである。これらは同時期の産品とすることができよう。図版17-1は、17-3と異なり腰の部分が強調されている。この特徴は堺環濠都市遺跡出土品（図版17-11）などに受け継がれる特徴と思われる。

直縁無文盤の年代の中心は、簡陽出土例から13世紀前葉には出現しており、その後14世紀中葉まで生産が継続されていたと考えられる。

4-4 鎬文盤

直縁盤には、内面に鎬（陰刻蓮弁）文を持ち、外壁無文という共通した特徴を持つ一群がみられる。

窯址出土品としては図版17-8にあげた上巖児村窯Y1から出土しているものがあげられる。高い輪高台をもち、端部の釉を剥いている。

日本国内の出土例は鎌倉・博多・堺などに見られる。図版17-5にしめしたものは、今小路西遺跡南外周部4面出土のもので、13世紀後半から14世紀初頭に廃棄されたものである。口縁部付近はやや内傾している。そのほか今小路西遺跡では南谷3面で鎬文盤が出土している（図版17-7,18-3）。これは図版17-9に示した博多遺跡群博多築港線関連調査3次調査地点SE13において出土したものとよく似ている。ともに30センチメートル近い口径で、輪高台、端部露胎という特徴がある。博多出土の直縁鎬文盤は、全体に明緑色の釉がかかり開片が多く入っている。口縁部がやや肥厚し、輪高台で端部露胎、高台の造りはやや鈍い。

博多遺跡群46次調査地点において表面採集された鎬文盤（図版17-10,18-2）は、内壁の鎬文が二段に施されている。口縁部はキザミが入る。この類品は上巖児村窯Y1床面出土品にあり（図版17-12）、外壁に蓮弁文をもっているが、内壁には二段の鎬文が配置されている。これらは菊弁文としたほうが適切であろう。博多遺跡群46次調査地点採取品の釉剥方法は環状釉剥となっている。

堺環濠都市遺跡では、口縁部の肥厚した、形式的に後ろに位置付けられるであろう製品が出土している（図版17-11）。外底面を環状釉剥にし、高台形は輪高台であるがやや臥足に近い形状になる。口径28.6センチメートルで、体部のたちあがりはやや内湾しながら口縁に続いている。このような口縁部と器形を持つものとして博多遺跡群博多築港線関連調査SK01出土の盤（図版17-13）およびSD565出土品（図版20-1）があげられる。SK01出土品は口縁端にキザミを入れ、それぞ

れの鎬文の間に縦線文を施している。釉剥の手法は欠損のため不明であるが高台形は堺環濠都市遺跡出土品と類似している。またこの盤は外面に突帯文を削り出している。同じくSD565出土品も外面に突帯をけずりだしており、外底には環状釉剥の痕が残る。

鎌倉千葉地遺跡では13世紀末の層からは出土せず、14世紀前半の層以上からしか鎬文盤は出土していない（千葉地1982）。千葉地遺跡の直縁鎬文盤は博多の例と同様に口縁部がやや肥厚しており、高台もやはり厚く鈍い。底部はヘタリを起こしている。

直縁形式においても、折縁盤と同様に、鎬文の手法を簡略化した櫛目盤が存在する。現在確認しているものが、堺環濠都市遺跡SKT84地点、首里城京ノ内など中世後期に位置付けられる遺跡からの出土品と、中国におけるやはり明墓の例である（図版19-1,19-2）。折縁形式同様、南宋～元初頭に相当する製品は見られない。

これら直縁鎬文盤は、折縁盤にみられる鎬文盤と技法・生産年代ともに関連しており、13世紀中葉から14世紀代の年代が考えられる。また、折縁盤と同じように14世紀後半には櫛目に変化したものが見られるようになる。直縁鎬文盤では、鎬の配置が二段になる例や口縁部にキザミをもつものなど、折縁盤に比べて文様パターンがやや豊富である。

4-5.雷文帯盤

その他直縁盤に見られる文様パターンとしては、外壁口縁下に略化雷文を巡らせるものがある。新安海底沈船遺跡（図版18-5,18-6 文化公報部1983,p.64,図52-77 p.66,図54-78）、上巖児村窯Y1・Y2（図版19-3）、安仁口（図版19-4,19-5,19-6）などの例がある。上巖児村窯の出土例から13世紀代にさかのぼる資料といえる。上巖児村窯出土品は外面には雷文のみで下位文様は見られず、内面も無文である。口径は15-20センチメートルと幅がある。高台は角高台で外底無釉である。同様の文様パターンのものが安仁口碗圈山2号窯からも出土している（図版19-4）。そのほか図版19-5,19-6など元代の窯址出土品には雷文帯の下位文様に劃花蓮弁文を配置し、内面の文様もバラエティーに富んだものが出現している。図版19-5に示した安仁口嶺脚窯出土の盤では内面の文様がラマ式蓮弁文とその内部を埋める八宝文からなっている。これらは新安海底沈船遺跡の年代から14世紀初頭を中心とした年代が考えられる。

4-6.印花文盤

次に内底に多様な印花文を持つ一群について述べる。まず第一に嶺脚窯出土品（図版19-7,口径16.5センチメートル 上海博1986）があげられる。これは内底に双魚の印花を持つもので、「大」字も一緒に印されている。外壁無文で、内壁には蓮葉文が巡る。

博多遺跡群35次調査地点出土品（図版20-2）には菊の印花文が用いられている（図版21-1）。同じく博多築港線関係3次調査地点（図版20-5）においても印花文盤が出土しており、これら二点は厚い底部と高台を持ち環状釉剥を採用している点や法量の面で共通している。また、35次調査地点出土品と安仁口入窯湾2号窯出土品（図版20-4）の印花菊文が類似している。鎮江市呉家門元代建

築遺址（図版20-7）および鎮江市94QST1（6層）出土品（図版20-8）では印花牡丹文が用いられている。

また、故宮博物院蔵の直縁蓮池文盤(故宮博物院1966,図51)も内底中央の文様が印花でなされるため印花文盤に含めて取り扱うことにする。口径は33.7センチメートルをはかる。内底部の文様は、中央の印花蓮華文と周縁部に巡らされる水波文によって構成される。内壁には蓮葉文が施される。この盤と同一の文様パターンをもつものが神奈川県立歴史博物館に収蔵されている（図版22-4,口径34.1センチメートル 神奈川歴博1995,図63）。外壁無文、輪高台で環状釉剥を行っている。

蓮池文盤の出土例としては、杭州市窖蔵出土品があげられる(図版22-2,口径35センチメートル 杭州考古所1989)。同窖蔵出土の盤5点の内、2点がこの蓮池文盤である。内壁の文様が蓮華唐草文である以外は類似している。湖州市東西苕溪水利工地出土品（図版22-1,口径26.7センチメートル 朱伯謙1998,図211,湖州市博物館蔵）は、内底に印花により雜宝文を施している。水波文は見られないが、内壁の蓮葉文は故宮博物院蔵品・神奈川歴史博物館蔵品と同様のものである。外壁無文で釉剥方法は環状釉剥を採用している16。トプカプ宮殿（長谷部1987 TKS15/1313,15/627）、アルデビル寺院（口径33.5センチメートル 三杉1981b,図 A233,29.615.8845/2845）にも類例がある。

直縁印花文盤は、内外壁無文の製品が多く見られ、直縁無文盤の後継として位置付けられる。その年代は14世紀から15世紀と幅が広く、今後細かく編年を検討していく必要がある。直縁無文盤と直縁印花文盤は、時代をおって法量が変化しているように思われる。詳しくは「まとめ」の項で検討する。

5. 第四形式 平縁盤 特に貼花文盤について

口縁部を平坦もしくはわずかに窪ませて鐔状につくりあげる。この第四形式に関しては、貼花文を用いるものに焦点をあてて取りあつかいたい。

5-1 魚文盤

(1) 貼花双魚文盤（内壁無文）

まず南宋の段階で確認できる資料として貼花双魚文盤を取りあげる。桃江の貼花双魚文盤（図版24-2,25-1）は口径21.1センチメートル、内壁無文で外壁には蓮弁文が施される。輪高台、端部露胎である。桃江の年代観から推定して、少なくとも13世紀第3四半期の時点で貼花双魚文が成立していることが推察される。

貼花双魚文盤には内壁の文様から二型式に分類できる。ひとつは内壁無文のもので一般的にはこちらの様式をとる。もう一方の内壁に蓮葉文を配する例は比較的少ない。

内壁無文タイプでは、桃江窖蔵の他に、メトロポリタン美術館（図版24-1,口径15.2センチメートル 東洋大観1977a）、竜泉市博物館（図版24-3,口径13.4センチメートル 朱伯謙1998,図218）などの博物館・美術館蔵品がある。その他遺跡出土例として、京都市下京区常葉町出土品（図版24-5,口径22.5センチメートル 長谷部・今井1997,図版53）、佐助ヶ谷遺跡出土品（図版24-6,25-6,口径29.4センチメートル）、今小路西遺跡出土品（図版26-1,26-2 鎌倉市1995）、楽安県窖蔵（図版25-2,口径12.5センチメートル 余家棟・梅紹喪1989）、山東し博（図版25-3,口径23センチメートル 張光明・翠思梁1986）泉州清浄寺奉天壇基出土品（図版25-3,口径23.0センチメートル 福建省博1991）、高安県窖蔵（高安県博1982,口径12.2～12.7センチメートル）があり、窯址出土品も見られる。

窯址出土品から年代の根拠となる例を見てみようと思う。図版26-3,26-4に示したものは上巖児村窯Y1出土品である。後者はY1の床面から出土しており、外壁無文の製品である。

竜泉金村窯では、口径13.3センチメートルの小品だがT5(1層)出土品が13世紀後半の例としてあげられる。同じく小形品の出土は竜泉大窯T9(3層)に例がみられる（図版26-7）。報告書では年代推定がなされておらず、断言はできないが金村と前後する年代が考えられる。

貼花双魚文盤の年代は13世紀中葉から13世紀末が考えられる。

(2) 貼花双魚文盤（内壁蓮葉文）

内壁に文様を持つ例として高安県窖蔵の出土のものがあげられる。同窖蔵からは貼花双魚文盤は2点が確認されている。内底の二重圏線内に施文されており、外壁蓮弁文、内壁には海浪文が巡

らされる。口径33～36センチメートルをはかり、高台形は臥足で、端部露胎と環状釉剥の二種類がみらる。トプカプ宮殿の貼花双魚文盤（三杉1981a,図146）は外壁無文、輪高台、環状釉剥という特徴を持っている。口径25.8センチメートルをはかる。魚文が特に大きく、新安海底沈船遺跡などでもこのような大魚をあしろう内壁蓮葉文タイプが発見されている（図版28-1,口径34.7センチメートル 文化公報部1984,p.268,図34-46）。高台形は臥足で端部露胎である。

内壁無文タイプの貼花双魚文盤には30センチメートルをこえるものは見られず、16,17センチメートルから25センチメートル以下におさまる場合が多い。

これら内壁に蓮葉文ほか文様をもつタイプの貼花双魚文盤は、無文タイプに比べてやや新しい年代に中心がうつる傾向にある。13世紀後葉から14世紀前葉が考えられる。

（3）回遊魚文盤

貼花魚文には双魚に限らず複数の魚を用いるものがある。その場合、魚文は内底面の周縁部を回遊する形に施される。これら回遊魚文盤の例としてディビッド財団コレクション（図版29-1）、ジャカルタ国立博物館（図版29-2,口径37センチメートル 東洋大観1977b）、出光美術館（図版29-3）ほかあげられる。出土資料は少なく、現状では鎌倉今小路西遺跡で確認しているのみである（図版27-3）。高台部片で径21.1センチメートルをはかる大きな製品である。魚文の位置が通常の貼花双魚文と異なり、縁辺部に配されていることから、回遊魚文盤の出土例と判断した。南外周部1面出土で廃棄年代は14世紀中葉にまで下る。このほか、由比が浜出土の整理中の遺物中にこれに近いものを一片確認している。

トプカプ宮殿には、小さな飛竜と魚を一對ずつ交互に配する回遊竜魚文盤がある（図版30-5 長谷部1987,p.142,図23）。内壁には蓮葉文が施されるが、写真が不鮮明なため単位は不明である。

これら回遊魚文盤については資料不足のため年代は不明である。

（4）印花双魚文盤

貼花ではなく、印花で双魚文を施す例が見られる。遼寧義県水井からは平縁盤20点が出土しており、その中に印花双魚文盤が含まれている（図版27-1 李紅軍・馬雲洪1988）。口径18.1-19.7センチメートルをはかり、外壁無文、内底に印花双魚文を配する。角高台で外底無釉である。安仁口嶺脚窯からも印花双魚文盤が出土している（図版27-2）。口径12.6センチメートルの小品で外面に劃花蓮弁文を巡らしている。

そのほか新安海底沈船遺跡（図版30-1 文化公報部1984,p.421,図187-309）、武義県博物館（口径12.6センチメートル 図版30-2）などに印花双魚文盤の例が見られる。

印花双魚文盤は貼花双魚文盤の後継として出現しており、その年代は14世紀代が考えられる。特に14世紀前葉から中葉が中心になり、15世紀代には例が少ないように思われる。

魚文に関しては特異例が存在する。スマトラ出土の青瓷盤のなかに、外底高台内に魚文を貼り

つけた例が見られる（E.McKINNON1994）。内面の文様は不明である。外壁は蓮弁文、外底面には三体の魚文を貼り重ねている17。

特殊部位貼花の例としては鎌倉若宮大路周辺蔵屋敷遺跡出土品（図版27-4）があげられる。実見していないので詳細は不明であるが、内壁下位に魚の貼花文が見られる。これら特殊部位貼花文は現在のところ魚文に限られて資料が存在している。

魚文盤の年代は、貼花文と印花文において年代差が考えられる。貼花魚文盤は13世紀中葉から14世紀初頭と捉えられる。その中でも内壁に文様をもたないものと蓮葉文を配するものでは年代が前後しているように思われる。内壁文様による年代観の差については後述する。印花魚文盤の年代は14世紀前葉から中葉が考えられる。

5-2. 竜文盤

続いて、平縁盤に用いられる貼花文として例の多い、竜文盤について述べる。

竜文は雲竜戯珠文という、竜・雲・竜玉というセットで施されるものが最も完成された形であると考えられる。図版31-3,31-4に示したトプカプ宮殿蔵の貼花竜文盤がその典型であり（口径41.8センチメートル 長谷部1987,p.42,図2・3,TKS15/260）、舞竜とそれを取りまく雲、竜玉という全てが揃った形で表現されている。そのほかの竜文盤では、簡略化のためか、雲が欠落する場合（竜戯珠文）もしくは、雲と竜玉の省略されるもの（竜文）が見られる。

（1）貼花竜文盤（内壁有文）

雲竜戯珠文の例としてはトプカプ宮殿のほかにボストン美術館蔵品がある（東洋大観1978b）。口径41.7センチメートルをはかる。

雲を省略する竜戯珠文では大英博物館蔵品（口径36.8センチメートル東洋大1974）、上海博物館蔵品（口径36.3センチメートル 故宮博物院1966,図55）があり、竜文のみの例はギメ美術館（34.8センチメートル 東洋大観1975b）および広東省博物館蔵品（図版31-5,口径34.8センチメートル）などが典型例といえる。また、ストックホルム東アジア博物館（東洋大観1976）には竜玉の部分を魚文に置き換えた特異例が存在する。

遺跡出土例としては、高安県窖蔵（高安県博1982）、ウイグル霍城県窖蔵（口径33.5センチメートル 新疆博物館1979）、永新県窖蔵（口径32.4センチメートル 楊後礼1983）、新安海底沈船遺跡出土品などがあげられる。高安県窖蔵では青瓷盤は28点のうち、貼花竜戯珠文盤3点と竜文盤1点が出土している。内底には二重圏線が巡らされ、その中に施文されている。口径33～36センチメートルで内壁には海浪文があしらわれている。釉剥方法は端部露胎と環状釉剥の二種類がみられ、高台形は臥足となる。霍城県窖蔵および永新県窖蔵出土品の内壁は蓮葉文が巡らされている。韓国新安海底沈船遺跡出土品は（図版32-1,口径35.7センチメートル 文化公報部1984,p.269,図35-47）は高台形臥足で端部露胎の製品である。

貼花竜文盤の年代は、14世紀前葉を中心とした比較的短い時期が考えられる。

(2) 印花竜文盤

竜文を印花で施す例が見られる。新安海底沈船遺跡出土品（図版32-2,口径36センチメートル 文化公報部1984,p.429,図195-328）および安仁口嶺脚窯出土品（図版33-3,口径24.4センチメートル）がそれにあたる。新安海底遺跡品は竜文がやや小さくまとまり、高台形は臥足になる。嶺脚窯出土品は破片であるが竜口の全面に竜玉のようなものが見える。高台形は臥足である。

印花竜文盤は貼花竜文盤の後継として出現しており、その転換時期は14世紀前葉が考えられる。この後、14世紀中葉を中心として印花竜文盤が存在するようである。

上記の貼花竜文盤は全て内壁に蓮葉文を伴っている。双魚文盤と同様竜文盤においても内壁無文タイプと内壁蓮葉文の二種類が存在する。貼花竜文盤においては多くが蓮葉文をもつタイプである。また、魚文・竜文ともにほとんどの場合において外壁に鎬蓮弁文をめぐらしていることも特徴としてあげられる。高台は鈍い輪高台もしくは臥足であり、端部露胎であることが多い（広東省博物館・新安海底遺跡ほか）。個人蔵品（三上1981,図165）では環状釉剥の製品も見られる。

(3) 貼花竜文盤（内壁無文）

内壁無文タイプは例が少なく、現状では首都博物館（図版31-1,口径37.3センチメートル 朱伯謙 1998,図204）、ジャカルタ国立博物館（図版31-2,口径36センチメートル 東洋大観1997b）、鎌倉今小路西遺跡北谷3面出土品（図版33-1,33-2 鎌倉市1995）を知るのみである。

首都博物館品とジャカルタ国立博物館品は竜のスタイルが、トプカプ宮殿の典型的竜文に見られるような大きく舞う竜ではなく、小さな飛竜であるところに注目しておきたい。また、ジャカルタ国立博物館品は竜のスタイルは異なるものの、竜・雲・竜玉というように、トプカプ宮殿品にみられる要素は備えている。

鎌倉今小路西遺跡北谷3面出土の貼花竜文盤は破片復元のため文様の全体を把握することができない。口径32.6センチメートルのもの（図版33-1）と32センチメートル（図版33-2）の2個体が復元されている。竜体のほかに、図版33-2の製品において竜玉が確認できる。今小路西北谷3面出土品の内壁は無文である。内壁無文の貼花竜文盤は、首都博物館およびジャカルタ国立博物館の小竜文のものを除いて、管見の限りではこの1例のみである。

また、回遊魚文盤のところで述べた回遊竜魚文盤（図版30-5）には、ジャカルタ国立博物館・首都博物館に見られる小さな飛竜と類似する竜が貼花されている。内壁には蓮葉文を持っているが、魚文と竜文の接点を示す資料として興味深い。

(4) 貼花露胎文盤

貼花文盤には類例の少ない特異例が存在する。その中でも博物館・美術館収蔵品によく見られ

る貼花露胎文盤についていくつかとりあげてみようと思う。

貼花露胎とは、貼花する文様部分を施釉した後に置いて焼成する技法である。図版38-2に示したディビッド財団コレクションの貼花露胎虎文盤(口径41.1センチメートル セゾン美術館ほか1998,図27)は、内底面に一对の虎を貼花露胎の技法を用いて配置している。虎の体と尾は別々につくられており、隙間に釉が入り込んでいる。内壁には劃花により雲竜戯珠文2条がかかっている。外壁無文、輪高台で環状釉剥の製品である。

同じくディビッド財団コレクションには貼花露胎雲竜戯珠文盤がある(図版32-3,口径43.2センチメートル 今井1997)。縁上の五弁花と内底の竜、雲、竜玉を貼花露胎としている。竜のまわりを雲5つと竜玉1つを均一の間隔で回している。内壁は海浪文を巡らしている。これとほぼ同形の例がトプカプ宮殿(図版32-4,口径42センチメートル 三杉1981a TKS15/239) およびクリーブランド美術館(口径43.2センチメートル MINO1986,図84)にある。三例の間にある差異は縁上の花の数のみであり、他の部分は一致している。ディビッド財団コレクション17個、トプカプ宮殿12個、クリーブランド美術館18個という関係である。

内底面ではなく、縁上の花のみを露胎とする例がトプカプ宮殿に見られる。図版30-3に示した劃花蓮池双魚文盤である(三杉1981a,図147,TKS15/233)。口径40.5センチメートルをはかり、内壁には蓮華唐草文を巡らしている。内底は劃花により双魚と池水を表現している。口縁平坦部上に16個の貼花露胎花文を均等に配置させる。

以上の貼花露胎文盤の出土例は現状では確認していない18。年代については、内壁文様である海浪文の系譜と変遷の分析が不十分である現状では、貼花竜文の中心年代である14世紀前葉から中葉と仮定しておくにとどまる。

5-3. 蓮弁文盤

平縁形式における貼花文以外の文様パターンを持つものでは、内底および内壁に文様を持たない平縁盤がはじめにあげられる。これらは外壁に蓮弁文をもつもので、明確に稜を持たせて縁を表現するものと、単に外反するだけの二種類がみられる19。

平縁蓮弁文盤は繆家橋遺跡井戸1出土品(図版27-6,口径14.5センチメートル)、鎌倉佐助ヶ谷遺跡採集品(図版27-7,29-5,口径14.5センチメートル 佐助1993)、安福窯出土品(図版27-11,口径19.5センチメートル 中国社会科学1981)、上巖児村窯Y1、Y2出土品(図版27-12 中国歴史博1986)、安仁口碗圈山2号窯出土品(図版27-13,口径20.3センチメートル 上海博1986)があげられる。年代が比較的小さえられるものは上巖児出土のものしかなく、口径12センチメートル強の小形品であるため平縁蓮弁文盤の年代は断定できない状況である。

外反の例は簡陽東溪園芸場(図版29-4,口径15センチメートル 四川文管会1987) および竜泉大窯 T3(3層)出土品(図版27-9,口径23.6センチメートル)、同じくY2(1層)出土品(図版27-10,口径13.9センチメートル)、安仁口碗圈山2号窯(図版27-14,口径18.2センチメートル)、鎌倉佐助ヶ谷遺跡第4期建物5出土品(図版27-8,29-6,口径15.8センチメートル 佐助1993)などが確認できた。簡陽東溪園芸場の例は、このタイプが13世紀前葉にまでさかのぼるものであることの根拠

となりうる。竜泉大窯出土品の年代からは南宋後期という年代観が導き出される。また、佐助ヶ谷の第4期は14世紀中葉に比定されているが、少なくとも14世紀前葉にまでさかのぼらせる必要があるだろう。外反蓮弁文盤の年代は13世紀前葉から14世紀前葉におさえられる。

このように外反盤は13世紀前葉にまでさかのぼるが、平縁蓮弁文盤の場合は、平縁形式の成立年代と考えられる桃江窖蔵の年代まで下らせる必要があると考える。平縁蓮弁文盤の年代は13世紀中葉以降と仮定しておく。

5-4. 無文盤

次に平縁無文盤について例をあげる。図版34-1に示した竜泉大窯Y4（3層）出土品が最も古いものとしてあげられる。しかし、形状は桃江窖蔵以降の平縁盤とは異なり、腰が強く張り、内底の平坦面が広い器形をしている。大窯Y2出土品（図版34-2）は器形の面から見て一般的な平縁盤の要素を備えており、こちらの方を重要視したい。元末明初に比定されているY6出土品（図版34-4）とくらべると、Y6出土品の方が口径に対する器高の割合が減少していることが読み取れるのだが、このことは平縁盤全般に言えることで、年代が下るにつれて器身が浅くなっていく傾向にあるように思える。この変化については、「まとめ」の項で詳細を論じることにする。

図版34-5,34-6に示した上巖児村窯出土品は双方ともにY1床面より出土しており、同窯では最古式に考えることができる。図版34-6の口縁部は平縁よりむしろ外反としたほうが適切だろう。

図版34-9は山東し博出土品で、外底面に墨書で八思把文字が書かれている。同じく元代に考えられる資料として草寮後山窯址作坊出土品（図版34-8）があげられる。

平縁無文盤は、資料数は少ないが一部12世紀代にさかのぼるものがあり、多くは13世紀から14世紀にかかる時期に確認できる。時間軸に対して法量の変化が認められる。

5-5. 印花文盤

その他の平縁形式において資料数の多いものとしては印花文盤があげられる。魚文盤および竜文盤の項で取り上げたもの以外をしてみよう。

図版36-2に示したものは上巖児村窯Y1上層から出土したもので、外壁無文、内底印花蓮華文を配し、内壁は蓮葉文で飾られている。内壁蓮葉文を持つ例は新安海底沈船遺跡でも確認できる(文化公報部1988)。新安では粗製品を中心に印花文盤が見られる。その他の窯址出土品としては安仁口入窯湾3号窯（図版36-3）および嶺脚窯出土品(図版36-4)があげられる。入窯湾出土品は外壁に劃花蓮弁文をめぐるせ、内壁無文である。印花は不鮮明なためモチーフは不明である。嶺脚窯出土品には内壁に蓮葉文がみられ、内底は鳳凰文を印花で施している。

印花文盤の遺跡出土品としては、河北省の南開河村で発見された元代木船出土品があげられる(磁県文化館1978)。外壁に劃花蓮弁文を持ち、菊と「天」字を印花で施している（図版36-1）。また、外壁に蓮弁文を持たないタイプのものも出土しており、こちらも菊と「天」字を印している（図版35-1）。双方ともに輪高台で、外底は無釉あるいは一部釉が外底に流入している。これ

らは同じ4号木船から出土しており、その他の形式の盤は出土していない。遼寧義県水井出土品（図版35-4 李紅軍・馬雲洪1988）は内外壁無文で角高台である。内底には牡丹と「心」字が印花で施されている。

首里城京ノ内からは環状釉剥の印花文盤が確認されている(図版35-5,35-6)。内外壁無文であり、内底の印花文はモチーフが判然としない。

これら平縁印花文盤の年代は上巖兎村窯出土例から少なくとも14世紀初頭にまでさかのぼるものであるが、南開河村木船出土品など元後期に考えられている遺跡における盤の組成の状況や新安海底沈船遺跡における出土例（図版37-1 文化公報部1983, p.61, 図49-74および文化公報部1984, p.270, 図36-48）などから14世紀前葉から中葉にかけて盛行し、その後続く種類のものであろう。

以上平縁盤について資料を提示した。貼花双魚文盤と貼花竜文盤については、内壁文様に無文のものと有文のものが認められ、これら2タイプの間には年代差があるように思われる。桃江窖蔵における内壁無文タイプの貼花双魚文盤と、新安沈船に典型的に見られる内壁蓮葉文タイプの貼花竜文盤の比較からもこのことは明らかであるが、ともに少数派である内壁蓮葉文の貼花双魚文盤、内壁無文の貼花竜文盤の存在が、2タイプの変遷過程をしめす証拠と考えられる。貼花文盤は、内壁無文貼花双魚文→内壁蓮葉文貼花双魚文・内壁無文貼花竜文→内壁蓮葉文貼花竜文と変遷しているようである。この点については蓮葉文の考察とともに「まとめ」の項で詳述する。

稜花盤について

6. 第五形式 稜花盤について

平縁の端を刻花により菊または蓮弁に見立てるものを稜花盤としてここで取り扱う。稜花盤の形は、竜泉大窯および上巖見村窯出土のものを除いて南宋代にさかのぼる可能性のある資料はなく、元・明代の竜泉窯を特徴づける形式である。貼花竜文盤も元に特有のものだが、稜花盤は形式そのものが元以降の特色としてあわられている。

まずはじめに南宋代にさかのぼりうる種類のものを見てみよう。図版41-1に示した竜泉大窯T3(3層)出土品であるが、T3は南宋後期に比定されており、稜花盤の初現とすることができる。しかし、非常に小形であることや、器高が低く鏝部が広い器形などの特徴からみると、稜花盤の中では異例ともいえるべき遺物である。

上巖見村窯Y1床堆積土中出土品(図版41-2,口径26.5センチメートル)も器形面において、底径が大きく口縁鏝部の折れ曲がる角度が浅い点、典型的な稜花ではなくキザミを入れるにとどまっている点など特異な例である。Y1の年代から13世紀後葉の製品と考えられる。輪高台で、環状釉剥を採用している。内壁鏝文、外壁には蓮弁文を施す。

図版41-3は竜泉大窯Y5(2層)出土品で、南宋末から元初頭に位置付けられる。上巖見村窯出土品とほぼ同時期の例である。内面無文、外壁には鏝文を配する。口径34.4センチメートルをはかり、輪高台である。こちらは一般的な稜花盤の器形と符合しており、稜花盤成立年代の根拠として確証性の高い例として評価する。その年代は13世紀後葉である。

その他の窯址出土例として安仁口入窯湾2号窯出土品(図版41-4,口径24.3センチメートル)および安仁口嶺脚窯のもの(図版41-5,口径28センチメートル)を取り上げてみよう。双方ともに内底に印花文を施している。入窯湾のものは花卉文、嶺脚窯のものは図示したものは鳳凰文であるが、他に印花竜戯珠文を配するものもある。文様パターンは嶺脚窯出土品の縁上に蓮弁の縁取り線を加えているほかは、内底印花文、内外壁鏝文と一致している。

故宮博物院蔵青瓷稜花盤(故宮博物院1966,図57)は、口径63センチメートルをはかる大きなものである。内底には劃花による牡丹唐草文が配される。中央に一輪の牡丹を置き、その周囲に6輪をめぐるす形につくる。縁の上にも劃花により唐草文が施される。内壁は鏝文だが、一単位の幅が広く、縦線文をともなっており、その縦線文で区画された空間には劃花による八宝文が配されている。外壁は鏝文がめぐらされる。この盤と同型のものが東京国立博物館にある(図版42-5,口径61.5センチメートル 東京国立博物館TG713)。口径60センチメートルに達する盤は稜花盤にしか存在せず、法量分布の頂点に位置することも第五形式の特徴である。

内外壁鏝文というパターンは稜花盤に特有の施文体系である。新安海底沈船遺跡(文化公報部1988ほか)における稜花盤の出土例を見てみると、内外壁鏝文の例が最も多い。この場合、内底には劃花蓮華文もしくは印花文が使われる。確認できる釉剥方法は環状釉剥であった。その次に多いのが内壁に蓮葉文を持つものである。この場合も外壁は鏝文であり、内底の文様も前述の内外壁鏝文の場合と変わらない。この二種類が稜花盤に用いられる文様の基本である。

トプカブ宮殿蔵の稜花盤も同じような傾向にある（長谷部1987 p.152,図72,TKS15/723 p.161,図109,TKS15/225ほか）。確認できた釉剥方法は環状釉剥と外底無釉の二種類である。図版44-1に示したのも内外壁に鎬文を配するもので、内底には劃花蓮華文、高台形は臥足で環状釉剥である（長谷部1987,p.150,図64,TKS15/568）。

遺跡出土例を見てみよう。

鎮江市出土文物中に外壁無文の稜花鎬文盤がみられる（図版41-7,口径24.2センチメートル 劉興 1995,編号94QST1）。内底には旋坏文20、内壁には鎬文、外壁は無文である。高台は臥足で釉剥は外底無釉である。出土遺跡の詳細や年代についての考察は記載されていない。

図版41-6,41-8に示したものは博多遺跡群出土の稜花盤である。博多築港線関係調査SK01出土品（図版41-6,42-1,口径33センチメートル）は内底に印花文を持ち、内外壁鎬文という文様パターンである。釉剥方法は環状釉剥である。博多46次調査地点出土品（図版41-8,40-5,40-6）は内壁に牡丹唐草文、縁上には稜花の花弁の縁取り線が三重にめぐり、臥足で環状釉剥である。内底には印花文があるが不鮮明である。外壁は鎬文となっている。焼成不良で酸化しており、黄褐色に発色している。

鎮江市大市口の井戸跡出土の稜花盤（図版43-1,口径19.4センチメートル 鎮江考古所1996c）の文様パターンは内底に印花文、内外壁鎬文となっている21。青黄色釉がかかり、輪高台で執焼の痕跡があると記載されているが、具体的な釉剥方法は不明である。

年代は、共伴資料にかなりの時代幅が認められ、少なくとも14世紀後半までに埋まったと考えられるが、稜花盤の年代特定に確実な根拠はない。

この井戸出土の稜花盤に類似した例が博多築港線第三次調査SE107から出土している(図版43-2,40-3,40-4 福岡市1989)。文様パターンは一致しており、底部が大きく持ちあがる器形も類似している22。輪高台で環状釉剥である。III面の年代はおおよそ14世紀に考えられている。

杭州市窖蔵出土の青瓷盤5点の内、1点が稜花盤である（図版42-2,口径34.5センチメートル 杭州考古所1989）。内外壁には鎬文があしわれ、内底には劃花蓮華文が配される。臥足で環状釉剥である。

丹徒県窖蔵（口径25センチメートル 鎮江市博1982）では、内底に印花菊文を配するものが出土している。高台は低い輪高台で外底部無釉、内壁は鎬文である。この低い輪高台というのは、図版41-6の博多築港線関連調査出土品の高台と同じ形を指していると思われる。輪高台ではあるが臥足に近い形状であり、図版41-8に示した臥足の製品と区別する必要性はないと考える。

江西南城明益定王氏墓出土品は崇禎7年（1634）の墓誌共伴資料である。口径24センチメートルをはかる。外壁は無文のようであり、内壁鎬文、内底には蔓草文が施されている。竜泉窯末期の製品であろう。

稜花盤で特筆すべきことは、折縁鎬文盤、直縁鎬文盤とことなり、櫛目に変化したものが存在しないことである。首里城京ノ内出土品（図版43-3,43-4,43-5,43-6 沖縄県1998）にも櫛目の稜花盤は含まれていない。この形式分類案では、稜花の鎬文と折縁・直縁の鎬文を同一に扱ったが、鎬蓮弁文の施文方法から二系統の鎬文が発生している可能性がある。

口縁端部を蓮弁ではなく菊弁に見立てる例も小数ながら存在する。霍城県窖蔵（口径16.5セン

チメートル 新疆博物館1979) や新安海底遺物に見られる。これらは内底に印花文を持ち、内外壁に鎬文を施し、輪高台である。

最後に類例の少ないやや特殊な例を取り上げておきたい。出土状態が良好なため、文様や高台などの特徴を知ることができる。

図版45-4および46-1に示した博多遺跡群80次調査地点出土品(福岡市1996)は完形で発見された。口縁端部の稜花は間隔が均一であり蓮弁の形をとっていない。内壁を鱗状の花弁で満たし、内底には劃花による菊花文が配される。鱗状花弁文の上下には、各々6条の圈線が巡らされている。外壁は線刻により文様がかかっているが、相当簡略化されているためモチーフは判然としない。また、外壁にはカンナ削りの痕が明瞭に残る。輪高台で外底無釉、腰の部分で稜をもうける腰折の器形をしている。釉色は透明度の高い浅緑色で開片が多くはいっている。

この盤の類例は堺環濠都市遺跡およびトプカプ宮殿に見られる。堺環濠都市遺跡SKT72地点出土品(図版46-2)は、法量・器形・釉剥の方法など博多80次調査地点出土品と共通する部分が多い。内底は劃花により菊花文が施されるが、博多品に比べて硬化している。内壁は蓮華文で上下に圈線帯があり、外壁は線刻による施文で博多品と同様に簡略化されている。一部欠損しており、火を受けているため釉や胎土に損傷が激しくのこる。稜花は博多品にくらべると蓮弁の形状を残している。

もう一点のトプカプ宮殿収蔵品(口径21.5センチメートル 長谷部1987,p177,図176,TKS15/333)は、器形は同一だが、口縁端部の稜花は、博多・堺品のように簡略化されておらず、弁の形をつくり出している。内壁の文様は博多品と同様で、圈線帯は見られない。内底は印花による施文である。

年代の根拠はなく、稜花の状態や高台形、釉剥方法などを考慮して14世紀後葉から15世紀代の明の製品と推定する。

稜花盤の年代は、初現期の資料を除いて13世紀後半から14世紀代に集中して見られる。13世紀前半における稜花盤は現状では確認していない。

7. その他の形式 角口縁盤

以上の形式分類で取り上げなかった形式の盤も多く存在する。その一つが角口縁盤である。角口縁盤には折縁と直縁の二形態あり、両形式にまたがる存在である。これについては例も少なく、詳述できないためその他として扱うことにする。

小梅鎮大窯出土品（図版47-1,口径18.5センチメートル 朱伯謙1998,図214）は、貼花露胎の竜文が施されており、折縁形式角口縁盤の数少ない例である。高台は小さく、端部露胎である。

縉雲県洋山紅磚廠工地出土の腰折八角盤（図版47-2,口径18.6センチメートル 朱伯謙1998,図215）には、無文の外壁上にろくろ目が残っている。角盤は轆轤成形の後、縁を切り落として造っていることがわかる例である。外底無釉、内壁は三本の縦線により区画された空間に草花文を配している。このような区画線をつくることは角盤にもっとも一般的な手法であり、トプカプ宮殿、ディビッド財団コレクションなどに類例が存在する。トプカプ宮殿収蔵品は外壁の腰より上に蕉葉文を配し、下位に蓮弁文をめぐらしている。

角口盤の窯址出土例は竜泉大窯出土品があげられる。大窯Y6出土品には上記の区画線を設ける腰折角口縁盤がみられ、外壁の蕉葉文・蓮弁文といった特徴もトプカプ宮殿収蔵品に類するもので、このタイプの出現が少なくとも元末明初におさえられると言える。また大窯Y2からは小形の角盤が出土しており、大窯T3出土の初現期稜花盤に類する器形を持っている（図版41-1）。角口縁盤自体の出現は13世紀後葉以前にさかのぼる可能性が高い。

8. まとめ 竜泉窯青瓷盤の発展段階

8-1. 竜泉窯 第一の画期

竜泉窯における盤形式の初現は、12世紀前葉の直縁盤に求められる。第三形式の図版15-2に示した深青瓷博物館蔵の花卉文盤がこれにあたる。内壁に篋點文を持ち、亀井の言う竜東1期（亀井1992）に相当するタイプである。12世紀代を通して、この類の盤がつくり続けられるが、1200年を境に第一の画期を迎える。これら初期の竜泉窯青瓷盤は、元明に続く盤の変遷過程からはやや遊離した資料であり、この1200年前後の時代に出現してくる形式が、元につながる盤の直接の祖形として重要であると考えられる。

第一形式は、簡陽東溪園芸場墓葬址および什放窖蔵の年代分析により13世紀前葉、可能性としては13世紀初頭にまでさかのぼりうるものである。この第一形式の出現が第一の画期をあらわす指標となる。第一形式の口縁部の特徴は、第二形式の折縁無文盤に引き継がれており、第一形式から第二形式無文盤への変遷を見てとることができる。

第二形式自体は、簡陽東溪園芸場から出土しており（図版10-1）、一部13世紀前葉に上る種類も存在している。この双魚文盤については本文中でも触れたが、12世紀にまで遡る可能性がある製品であり、問題を複雑にしている。現状では、この盤の内底文様に近いと判断した碗の器形から年代を推定しているため、確実に12世紀代にさかのぼると言える根拠はなく、簡陽と同時期の13世紀前葉と考える。

第一形式から第二形式無文盤への変遷がいつ起こったのかという問題だが、これについては中国における一括および紀年銘共伴資料の欠落があるため、日本出土の貿易陶磁の年代から考えてみたい。この際重要と考えるのは、佐助ヶ谷遺跡第8期遺構群出土品である。陶磁器は長期にわたり使用され、特に青瓷などの瓷器は、日本国産陶器に比べて耐久性にすぐれているため、後世に受け継がれることが多いと考える。そのため、廃棄状況から生産年代を考える時には遺跡における、その形式の出現時期を特定することが大切である。佐助ヶ谷遺跡において、第二形式の無文盤は第8期から第5期にかけて出土しており、その間に大きな型式差は認められなかった。佐助ヶ谷遺跡における第二形式の出現時期である第8期が、もっとも生産年代に近いと推定する。その時期は13世紀中葉である。よって第一形式から第二形式無文盤への転換が起こったのは13世紀中葉と考えられる。

13世紀前葉の第一形式平行の年代が考えられるものに直縁蓮弁文盤（図版15-5ほか）がある。第一形式の項で取り上げた鎬蓮弁文碗の変遷過程と符合し、同じように変化している。桃江窖蔵の年代は13世紀中葉、おそらく13世紀第3四半期程度と思われ、出土した直縁蓮弁文盤は碗と同様、簡陽のものと同く比べると弁幅が狭くなっている。このことから直縁蓮弁文盤は13世紀前葉から13世紀中葉にかけて変化していることがわかる。新安海底沈船遺跡からも出土しており、13世紀代、一部14世紀初頭にかかる長い期間生産されているようである。

桃江窖蔵の時期に出現したあたらしい形式として平縁貼花双魚文盤がある。以下竜文盤を含めて貼花文盤について考えてみよう。

貼花文は一部の例外(図版12-5,ディビッド財団コレクション,折縁貼花露胎回遊魚文盤 東洋大観1975a・図版47-1,小梅鎮大窯出土角口縁貼花露胎竜文盤 朱伯謙1998,図214)を除いて平縁形式に集中して見られる文様体系である。桃江窖蔵出土品は貼花双魚文盤の中で出現期に相当する例である。

貼花双魚文盤の多くは内壁無文であり、文様を持つものは少ない。この傾向は、貼花竜文盤では逆転している。貼花竜文盤の場合、大多数が内壁に蓮葉文または海浪文などの文様を持っている。

8-2. 蓮葉文について

ここで平縁盤の内壁文様として多く見られる蓮葉文について考えられることを記しておきたい。蓮葉文には時代による変化があるように思われる。その施し方について変遷を仮定してみた。

第一段階のものとして図版38-1にしめした神奈川県立歴史博物館蔵の平縁蓮華文盤があげられる。内底には蓮華があしらわれ、外壁は二重の外線を持つ鎬蓮弁文、高台は臥足、端部露胎である。内壁の蓮葉文は櫛搔を伴う流麗なもので、一単位の幅も広い。口径35.3センチメートルをはかる。新安海底沈船遺跡出土の第三形式盤(図版15-1)、安仁口古窯出土品(図版14-3,14-4)などは第一段階の蓮葉文を持っており、13世紀後葉の年代が考えられる。

広東省博物館蔵の貼花竜文盤(図版31-5)は口径34.8センチメートルと近似値を示すが、蓮葉文の幅が狭く、神奈川県立歴史博物館品では3単位おさめられていたものが、4単位になっている。蓮葉文の細部には櫛が使われており、これを第二段階とする。新安海底沈船遺跡出土の竜文盤内壁に見られる蓮葉文はこれに相当する。

その次の第三段階として上海博物館蔵の貼花竜戯珠文盤に見られる蓮葉文があげられる(故宮博物院1966,口径36.3センチメートル)。蓮葉文の幅はさらに狭くなり、内壁に6単位がおさまる。故宮博物院・神奈川県立歴史博物館などに収蔵されている直縁蓮池文盤も同様の蓮葉文を持っている。櫛は部分的に用いられるが、簡略化されている。神奈川県立歴史博物館蔵の直縁蓮池文盤の釉剥方法は環状釉剥であるため、年代的にも第一段階の平縁蓮葉文盤よりも下る製品であることがわかる。

8-3. 貼花文盤について

貼花双魚文盤の内壁無文タイプには口径30センチメートルをこえるものがみられないことは第四形式の項で触れた。このことは竜文盤の法量分布と比較することでより明瞭になる。下のグラフは貼花双魚文盤と貼花竜文盤についてそれぞれ内壁有文タイプと内壁無文タイプの口径を散布させたものである²³。

このグラフでは縦軸が口径を示している。横軸は任意の線であり、散布の状況を把握しやすく

するため以外の意味は持っていない。貼花双魚文盤の中の、内壁無文タイプ（●）の場合、全て30センチメートルのラインを割っていることがわかる。

これに対して内壁に蓮葉文ほか文様を配置するタイプ（■）においては分布範囲が30～40センチメートルの間にまで伸びている。資料数の問題もあるが、おおむね内壁に文様を持つもののほうが口径が大きくなる傾向にあると言える。

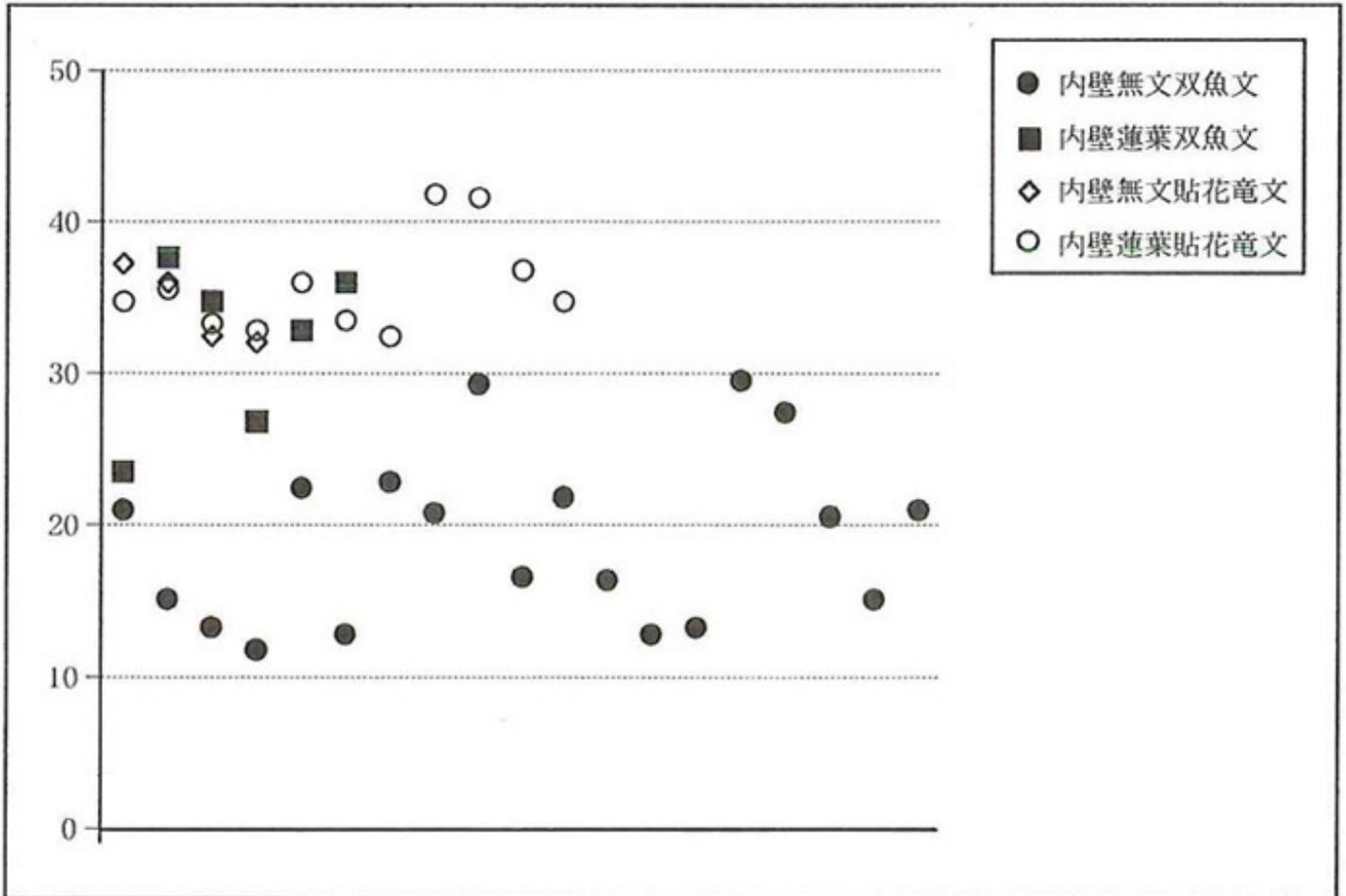


表1 内壁無文/有文タイプの口径分布

貼花竜文盤の場合、内壁無文タイプ（◇）も内壁有文タイプ（○）も同じような分布状況をしめしている。双方ともに30センチメートルのラインを上回る結果になった。40センチメートルをこえるものはこの4種類で内壁有文タイプの竜文盤のみである。竜文盤の実際の口径分布は25センチメートルから45センチメートルにおさまるであろう。

貼花双魚文の場合、内壁に有文のものと無文のもので法量分布に差があることが判明した。大きな流れとして簡陽・什放の時代に見られる直縁蓮弁文盤などの内壁に文様を持たない種類のものから、高安県窖蔵・新安海底沈船などの内壁に蓮葉文を配する内壁有文タイプへの主流の変化にあわせて考えると、貼花双魚文盤の場合も内壁無文から有文へ変遷していることがうかがえる。その際、口径の変化が伴っていると思われる。貼花竜文盤においても、内壁無文から内壁有文への変遷が考えられる。

貼花文盤の主体である双魚文と竜文の中で、小数にあたる内壁有文タイプの貼花双魚文盤、および内壁無文タイプの貼花竜文盤は、その転換点前後の製品とすることができる。その転換点は

いつと考えられるだろうか。

蓮葉文の変遷過程について前述したが、新安海底沈船遺跡における蓮葉文を第二段階とするならば、その年代は14世紀第1四半期に求められる。竜文盤の多くは内壁有文タイプであることから、貼花竜文盤の盛興時期を14世紀前葉と考える。内壁に文様を持たない種類のものも、口径による法量分布の分析からは差が見られず、大きくさかのぼるものではないだろう。特に今小路西遺跡出土品（図版33-1,33-2）は13世紀後葉、第4四半期の製品と考える。

貼花双魚文盤の成立年代を桃江窖蔵の年代、13世紀第3四半期程度とすると13世紀後葉から14世紀初頭にかけて、内壁文様の転換が起こったと考えられる。貼花文盤は、14世紀中葉を境にして、それ以降に生産された形跡は見られない。

貼花双魚文盤（内壁無文）の年代は13世紀中葉から末、内壁有文タイプは13世紀後葉から14世紀前葉である。貼花竜文盤は14世紀前葉にほぼ集中していると考えられる。内壁無文タイプの竜文盤などの一部の例外的なものに13世紀後葉の年代が考えられるのみである。

また、小飛竜文を持つ、首都博物館品（図版31-1）およびジャカルタ国立博物館品（図版31-2）についてはその年代の根拠となりうる資料は存在しない。この二点に類似した竜を持つものにトプカプ宮殿の回遊竜魚文盤があり、その内壁に施される蓮葉文は写真が不鮮明なため判断が難しいが、すくなくとも先の蓮葉文の変遷過程における第一段階あるいは第二段階に相当するものと考えられる。この点から、小飛竜文を持つ盤については13世紀後葉から14世紀前葉の可能性があり、典型的な舞竜文に比べて後ろに位置付けられるものではない。

8-4. 折縁盤の変遷過程

次に、折縁形式の年代と変遷について考えられることを述べる。折縁無文盤は第一形式に続くものとして13世紀中葉の年代を考えたが、内壁に鎬文を持つ種類の年代はどの程度とするのが妥当であろうか。

折縁鎬文盤は竜泉金村窯Y2出土例（図版8-1）から少なくとも13世紀後葉以降とすることができる。そして新安海底沈船遺跡および太宰府史跡SX1200出土品などの紀年銘資料共伴例からは14世紀前葉の年代が考えられる。傾向として鎬の幅が時代を追って狭くなるように思える。しかし、製品により弁幅は様々であるので実際の変遷過程については検討を要する。

これに続いて出現するのが折縁櫛目盤である。高台形が臥足になるものが目立って存在する。臥足は輪高台の退化形態と思われるが時期的に並存しているようであり、輪高台から臥足への変遷過程をみることは困難である。中国国内における良好な資料が見つからなかったため、日本出土貿易陶磁による年代決定に準じ、14世紀後葉から15世紀代の生産期間を設定しておく。第三形式における鎬文盤および櫛目盤についても折縁盤と同様のことが考えられる。

8-5. 第二の画期

青瓷盤からみた、竜泉窯の第二の画期は13世紀後葉における技術転換である。

図版33-1,33-2に示した今小路西遺跡北谷3面出土の貼花竜文盤は、その底部の状況に特徴がある。底部は焼成時にへたりを起こしており、地面につくまでになっている。このことは環状釉剥の採用に関連してくる問題である。盤の大型化が特に南宋末期に顕著になってくると、このようなへたりを起こすものが現れはじめる。底部径20センチメートル近くあるものでは底部の重みを支えるために環状釉剥を必要とするようになったのであろう。

新安海底沈船遺跡出土の碗・皿を見ると、その中に環状釉剥を行うものは見出しにくい。竜泉窯における環状釉剥の採用は盤作成にかかる技術的要因からはじまったと考えられる。

環状釉剥の例で最もさかのぼれる製品は、図版41-3に示した上巖児村窯Y1床堆積土中出土品である。このことから環状釉剥という技法が13世紀後葉に成立したことがわかる。その後、14世紀代に至り、盤の焼成技法の中心的役割を果たすようになっていく。

この技術転換を軸にして他にいくつかの点で変化があらわれている。まず第一に第五形式の稜花盤である。トプカブ宮殿に見られる稜花盤はそのほとんどが環状釉剥であり、トプカブ宮殿以外の稜花盤の遺例についても同じことが言える。環状釉剥の成立以後に、稜花盤という形式が確立したとわかる。この稜花盤という新しい形式の出現が13世紀後葉におこり、元竜泉窯の要素として中核を担うものになっていく。稜花盤の中心年代は14世紀から15世紀代と比較的長く見られる。その間に器形・法量・文様において変遷が見られるはずであるが、今回の資料検討では明について考える余地がなかったため、稜花盤の変遷過程については不鮮明なままである。

また、直縁印花文盤、平縁印花文盤などの、内底に印花文を用いる種類のものも第二の画期以降のものと思われる。印花文の使用・環状釉剥・稜花形式の出現の3点が元竜泉窯を特徴付けるキーワードである。14世紀初頭に成立する第二段階蓮葉文、ひきつづいて出現する第三段階の蓮葉文といった要素を複合させて年代を考える必要があるだろう。

この第二の画期以降の作例として神奈川県立歴史博物館の直縁蓮池文盤をとりあげてみると、この盤は内底の印花文、環状釉剥、第三段階の蓮葉文といった要素を持ち合わせている。蓮葉文の変遷過程から14世紀中葉、元後期の製品と考えられる。

折縁盤および稜花盤において、内底に劃花蓮華文を配するものがあるが（図版11-1,町田市立博物館 図版42-2,杭州窖蔵ほか）、同形式における印花文盤はその次世代に位置付けられるのではないだろうか。新安海底出土品に多く見られるこれら内底劃花文の盤は、蓮華文を用いることが多く、画一的である。一方、首里城京ノ内出土の折縁、平縁、稜花盤に用いられる印花は形状が多岐にわたっている。元末明初から盤に限らず、全般的に文様は多様化しており、印花文盤の盛興時期も14世紀中葉以降が主体であったのだろう。

以上、竜泉窯の発展段階を盤の形式と変遷から考えてみた。1200年の第一の画期では竜泉窯の新しい展開が見えてくる。第一形式および第三形式蓮弁文盤はこの時に成立しており、これが後の竜泉窯青瓷盤の基礎となっている。また13世紀後葉の画期では、焼成技術の向上、印花文の使用による大量生産への動向などが見られる。この時期の典型作例として鎬文盤、貼花竜文盤、稜花盤があげられる。また、14世紀中葉以降には印花文を使用する盤が隆盛している。

9. おわりに

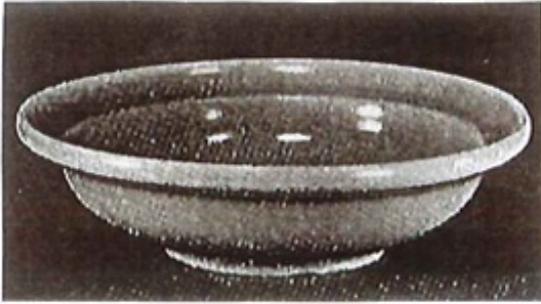
竜泉窯青瓷盤は、非常に多様な文様パターンを持っており、今回扱えなかった種類のものが多い数残っている。文様においても十字花文を持つ一群などその変遷過程を考察可能なものについても先送りとなった。明竜泉窯にいたっては、例が一点しかないようなものが多く存在する。このように問題が多岐にわたるため、今回はテーマを絞り込み、盤の出現および鎬文盤、貼花文盤に特に焦点をあてたのだが、南宋から元にいたる時期が中心のため、印花文盤やその他明における盤の展開についてはいまだ不明瞭なまま残されている。今後の課題として明代竜泉窯の解明と、無文盤などの文様による変遷が読み取れない種類のものについての編年が残っている。また、明代の盤について稜花盤の変遷過程を扱えなかったため、この点についても資料の追加・検討を行っていく必要がある。

遺跡出土の貿易陶磁を考える場合、まずなによりも陶磁器の年代特定が重要であることはすでに述べたことである。しかし、今回の成果では全く不十分であり、元から明にいたる盤の編年、その他の器種における形式分類をこれから行っていく必要があるだろう。

はじめに触れた中国と日本の間にある年代観の差は、既成概念に寄りかかった年代決定や、廃棄年代を中心とした、組成による編年枠によりひき起こされている。

既成概念による年代決定とは、その器物の雰囲気や、大きいものは元時代のものといった、物より先に枠組みが存在するために過った解釈をしてしまうことである。本論においても多々このような既成概念により年代を解釈してしまうところがあった。印花文盤というカテゴリーを用いて、印花文の施される碗との実証的な比較を省き、14世紀後半以降の遺構でそのようなものを見た経験から年代を判定することはこの既成概念による年代決定にほかならない。しかし、遂寧窖蔵出土の無文酒会壺を、その器形と器種から元と特定してしまうような動きがあったが、大物は元という観念は今回の研究をおこなっている間にまったく意味をなくしてしまった。口径20センチメートルを越えるものであれば13世紀前葉に出現していることは明らかであり、元における盤の祖形も南宋代に出揃っていることも判明した。この既成概念を打ち破るには充分であったと考えている。

また、考古学の制限上、編年は廃棄年代をもって行わなくてはならない。紀年銘資料から廃棄もしくは埋納年代を特定することは可能であるが、確実な生産年代を知ることは現実には不可能である。耐久性にすぐれた青瓷などの遺物の編年を行う場合、操作が必要になる。少なくとも廃棄の中心年代を、生産年代と同一に扱うことは青瓷にとっては大きな間違いを生む結果になるだろう。どの程度までの確証性を持たせて操作を行なえるかが重要である。それには多くの資料が必要であり、この盤の形式と年代も、他器種の編年を行いつつ修正していきたい。



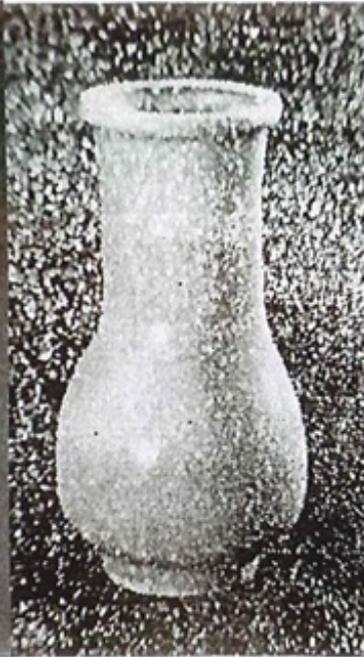
1



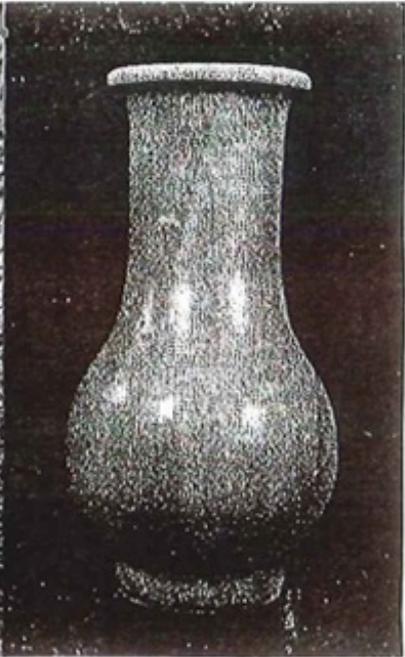
2



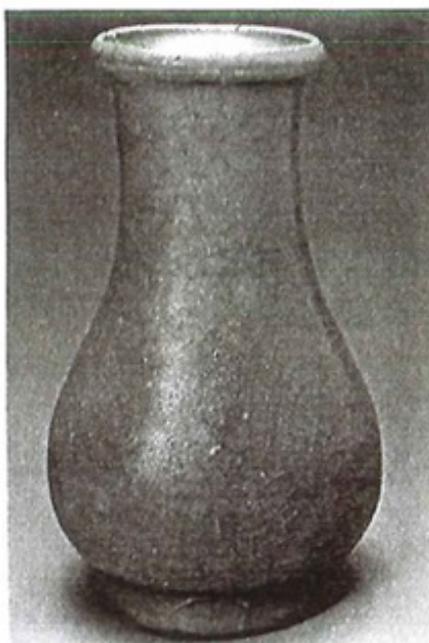
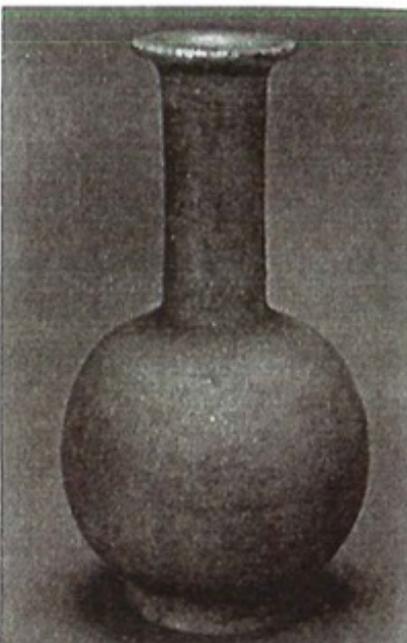
3



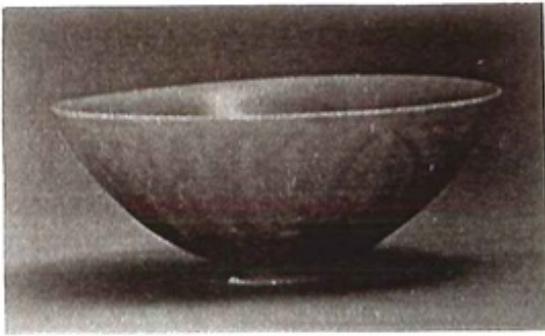
4



5



- 1: メトロポリタン美術館 2: 什放宮蔵
3: 逆寧宮蔵青瓷長頸瓶
4: 什放宮蔵長頸瓶 5: 簡陽東漢園芸場長頸瓶
6: 開禧元年(1205)青瓷長頸球
網瓶
7: 嘉定六年(1213)長頸瓶



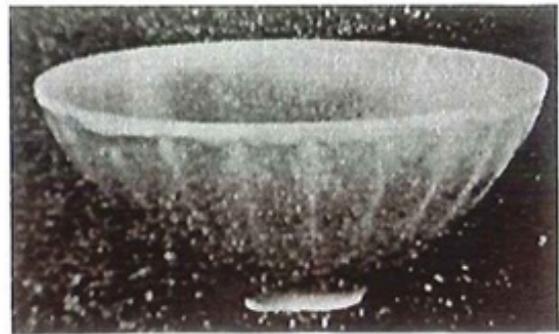
1



2



3



4



5



6

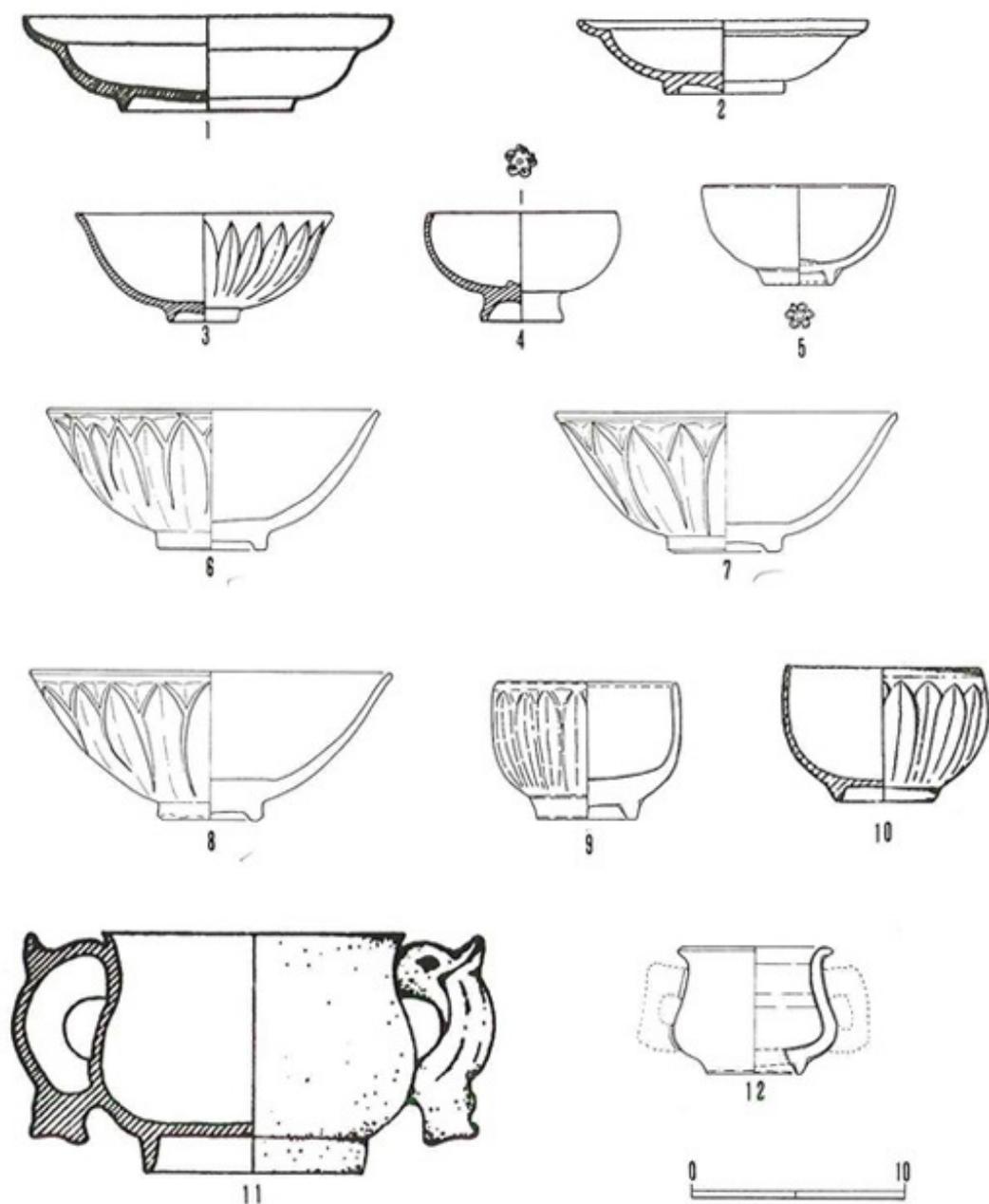


7

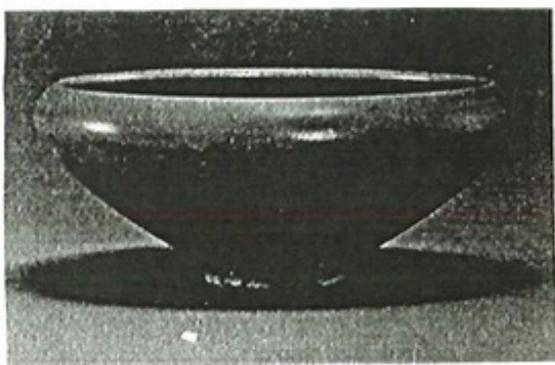


8

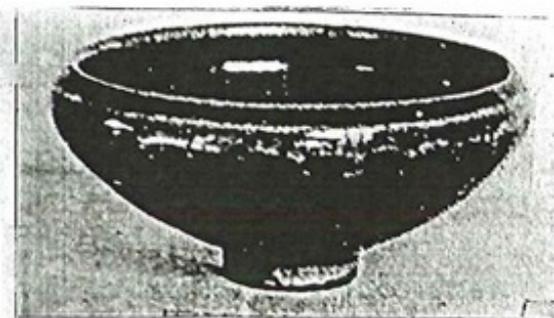
1、2：遼寧省藏青瓷碗 3、4：什放省藏青瓷碗 5：浙江巨州史繩祖墓（1274）青瓷碗 6：浙江麗水市潘氏墓（1275）青瓷碗 7：神奈川縣立歷史博物館藏青瓷碗 8：桃江省藏青瓷碗



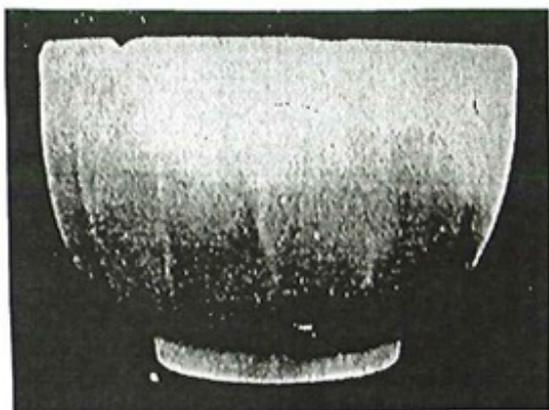
1: 開陽東溪園芸場青瓷盤 2: 柏林坊水流灣遺跡青瓷盤 3、4: 桃江縣窖藏 5: 今小路西遺跡(北谷3面) 6-8: 博多遺跡群文永2年(1265)紀年銘青瓷碗 9: 今小路西遺跡(北谷3面)出土鑄蓮井文深碗 10、11: 開陽東溪園芸場 12: 博多遺跡群出土双耳炉



1



2



3



4

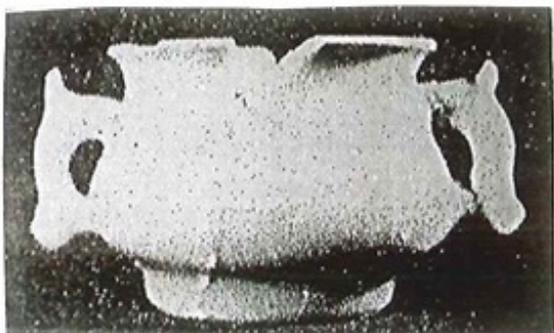


5

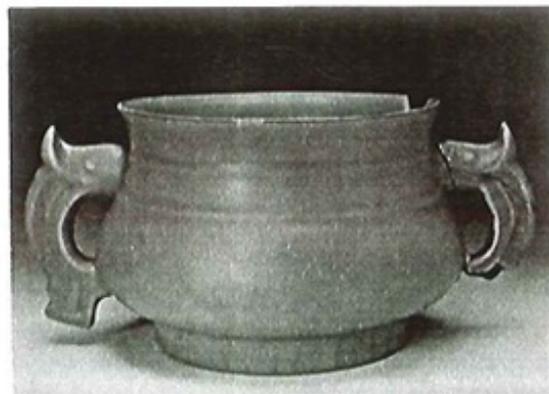


6

1: 遂寧窖藏曲口碗 2: 桃江窖藏曲口碗 3: 簡陽東溪園芸場蓮井文深碗 4、5: 遂寧窖藏 6: 簡陽東溪園芸場酒會壺



1



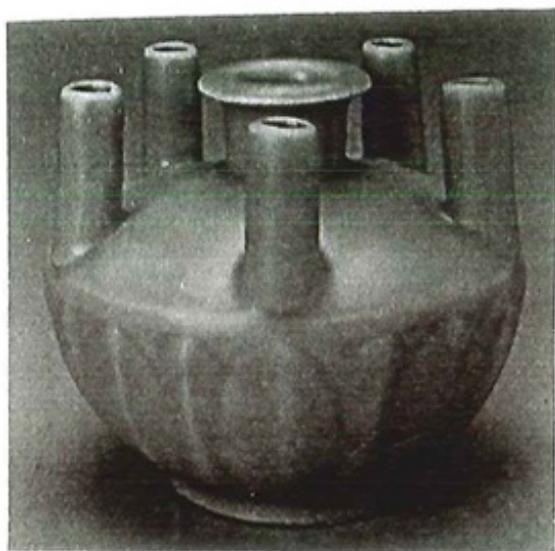
2



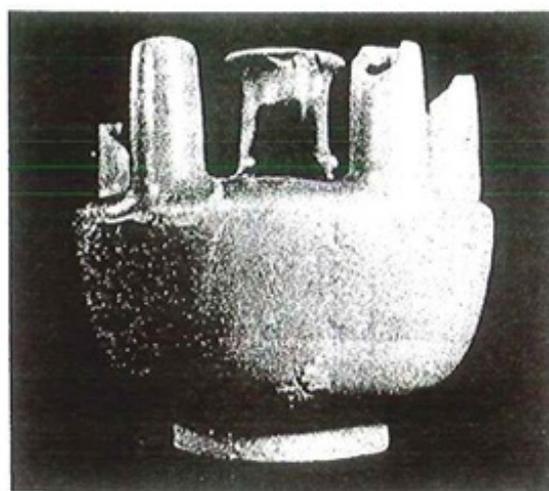
3



4

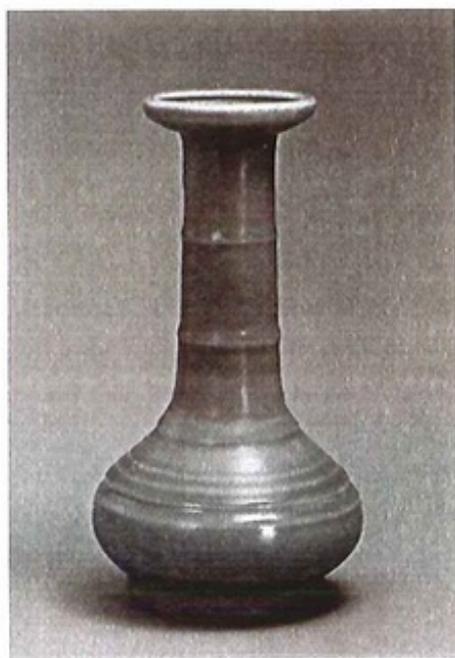


5

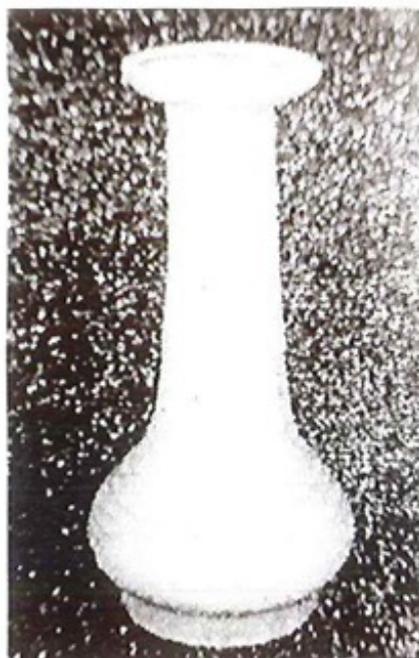


6

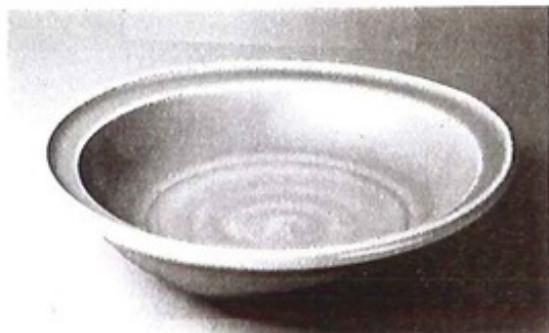
1: 簡陽東溪園芸場双耳炉 2: 遂寧窖藏双耳炉 3: 什放窖藏盂 4: 簡陽東溪園芸場盂 5: 遂寧窖藏五管瓶
6: 簡陽東溪園芸場五管瓶



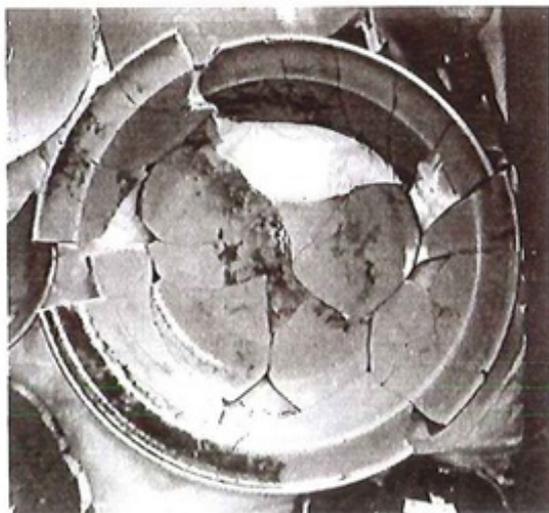
1



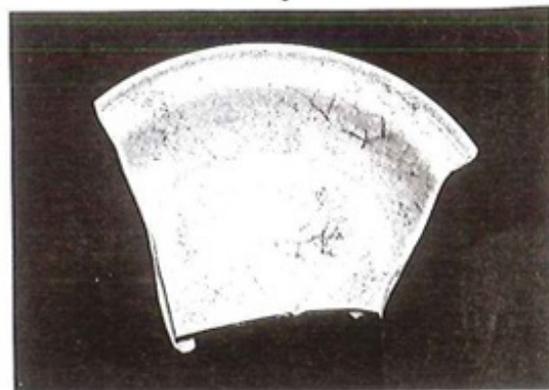
2



3



5

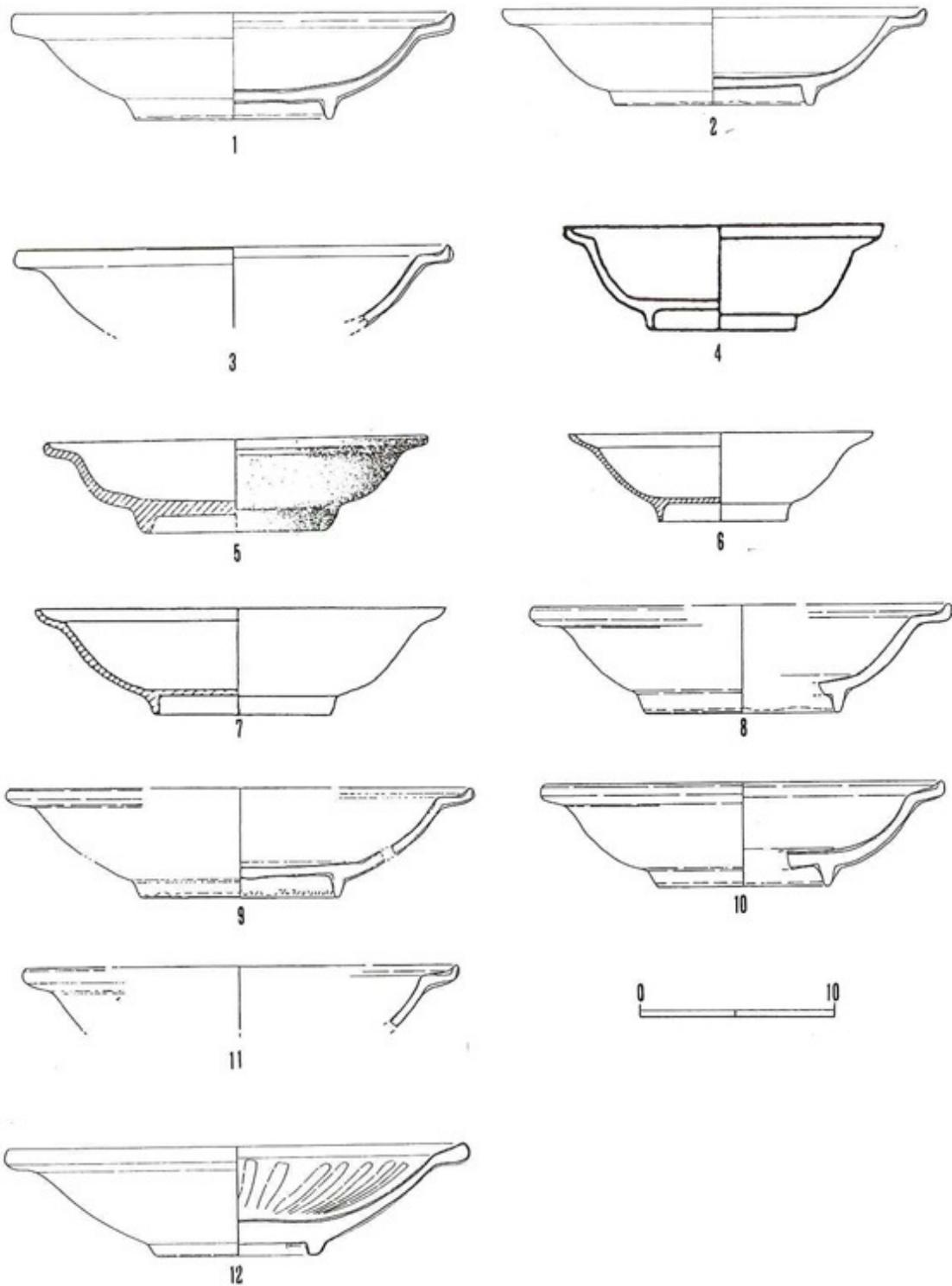


4

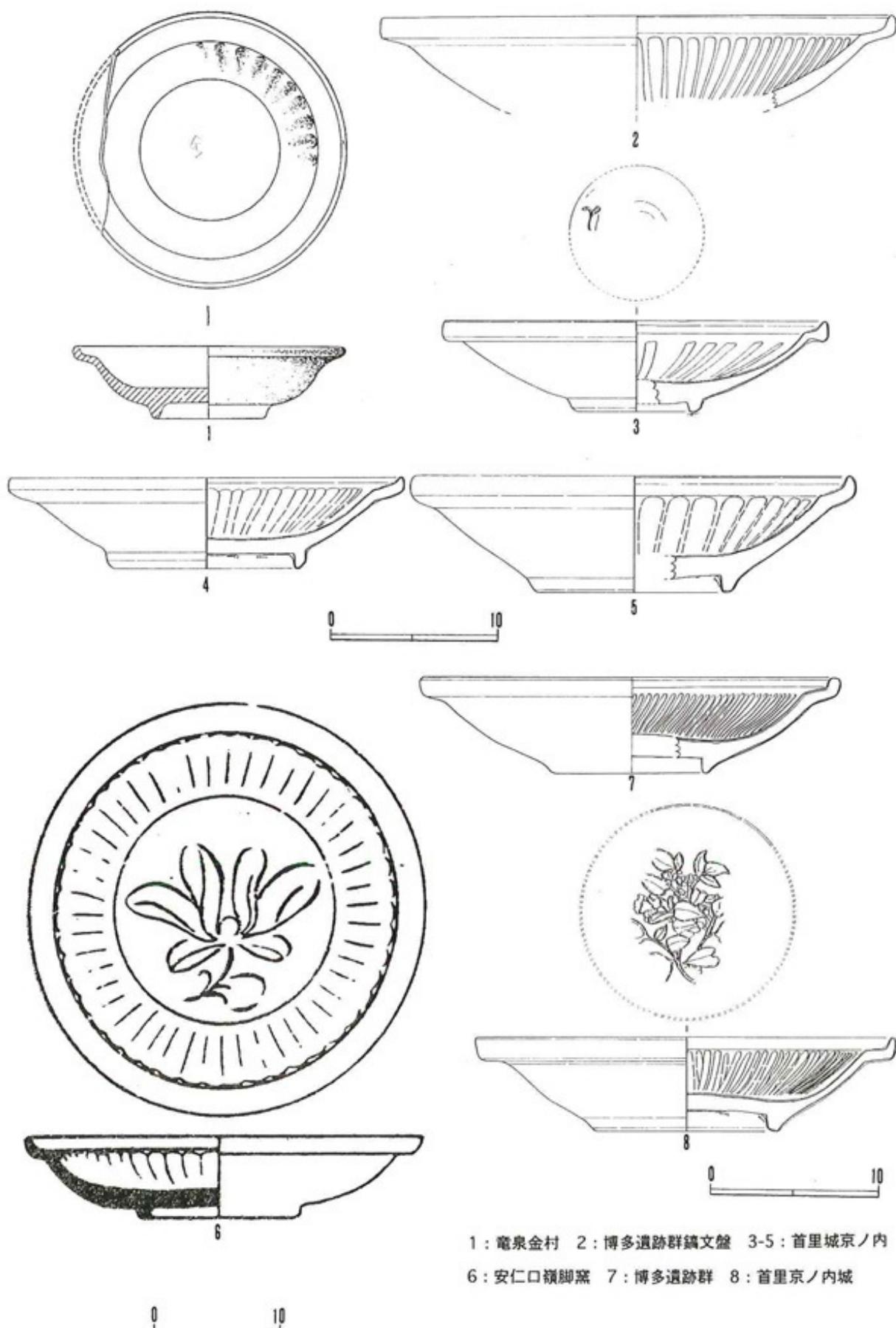


6

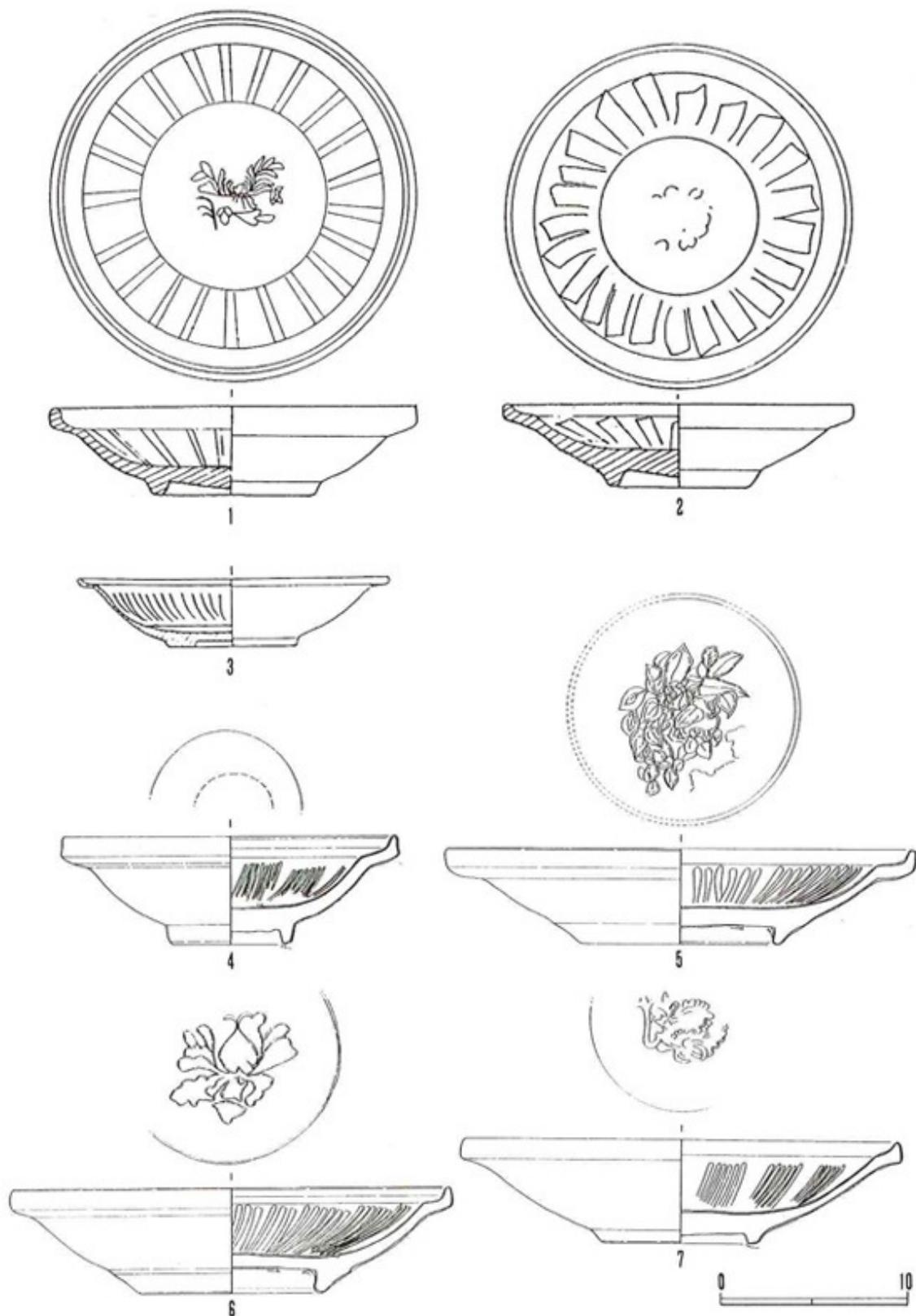
1: 遼寧省藏青瓷瓶 2: 什放省藏青瓷瓶 3: 五島美術館藏青瓷無文盤 4: 博多遺跡群青瓷無文盤
5: 佐助ヶ谷遺跡出土青瓷無文盤 6: 高安県省藏



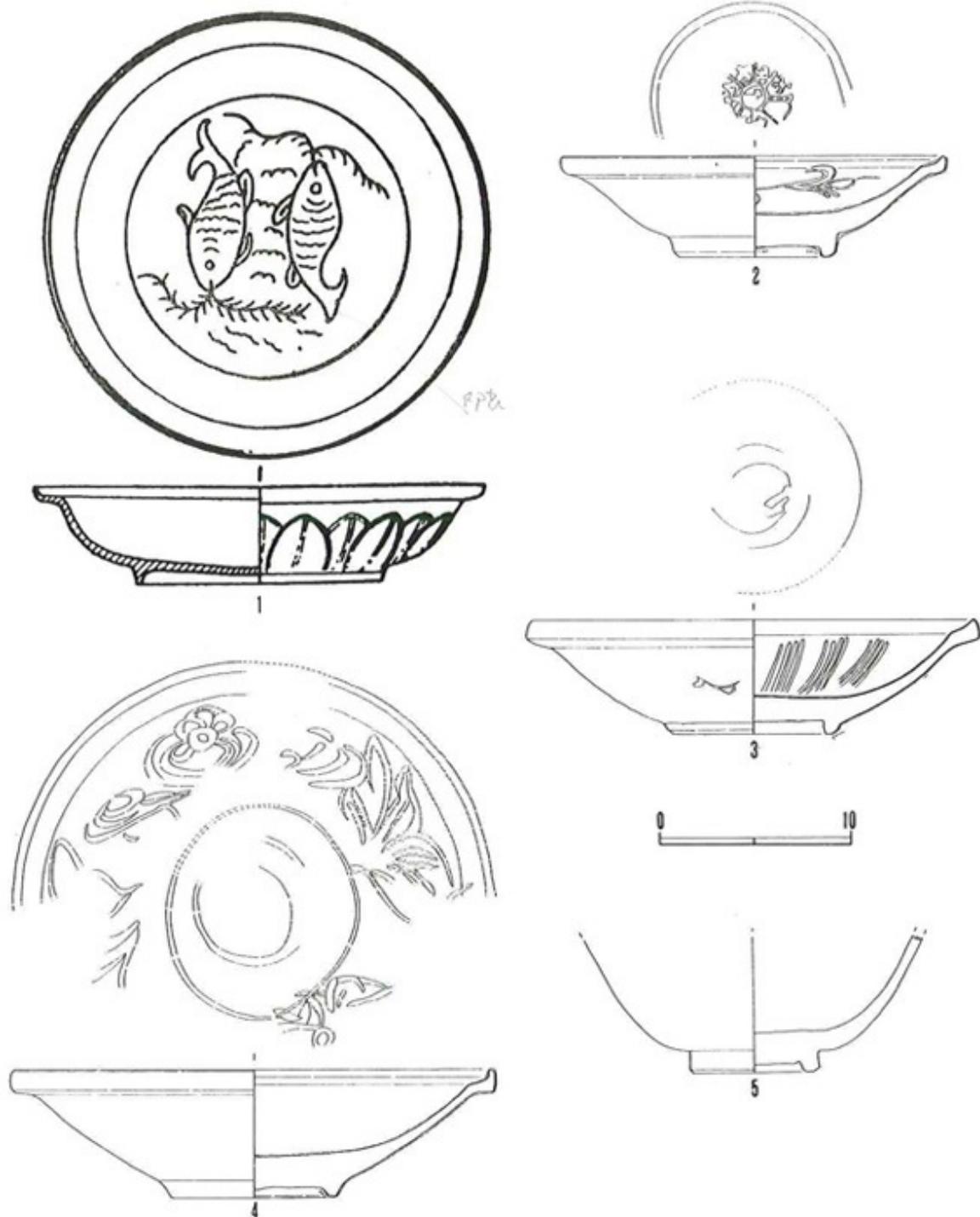
1: 博多遺跡群 2: 佐助ヶ谷遺跡 3: 草戸千軒 4: 上殿児村窯 5: 竜泉金村 6、7: 寧波唐国寧寺
8-11: 今小路西遺跡(北谷3面) 12: 首里城京ノ内



1: 竜泉金村 2: 博多遺跡群鎮文盤 3-5: 首里城京ノ内
6: 安仁口嶺脚窯 7: 博多遺跡群 8: 首里京ノ内城



1、2：中村廻揺村古瓷窯 3：葦波唐国寧寺 4-7：首里城京ノ内



1: 簡陽東漢園芸場印花双魚文盤 2-4: 首里城京ノ内 5: 博多遺跡群印花双魚文碗



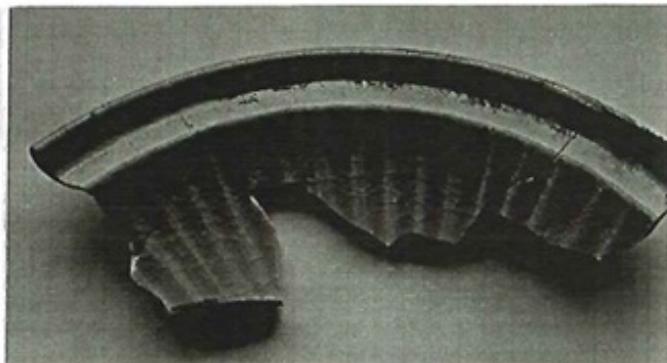
1



2



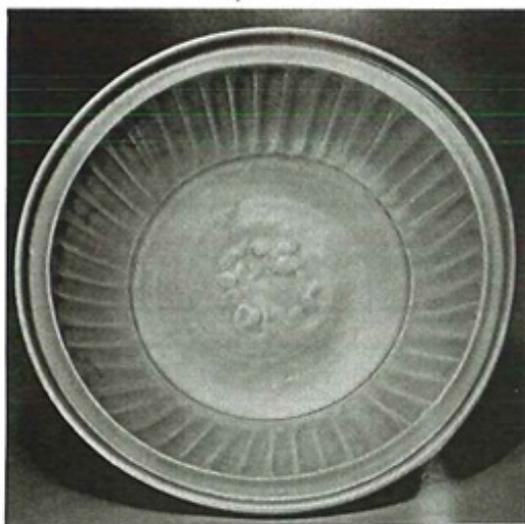
3



4



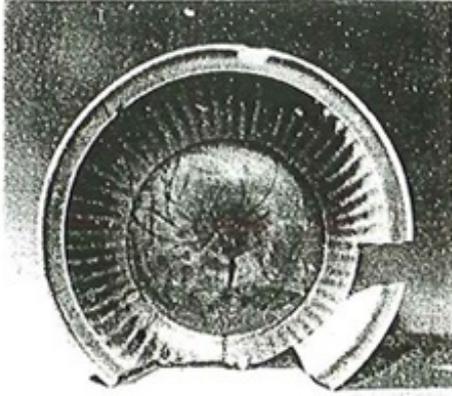
5



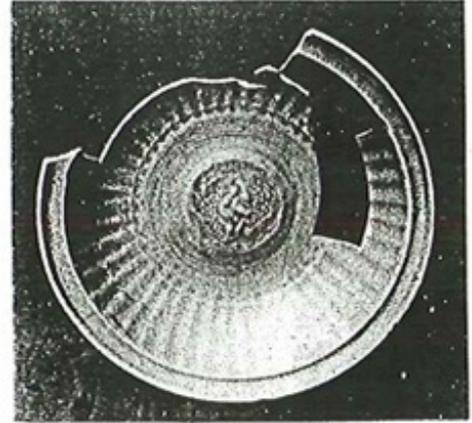
6

1: 町田市立博物館 2、3: 新安海底沈船遺跡 4: 博多遺跡群 5: 江西朱由木墓(崇禎7年(1634)没)
6: 青田縣鶴城鎮窖藏

内卷弁花文



1



2



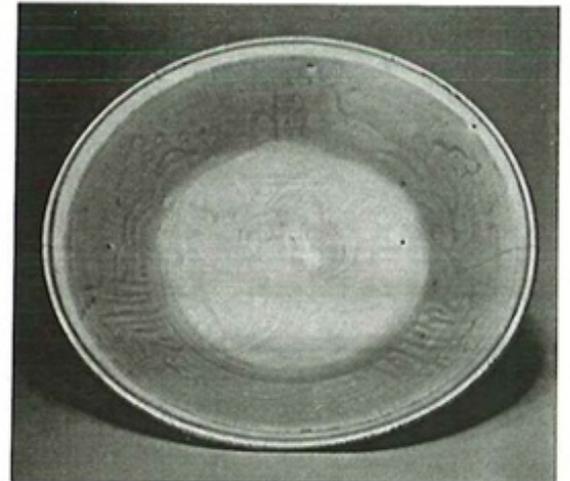
3



4

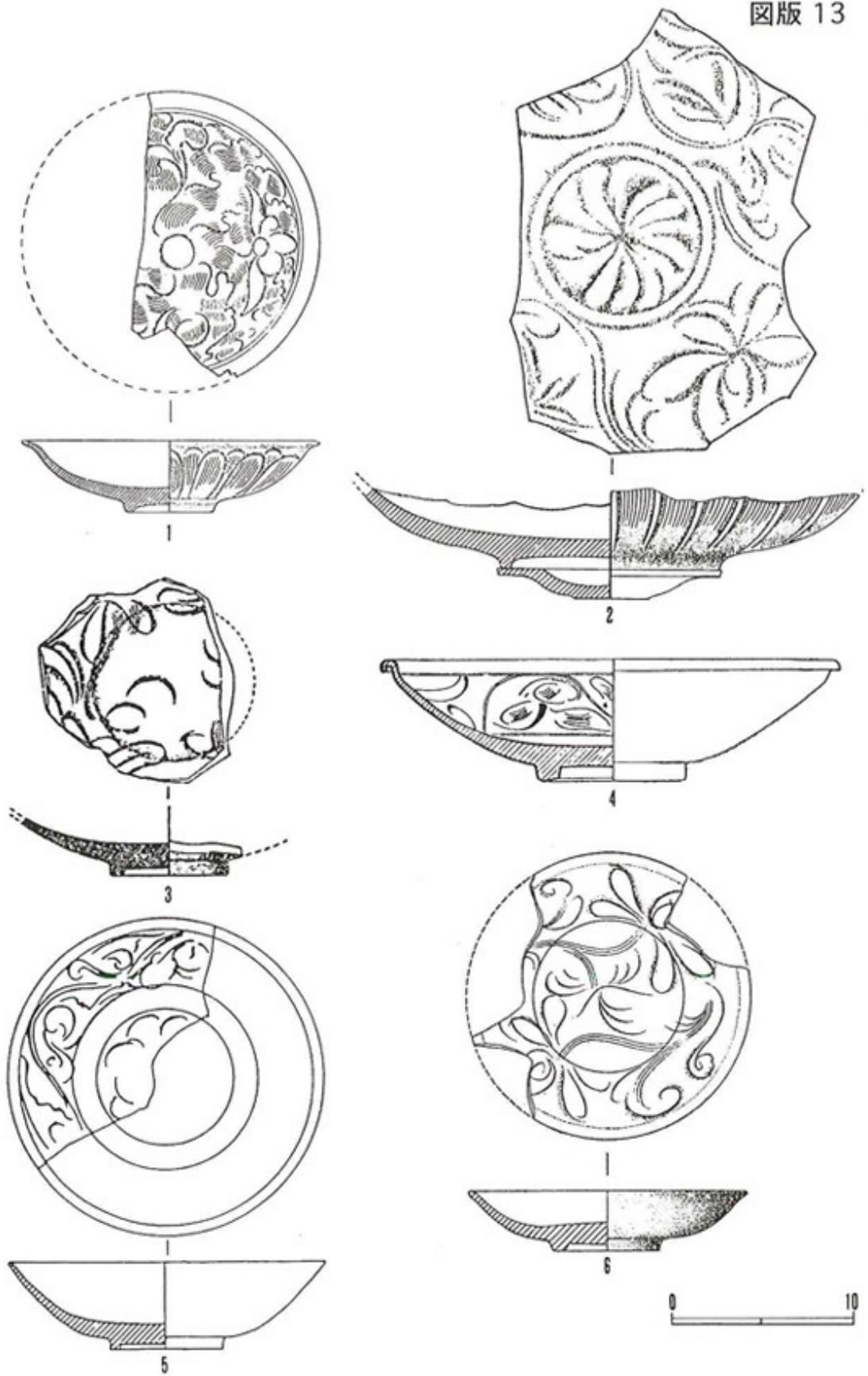


5

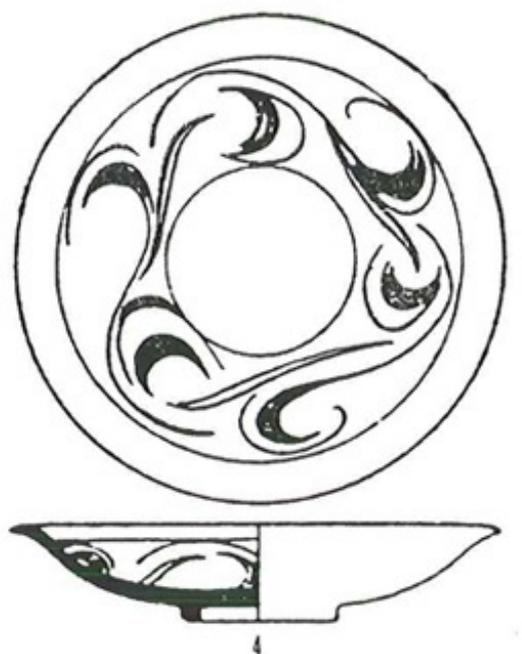
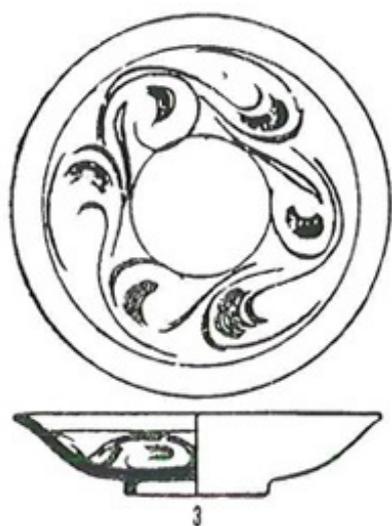
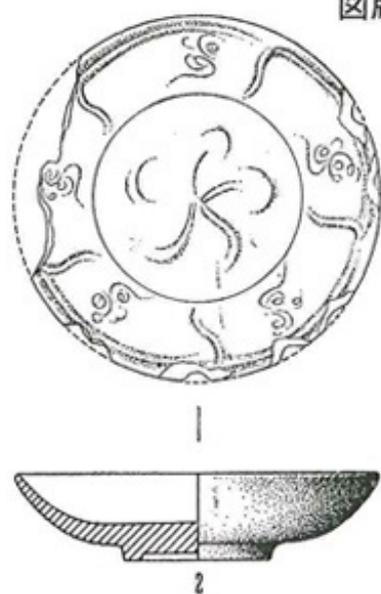


6

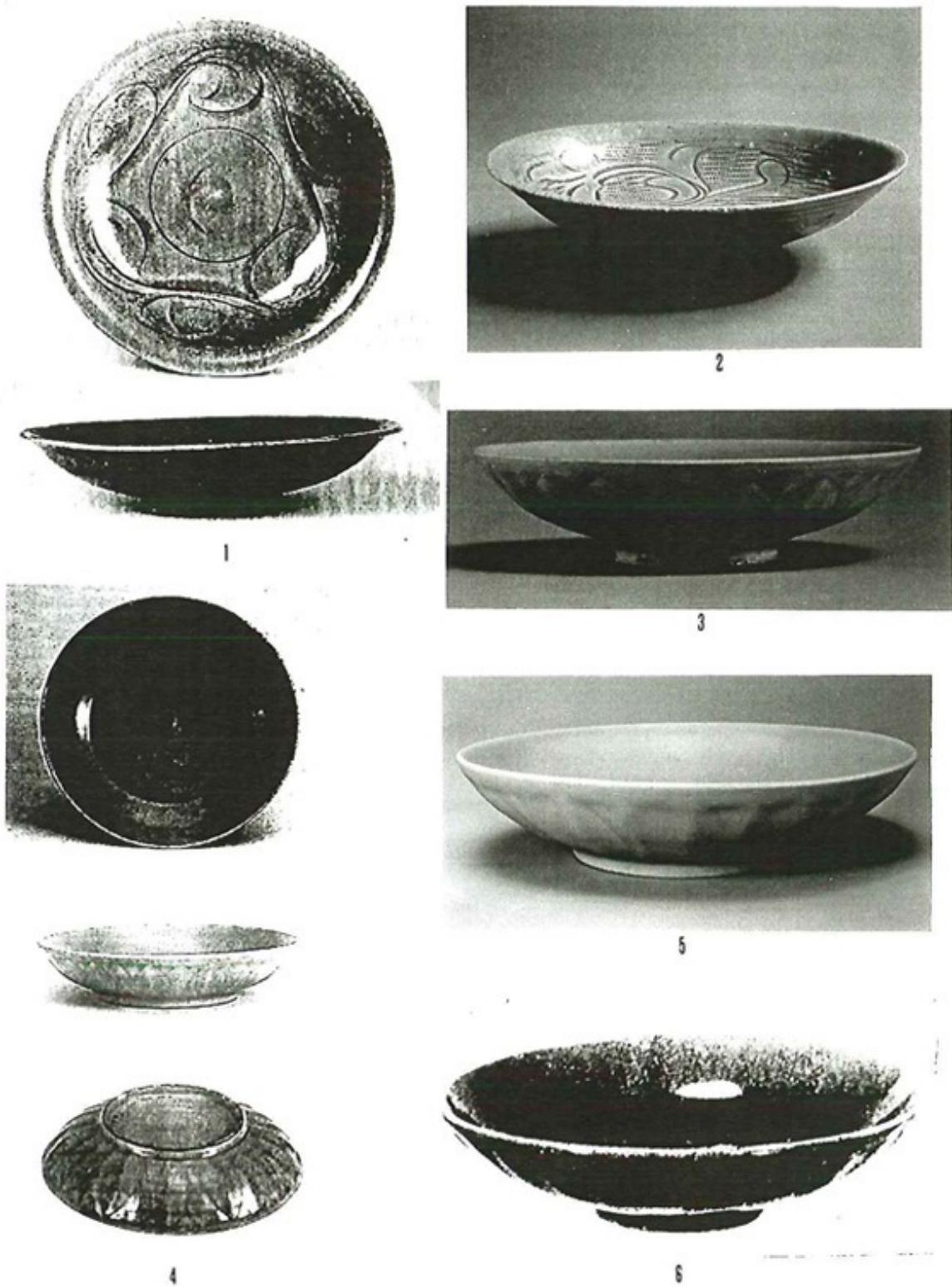
1、2：杭州窖藏 3：新安海底沈船遺跡 4：博多遺跡群 5：デイビッド財団コレクション 6：竜泉市玉荘村



1、2：竜泉大窯 3：竜泉溪口窯 4：竜泉安福窯 5：寧波唐国寧寺 6：竜泉金村

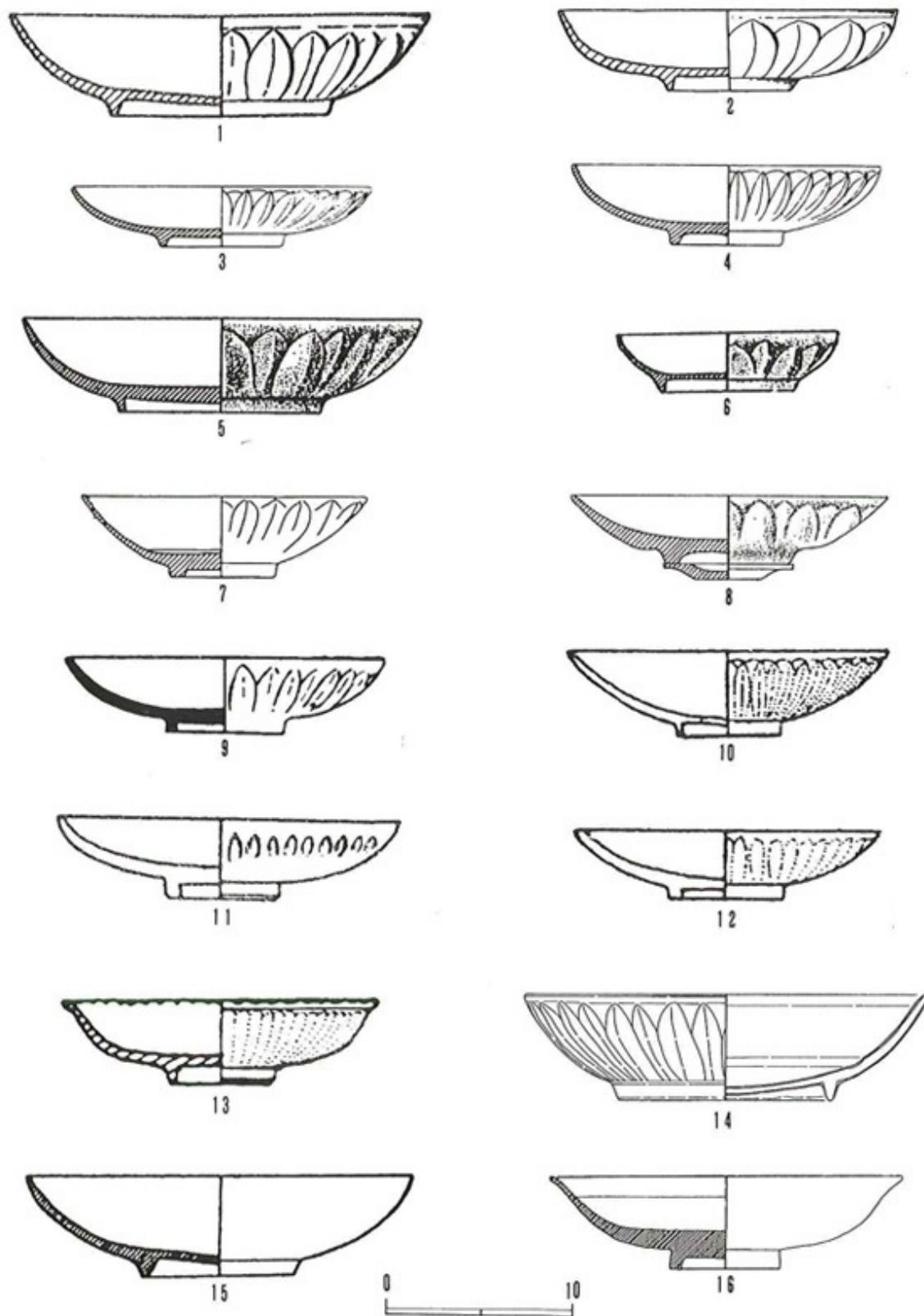


1: 安仁口入窯湾3号 2: 竜泉金村 3: 安仁口碗圈山2号窯 4: 安仁口碗圈山3号窯

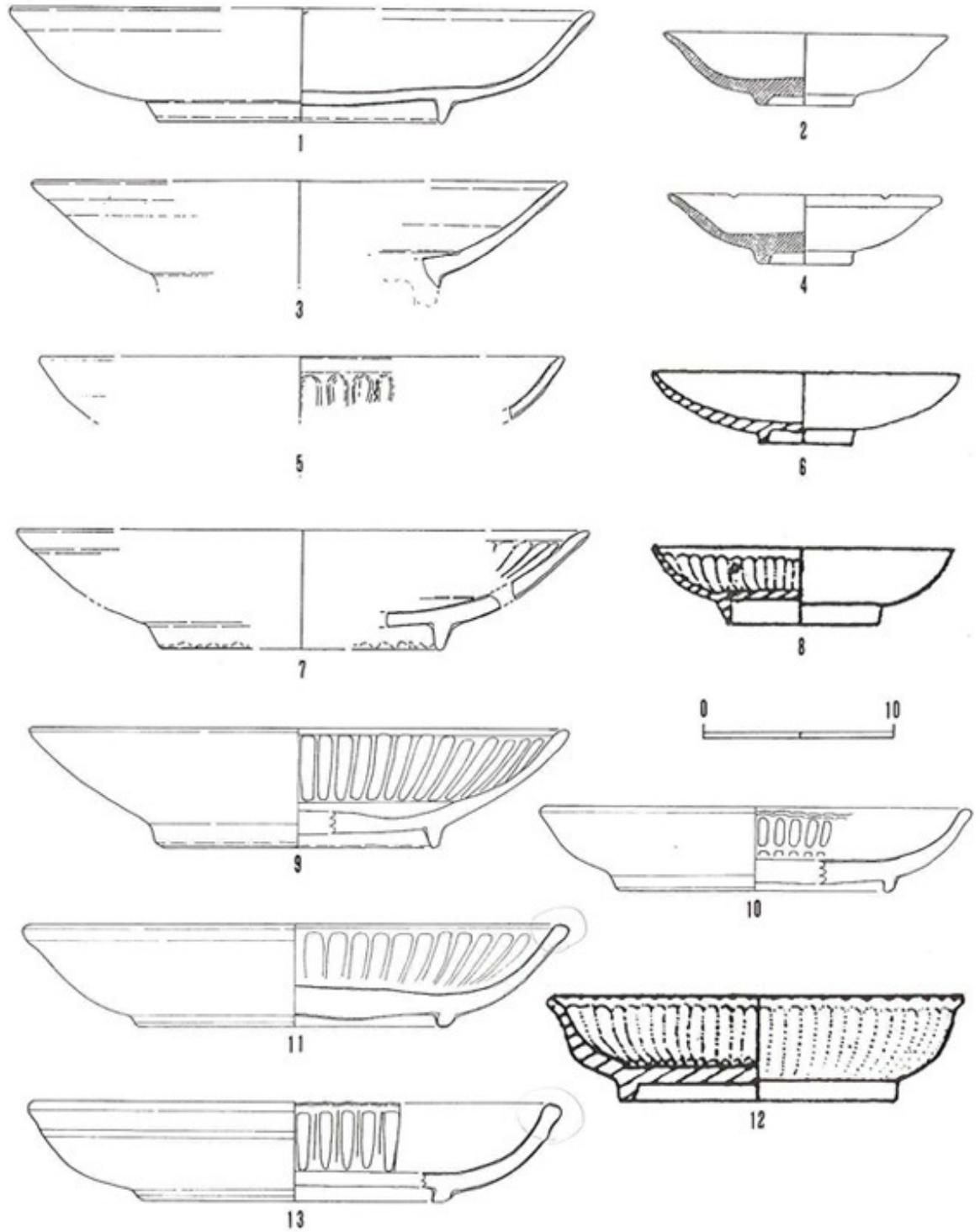


图版15

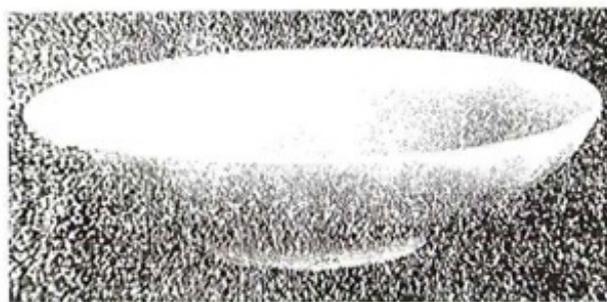
1: 新安海底沈船遺跡 2: 深圳青瓷博物館青瓷刻花盤 3: 遼寧窖藏 4: 新安海底沈船遺跡 5: 開陽東漢園芸場
6: 桃江窖藏



1、2：簡陽東溪園芸場 3、4：桃江窖藏 5、6：繆家橋井1 7：寧波唐國寧寺 8：龜泉大窯 9：安仁口碗園山3号
10-13：上巖兒窯 14：佐助ヶ谷遺跡第5期建物5 15：簡陽東溪園芸場 16：鎮江市吳家門建築遺址



1: 今小路西遺跡 (南谷3面) 2: 竜泉大窯 3: 今小路西遺跡 (南谷3面) 4: 竜泉大窯 5: 今小路西遺跡 (南外周部4面) 6: 上巖児窯 7: 今小路西遺跡 (南谷3面) 8: 上巖児窯 9-10: 博多遺跡群 11: 堺環濠都市遺跡 12: 上巖児窯 13: 博多遺跡群



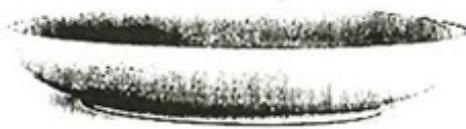
1



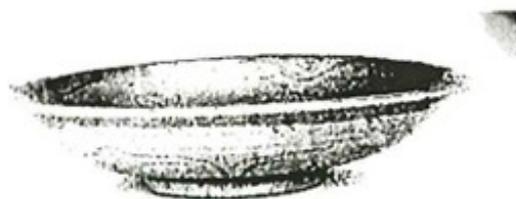
3



2



4

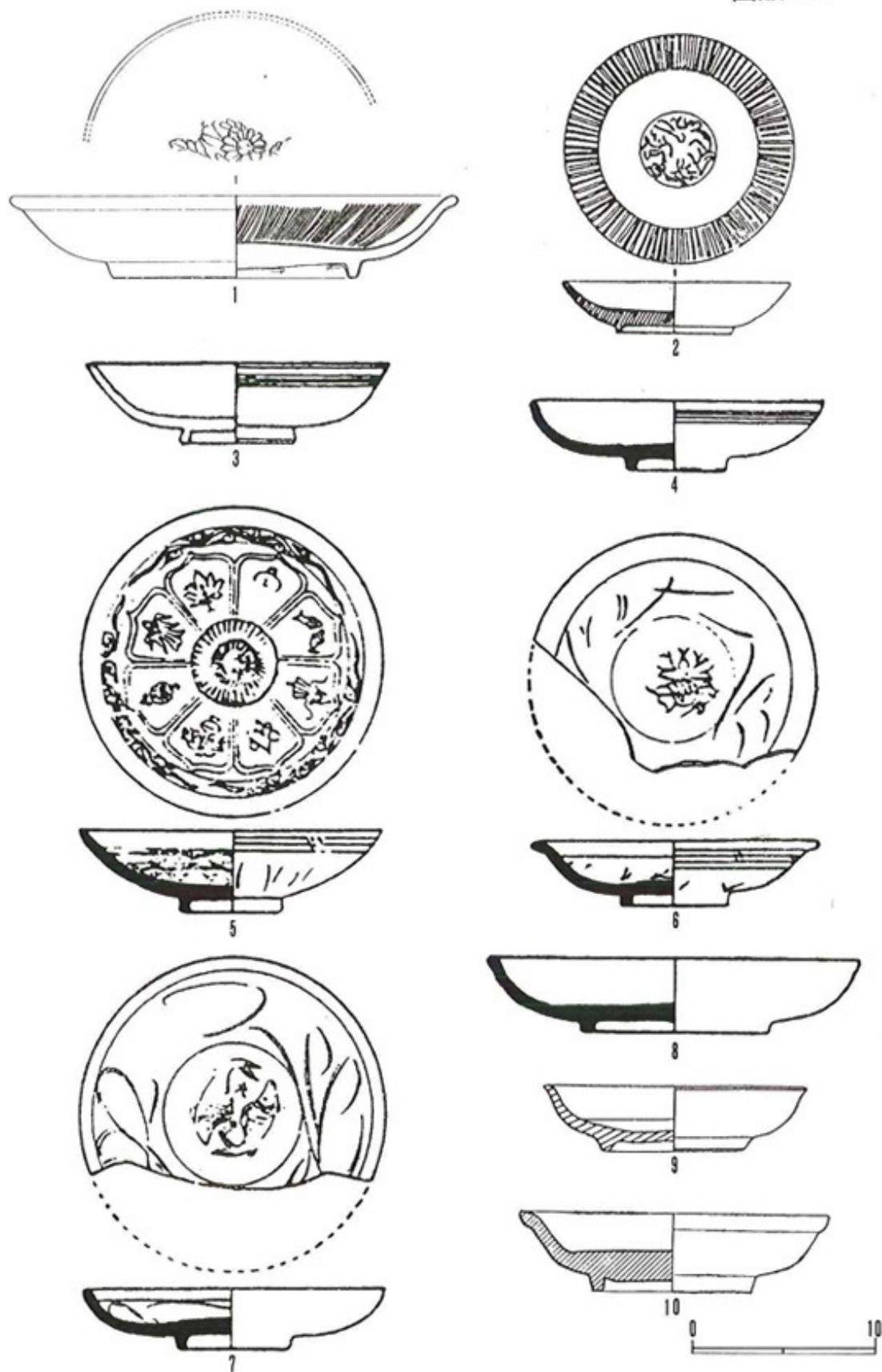


5

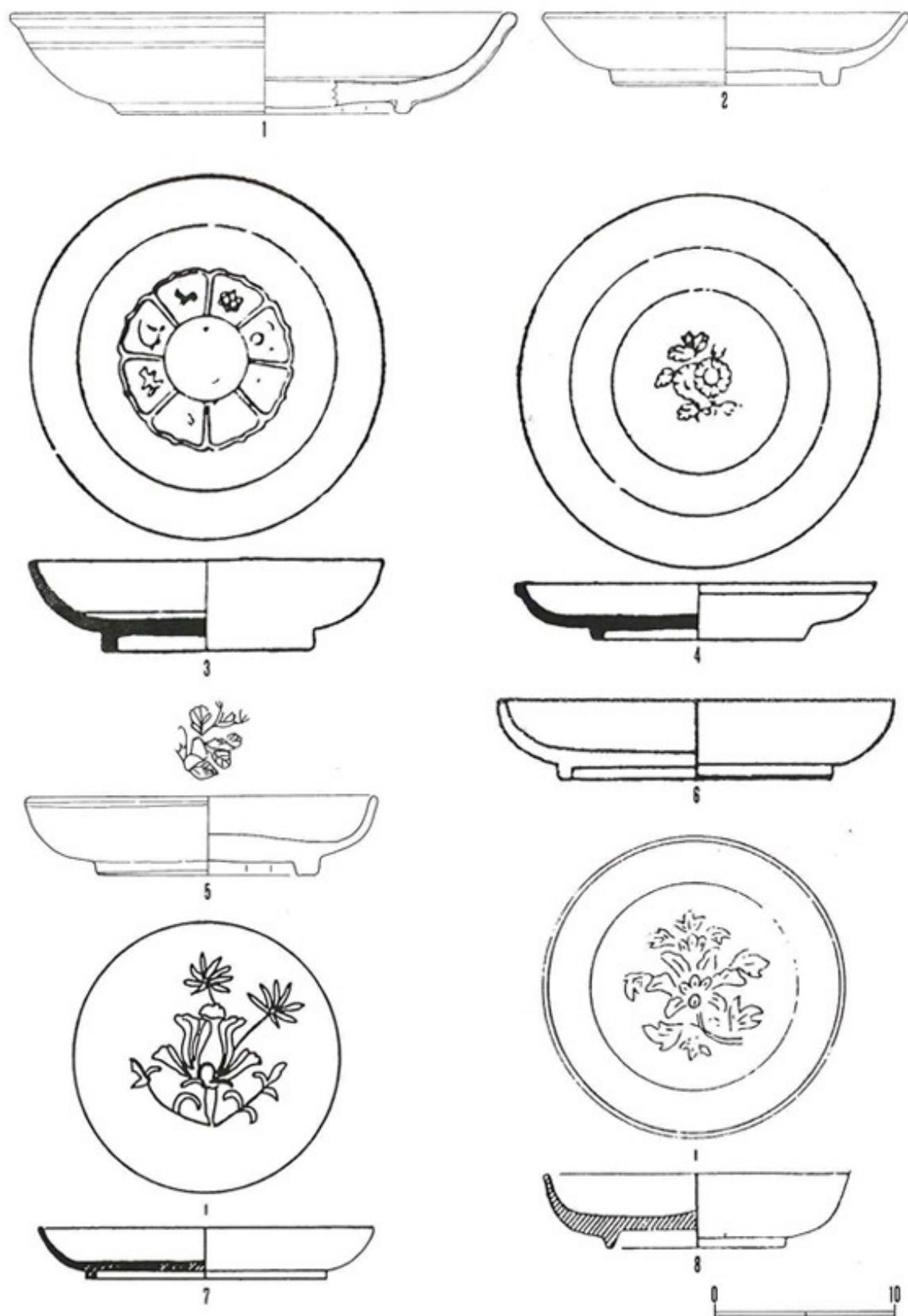


6

1: 什放窖藏 2、3: 博多遺跡群 4-6: 新安海底沈船遺跡



1: 首里城京ノ内 2: 南京伊西村明墓 3: 上殿児窯 4: 安仁口碗圈山2号 5-7: 安仁口横脚窯 8: 安仁口碗圈山;
号 9: 柏林坊水流湾 10: 安福窯明代遺物



1、2：博多遺跡群 3、4：安仁口入窯灣2号 5：博多遺跡群 6：上巖兒窯 7：鎮江市吳家門 8：鎮江市



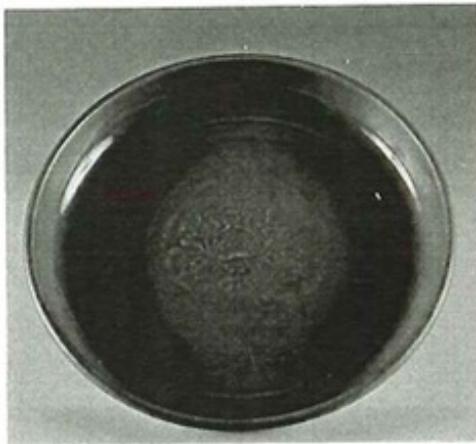
1



2



3



4

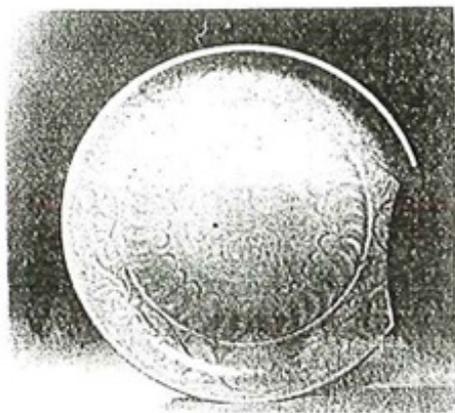


5

1、2：博多遺跡群 3：堺環濠都市遺跡 4、5：友ヶ島海底



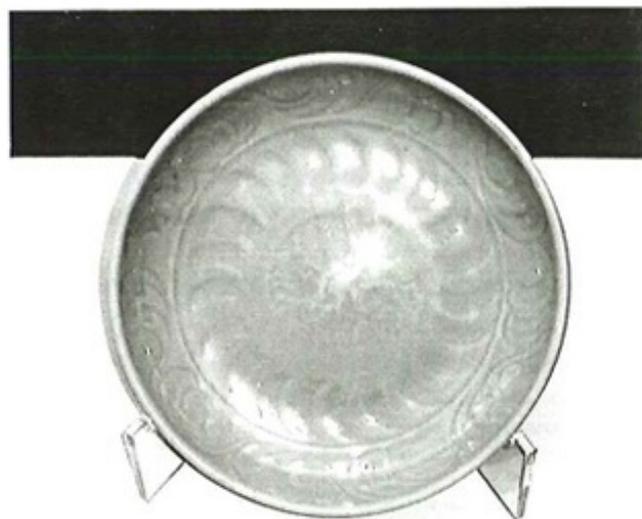
1



2



3



4



5

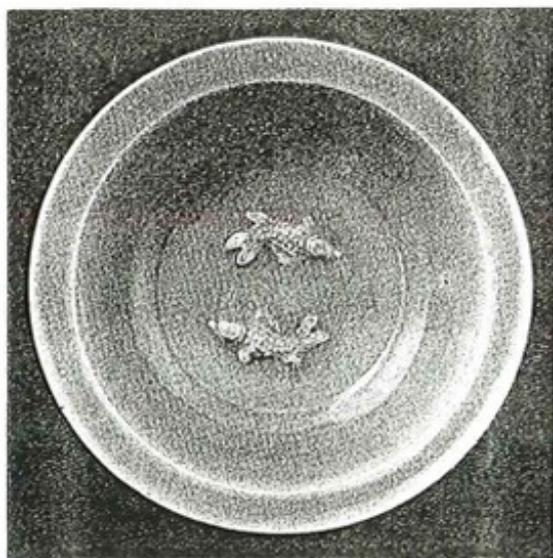


6

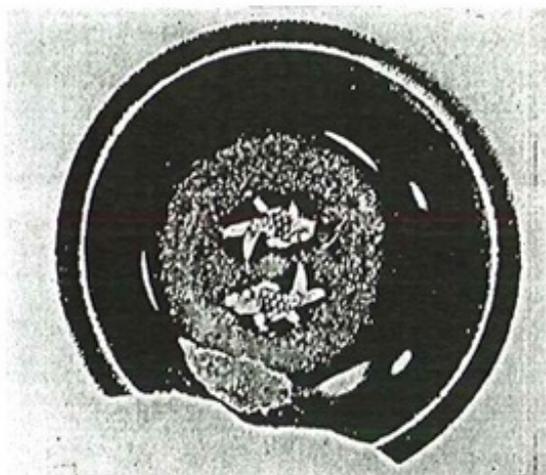
1: 湖州市博物館 2: 杭州窖藏 3: 出光美術館 4: 神奈川県立歴史博物館 5: ジャカルタ国立博物館



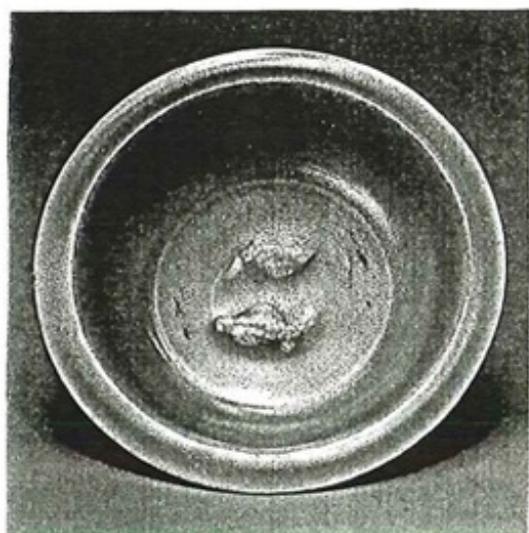
1-3：安仁口横脚窯 4：鎮江市



1



2



3



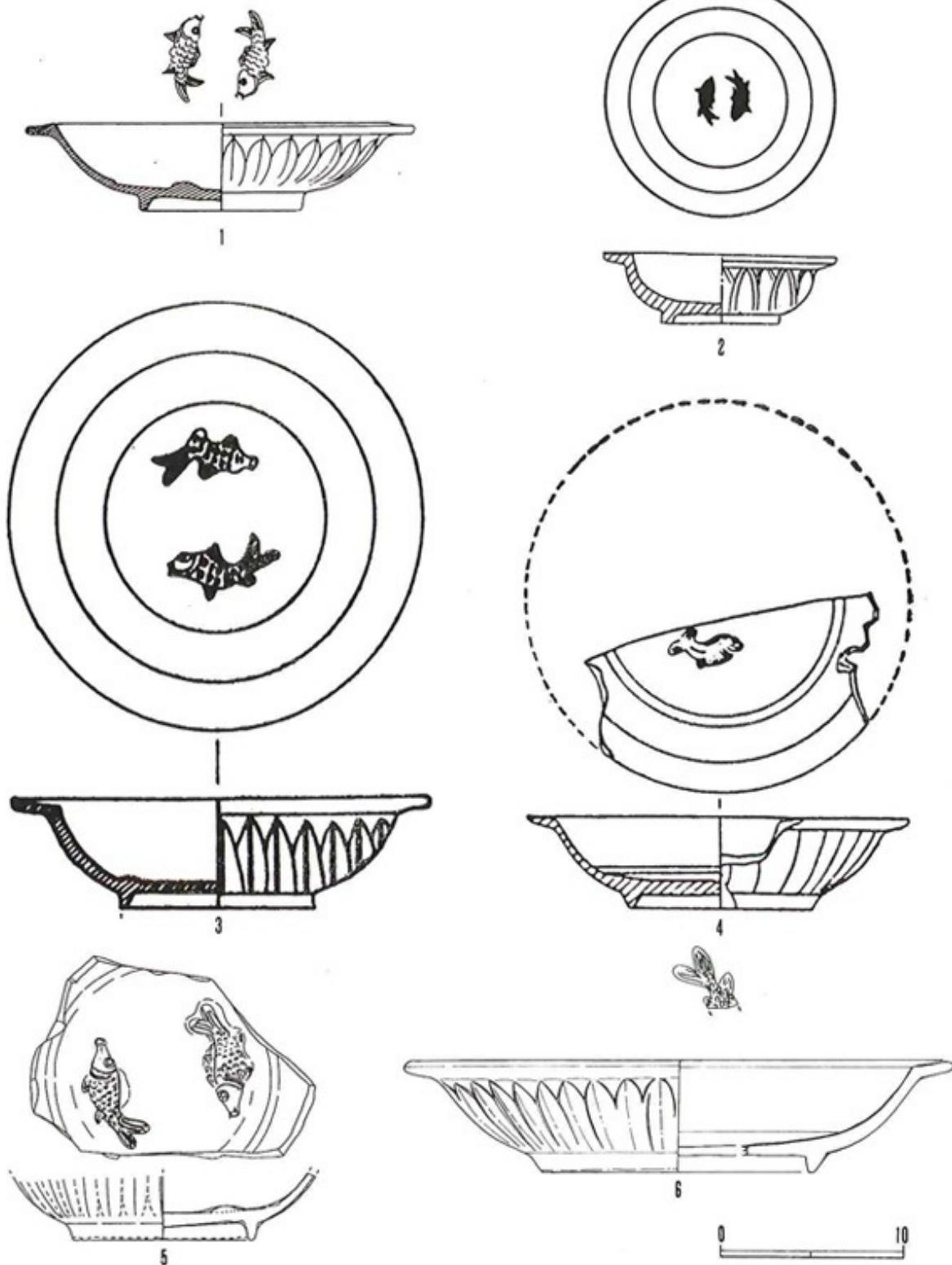
4



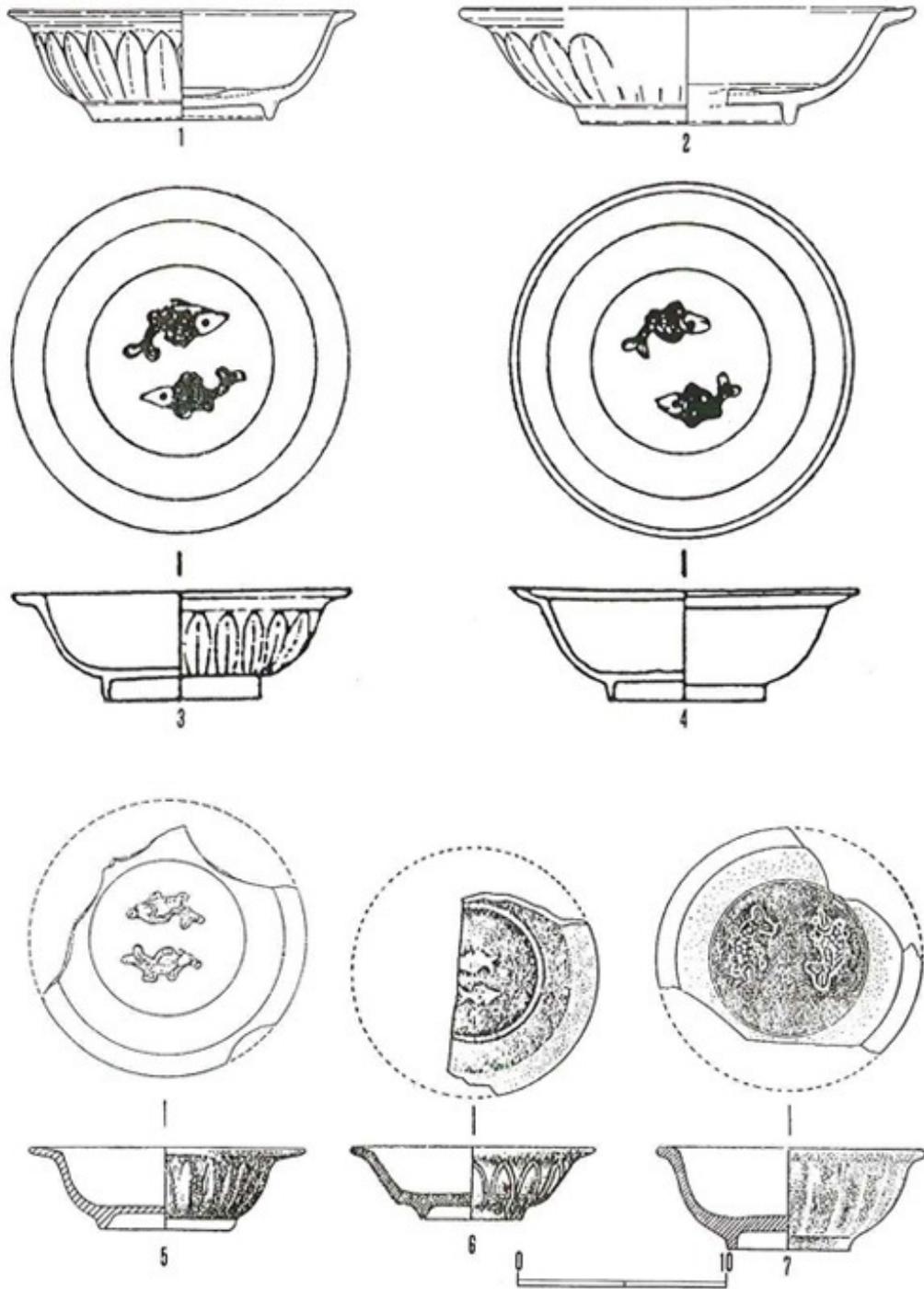
5



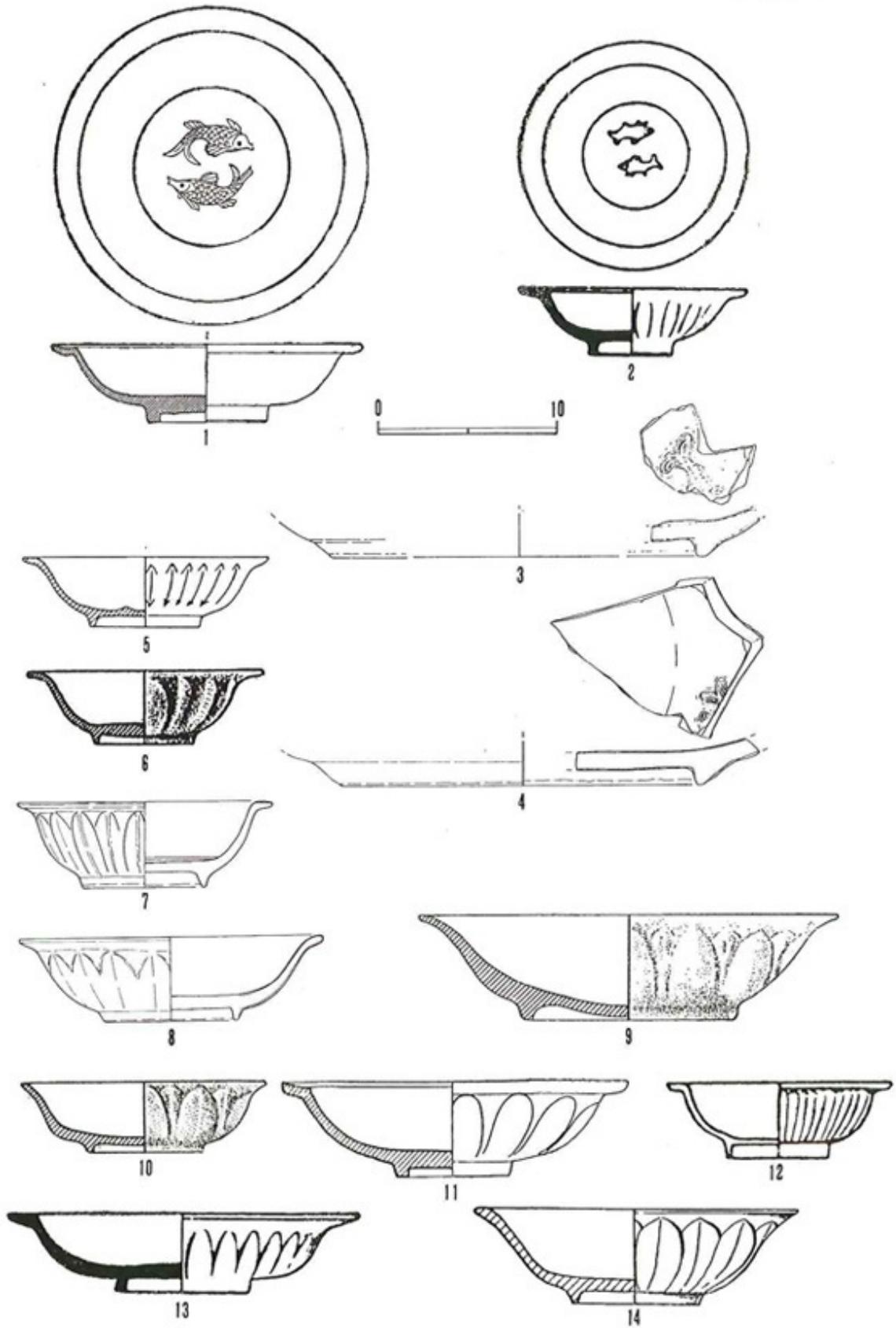
6



1: 桃江窖藏 2: 樂安県窖藏 3: 山東濰博 4: 泉州清淨寺奉天壇基 5: 今小路西遺跡 (北谷3面)
6: 佐助ヶ谷遺跡



1、2：今小路西遺跡 3、4：上殿兒窯 5：竜泉金村 6：竜泉溪口窯 7：竜泉大窯



1: 遼寧義泉 2: 安仁口嶺脚窯 3: 今小路西遺跡(南外周部1面) 4: 藏屋敷遺跡(井戸3) 5: 寧波唐國寧寺
6: 紹興樺家橋 7、8: 佐助ヶ谷 9、10: 竜泉大窯 11: 安福窯 元代遺物 12: 上殿兒窯 13: 安仁口碗園山2号



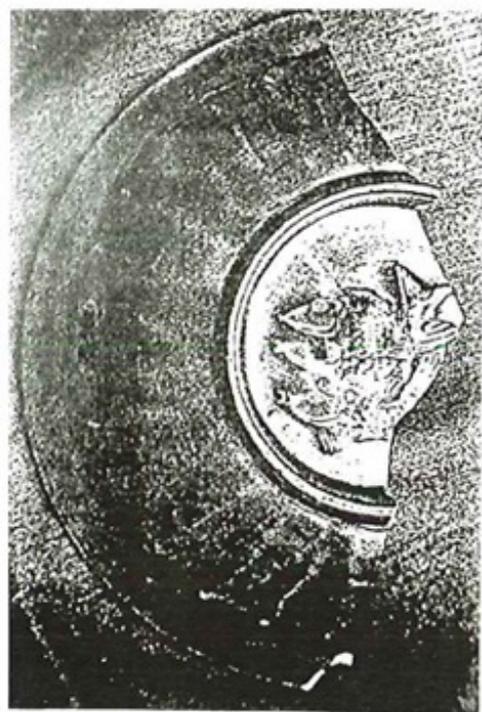
1



2

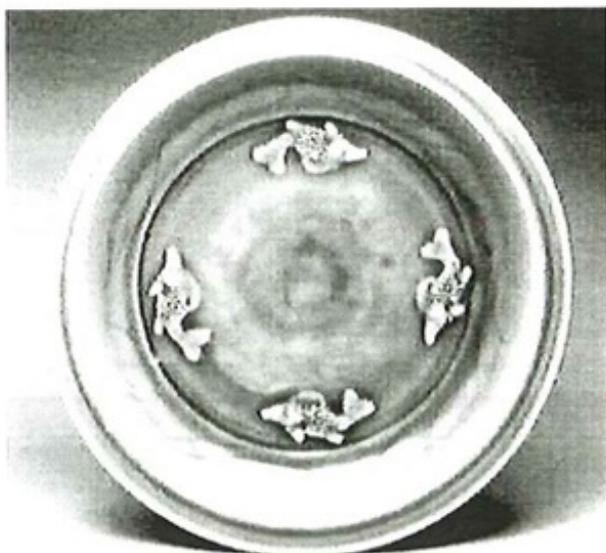


3



4

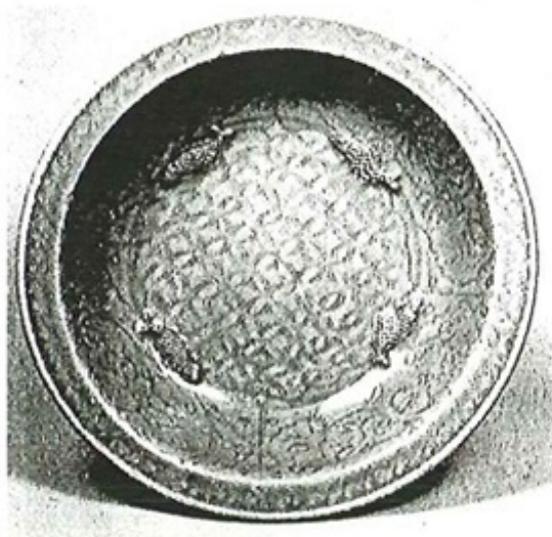
1-3 : 新安海底沈船遺跡 4 : スマトラ島



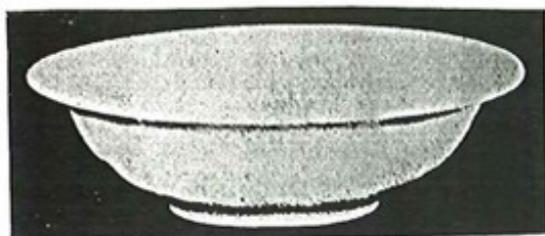
1



2



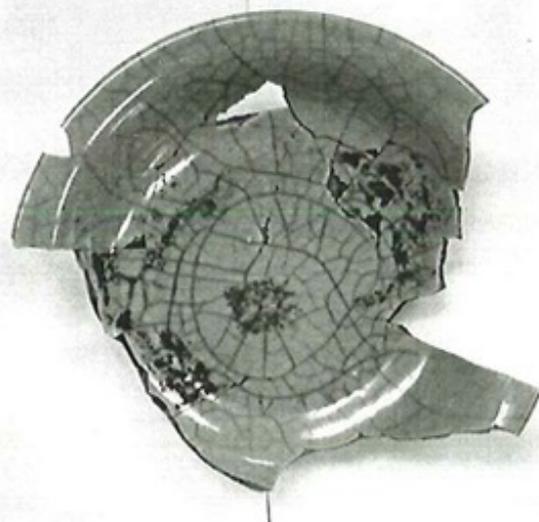
3



4

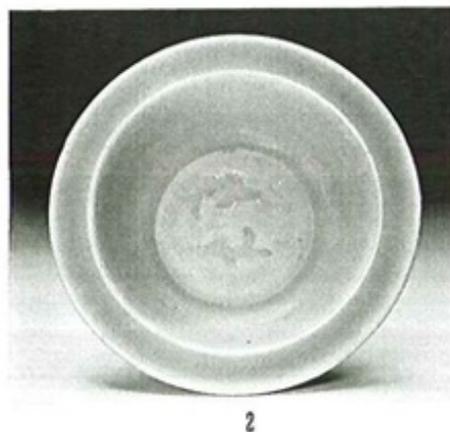


5



6

1: デイビッド財団コレクション 2: ジャカルタ国立
博物館 3: 出光美術館 4: 簡陽東漢園芸場
5、6: 佐助ヶ谷遺跡



1: 新安海底沈船遺跡 2: 武義県博物館 3: トプカブ宮殿 4: デイビッド財団コレクション



1



2



3



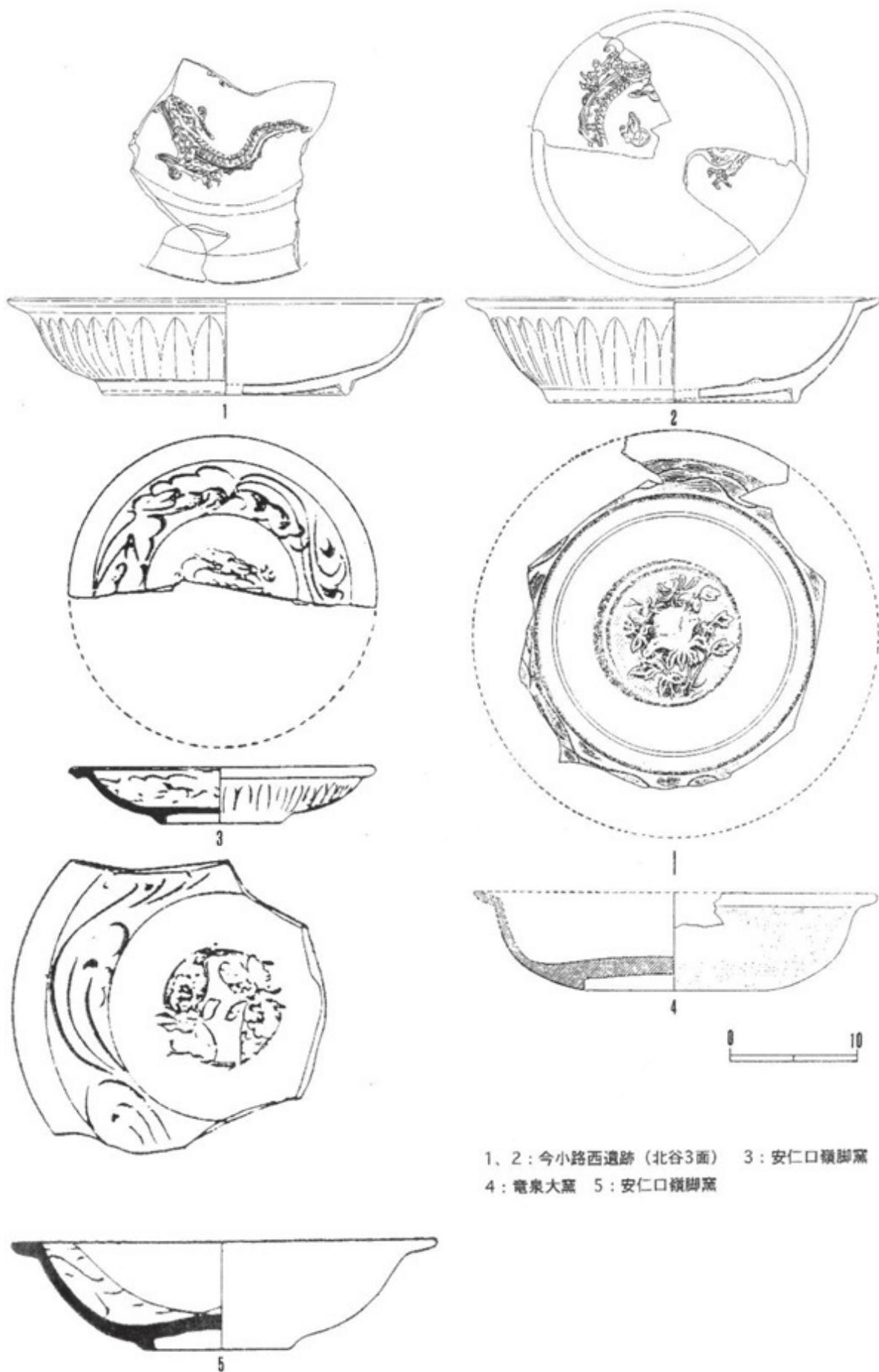
4



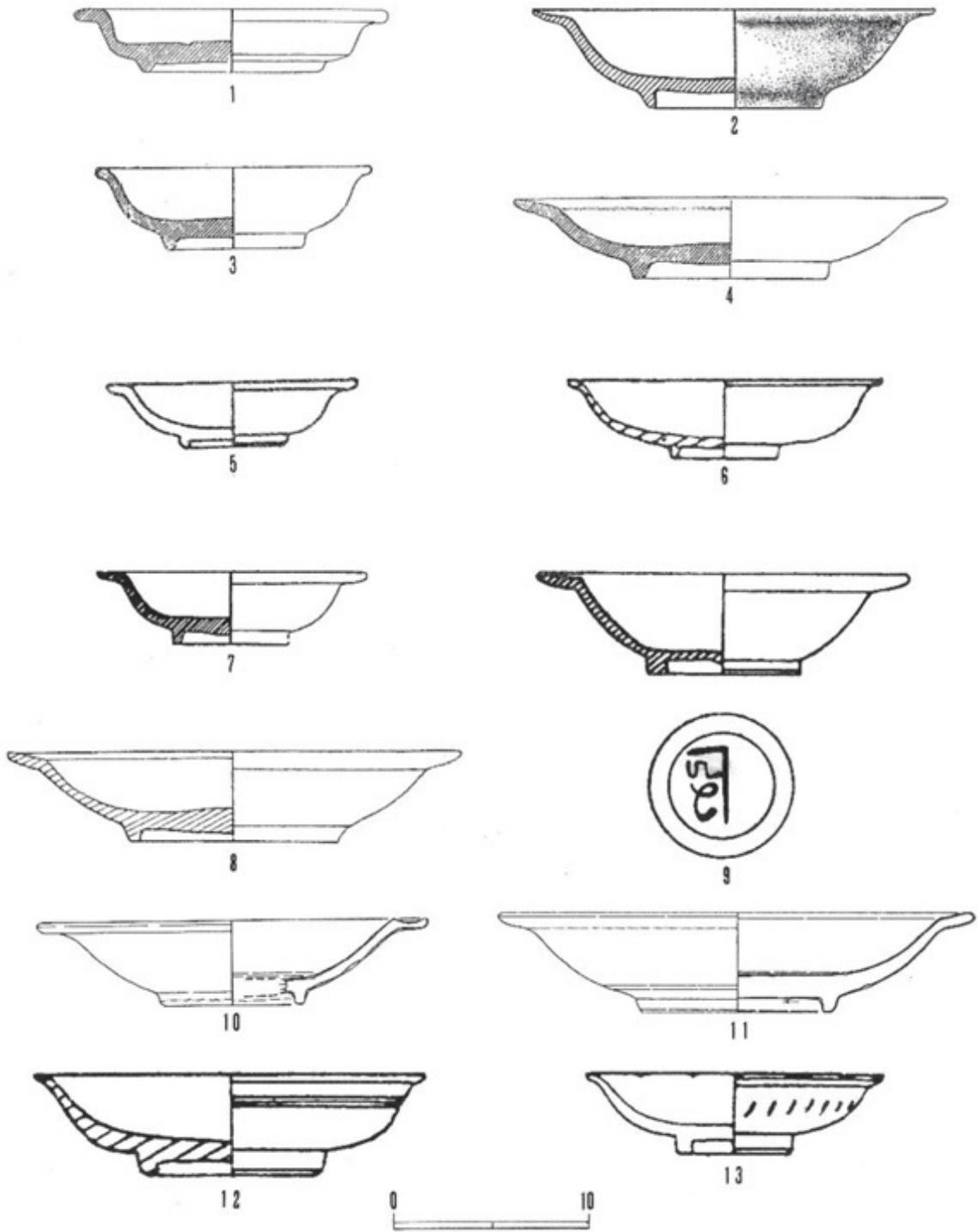
1: 首都博物館 2: ジャカルタ国立博物館
3、4: トプカブ宮殿 5: 広東省博物館



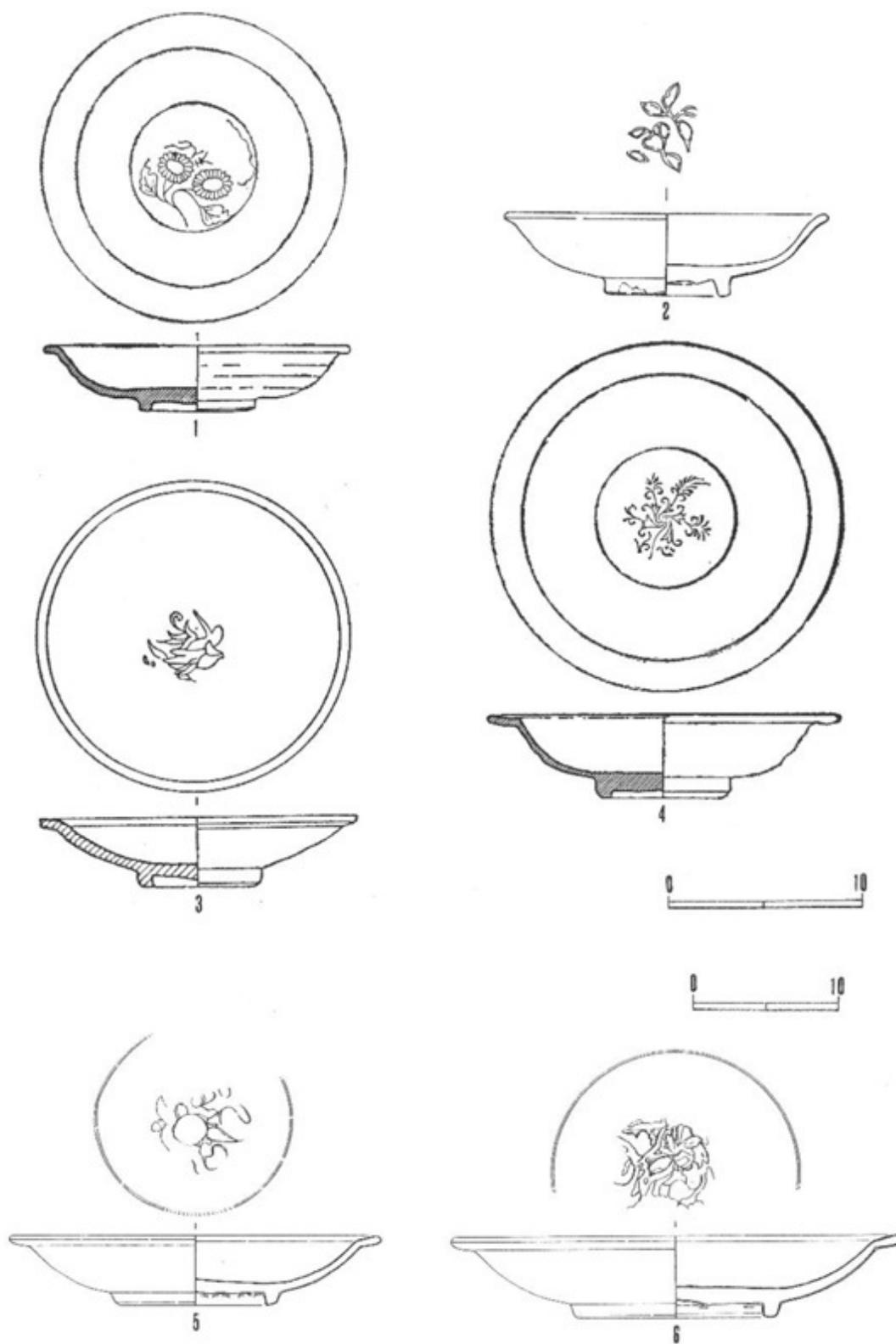
1、2：新安海底沈船遺跡 3：デイビッド財団コレクション 4：トプカブ宮殿



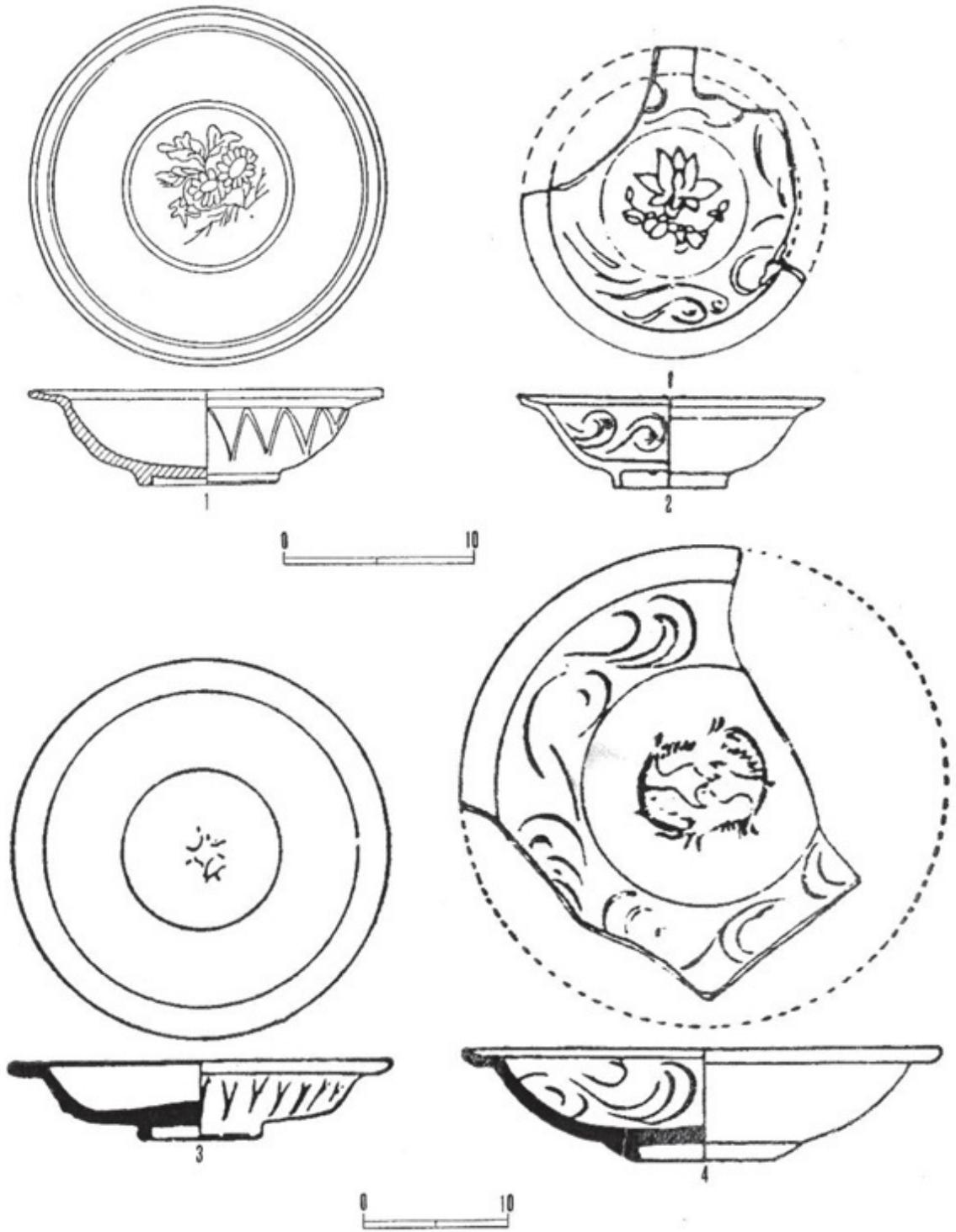
1、2：今小路西遺跡（北谷3面） 3：安仁口横脚窯
4：竜泉大窯 5：安仁口横脚窯



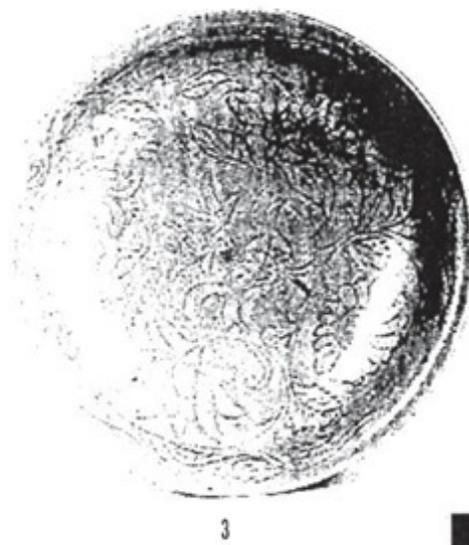
1-4: 竜泉大窯 5, 6: 上殿児窯 7: 鎮江市呉家門 8: 中村廻揺 9: 山東濰博 10: 草戸千軒 11: 首里城京ノ内
12, 13: 上殿児窯



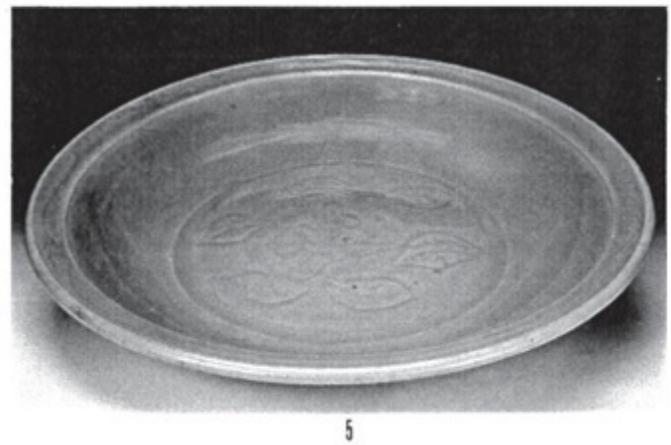
1: 遼寧義泉 2: 草戸千軒 3: 南開河村元代木船 4: 遼寧義泉 5、6: 首里城京ノ内

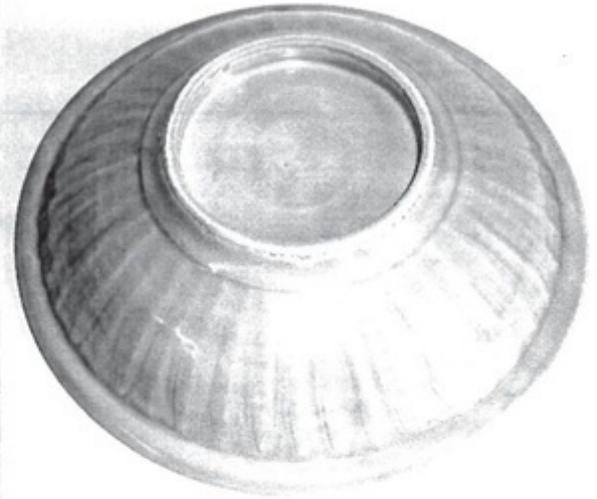
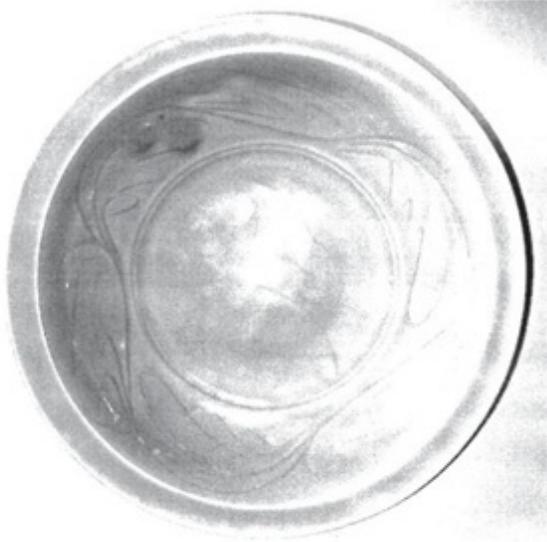


1：南開河村元代木船 2：上巖児窯 3：安仁口入窯湾3号 4：安仁口嶺脚窯

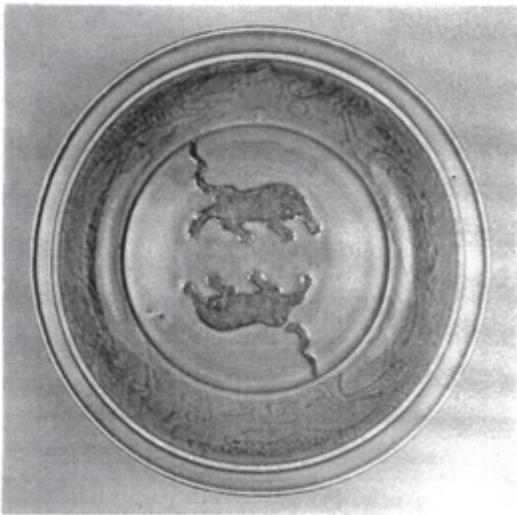


1-3 : 新安海底沈船遺跡
4 : トブカブ宮殿
5 : 寧波市博物館





1



2

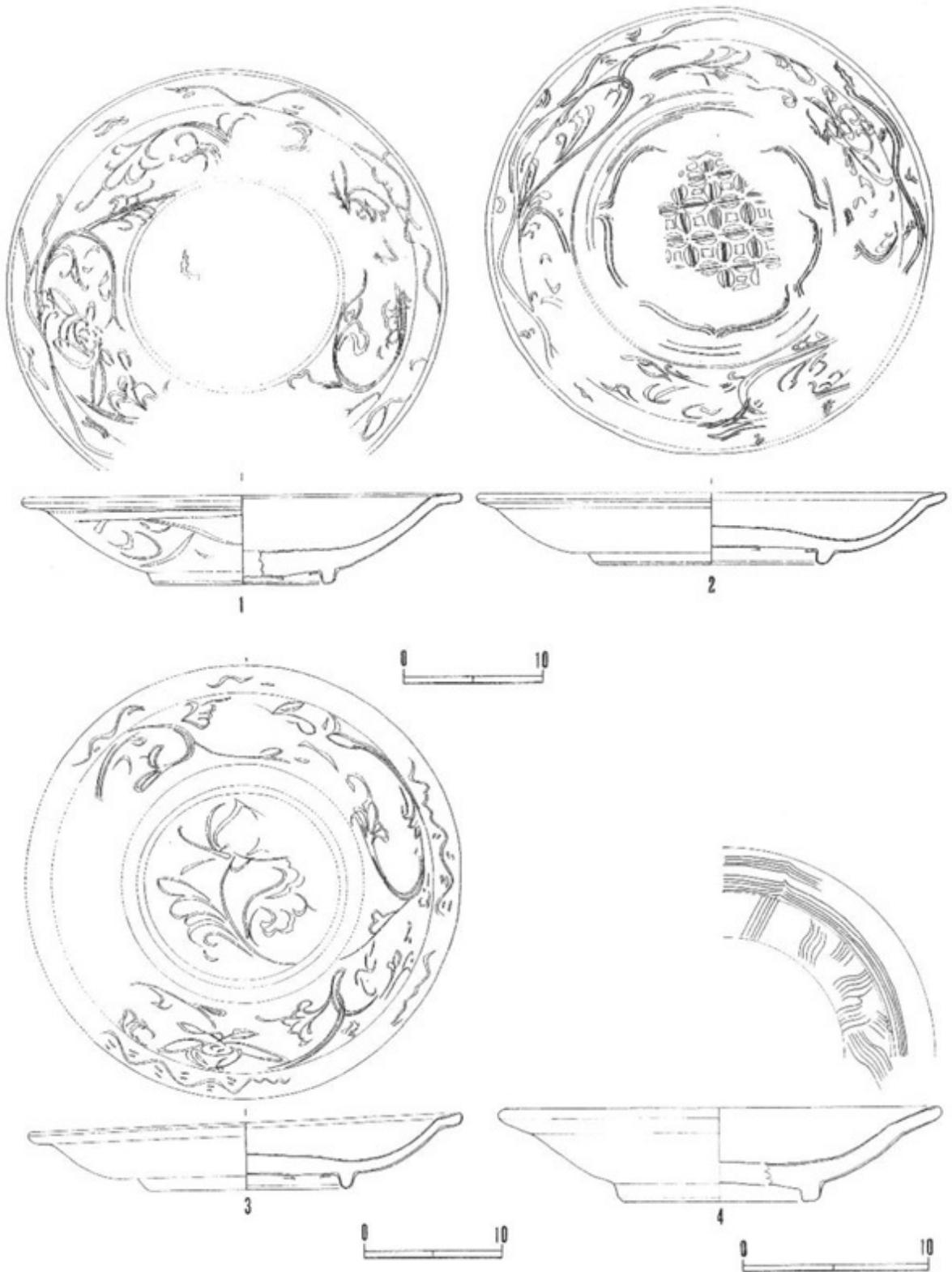


3

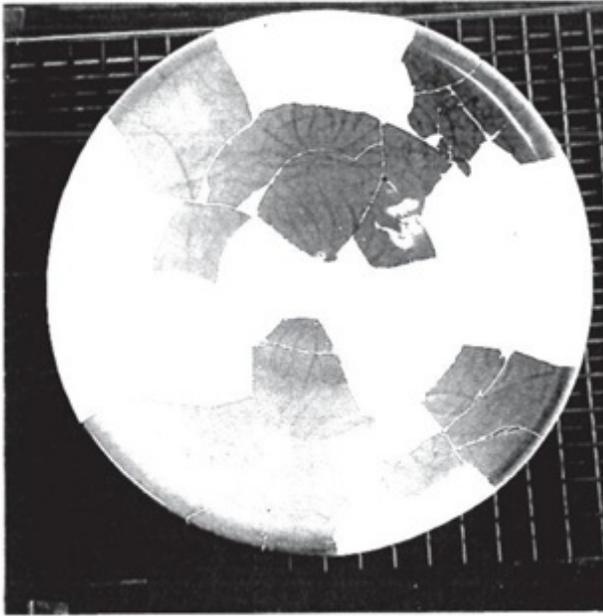


4

1: 神奈川県立歴史博物館 2、3: デイビッド財団コレクション 4: ジャカルタ国立博物館



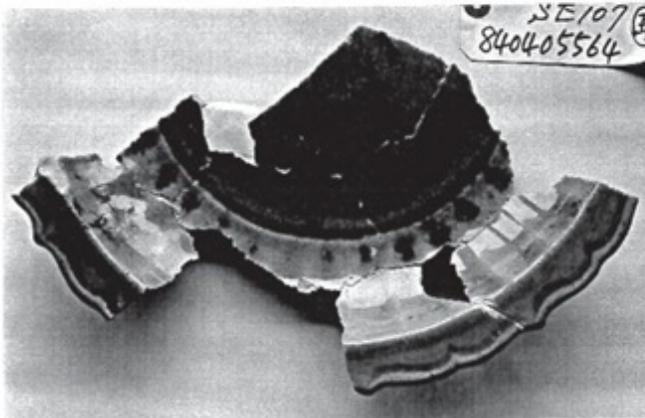
1-3 : 首里城京ノ内 4 : 博多遺跡群



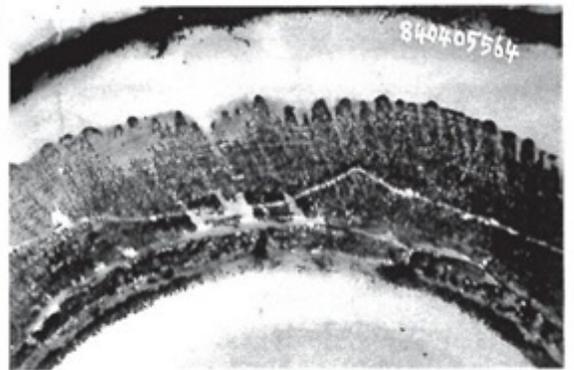
1



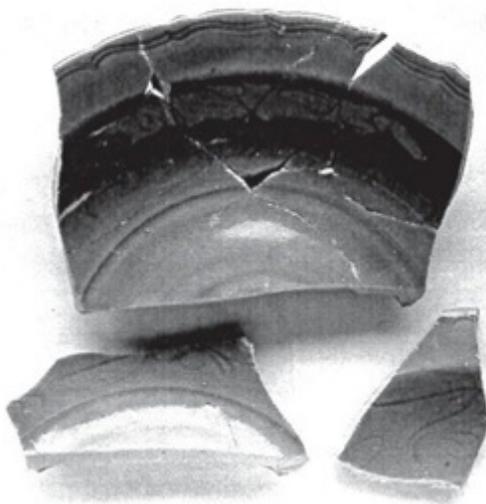
2



3



4

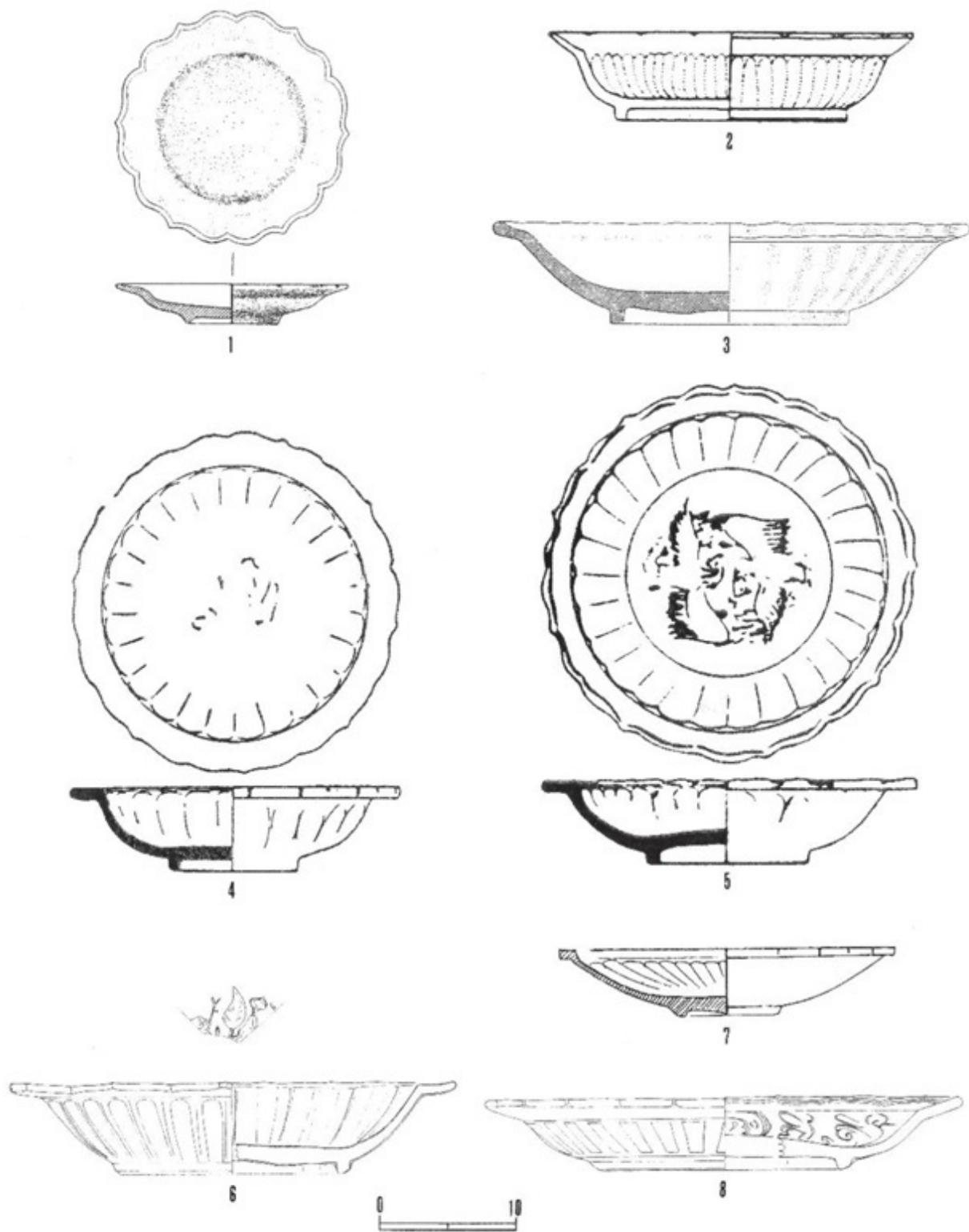


5

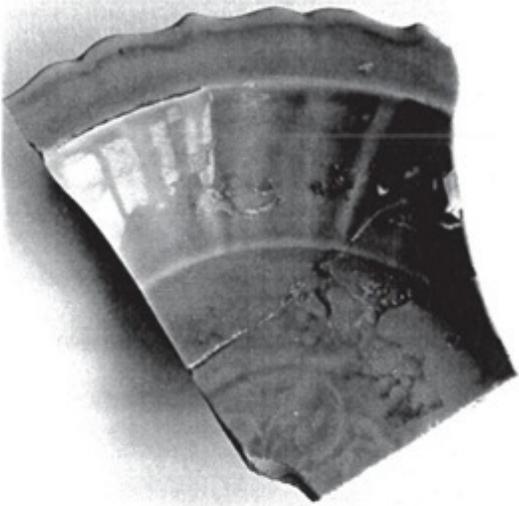


6

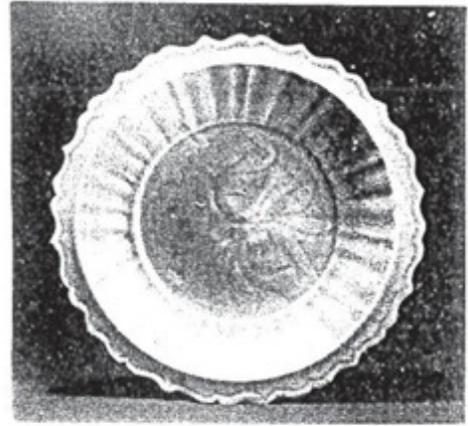
1、2：鎌倉 3-6：博多遺跡群



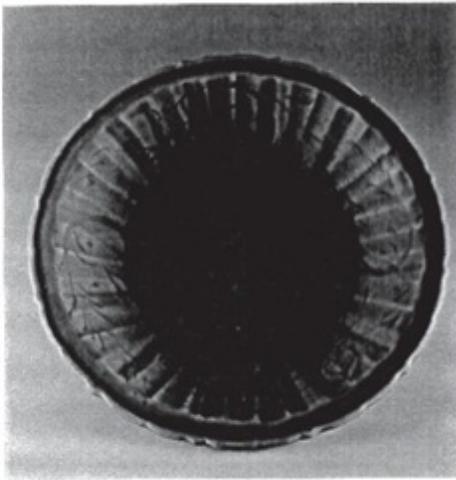
1: 竜泉大窯 2: 上巖兒窯 3: 竜泉大窯 4: 安仁口入黒湾2号 5: 安仁口嶺脚窯 6: 博多遺跡群 7: 鎮江市
8: 博多遺跡群



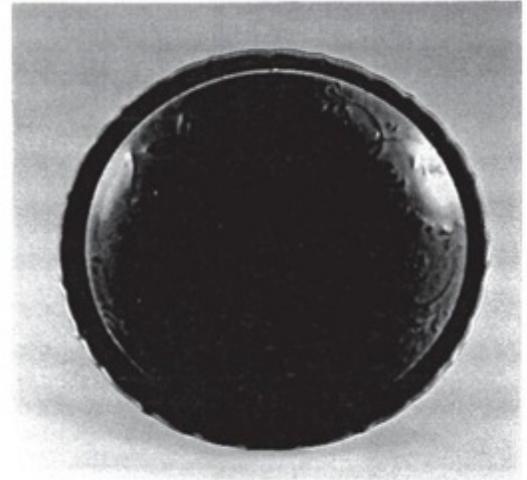
1



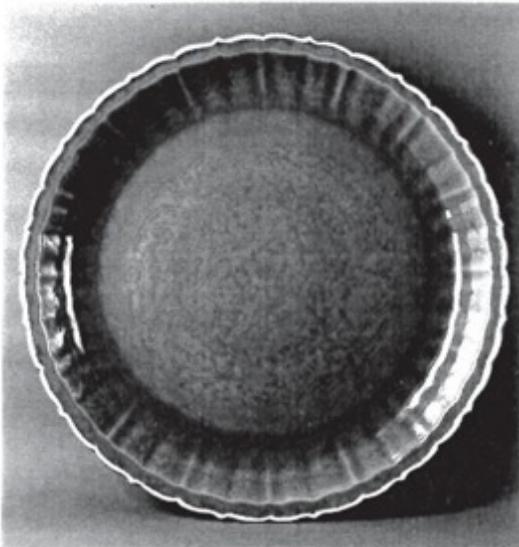
2



3



4

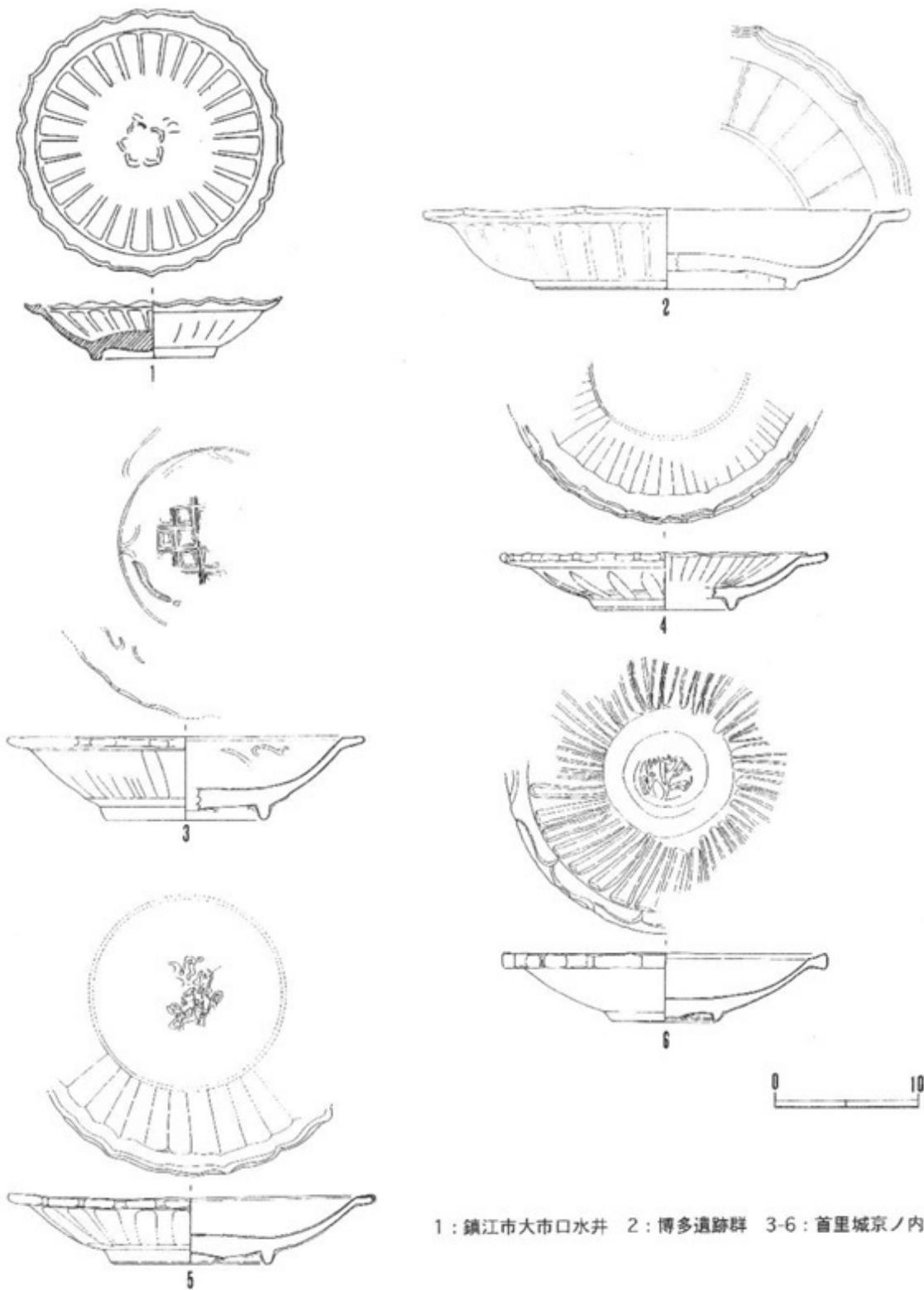


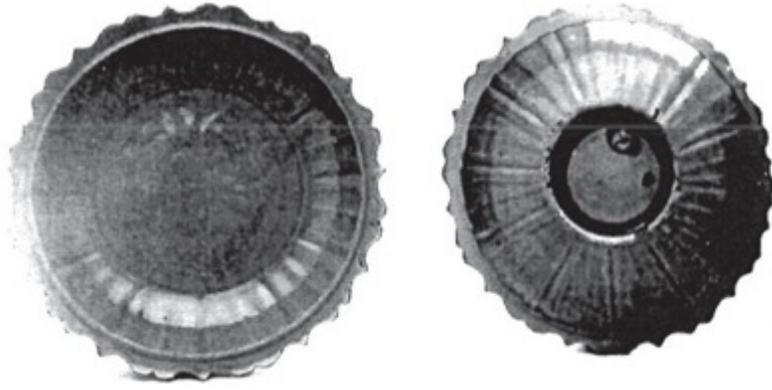
5



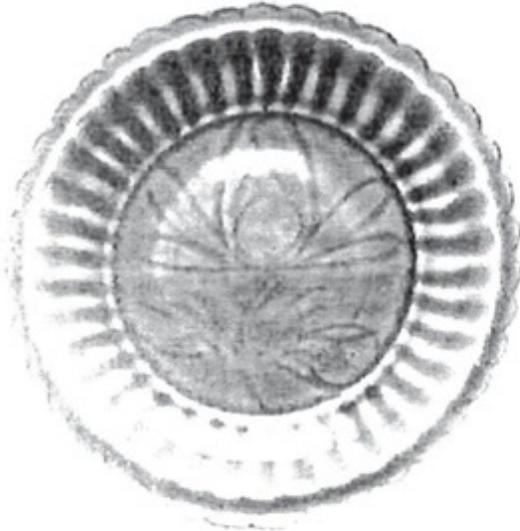
6

1: 博多遺跡群 2: 杭州窖藏 3、4: 友ヶ島海底 5: 東京国立博物館 6: デイビッド財団コレクション





1



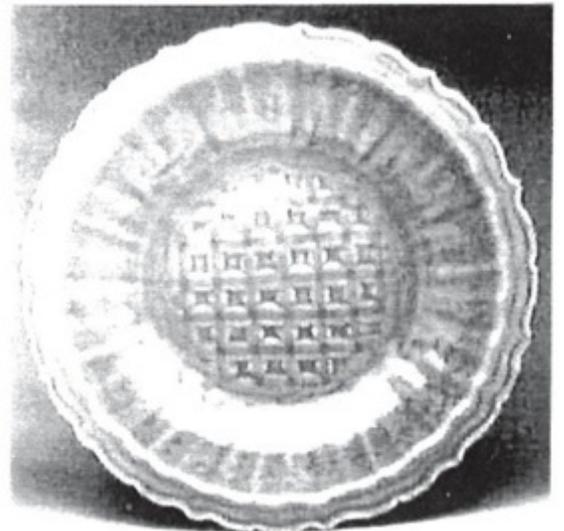
2



3

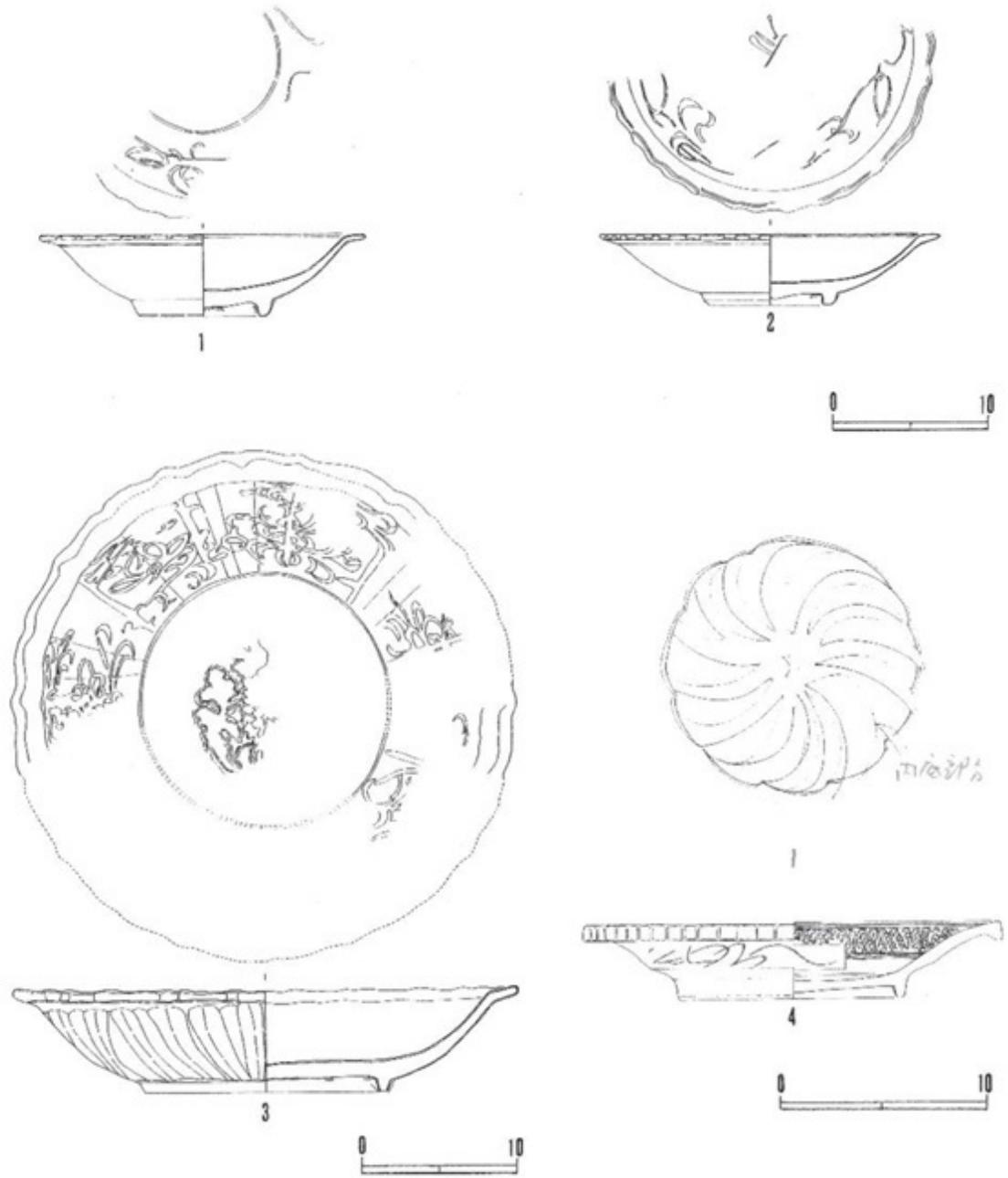


4

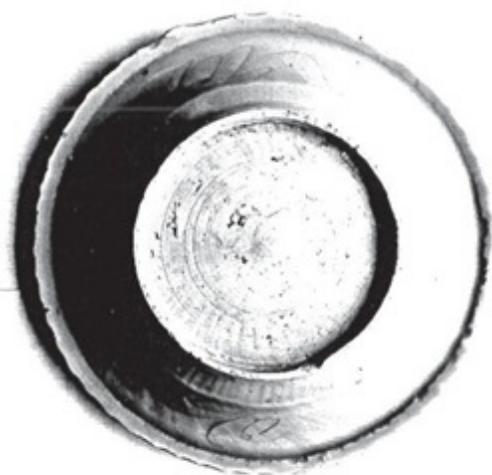


5

1、2：トブカブ宮殿 3：新安海底沈船遺跡 4：ギメ美術館 5：トブカブ宮殿



1-3: 首里城京ノ内 4: 博多遺跡群



1



2



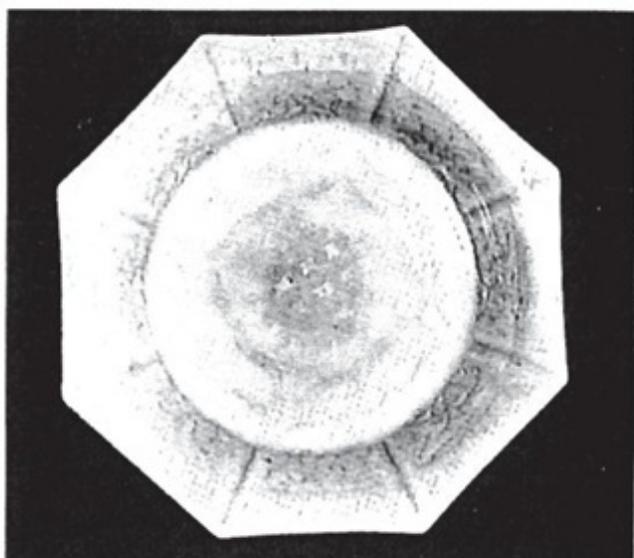
1: 博多遺跡群 2: 堺環濠都市遺跡



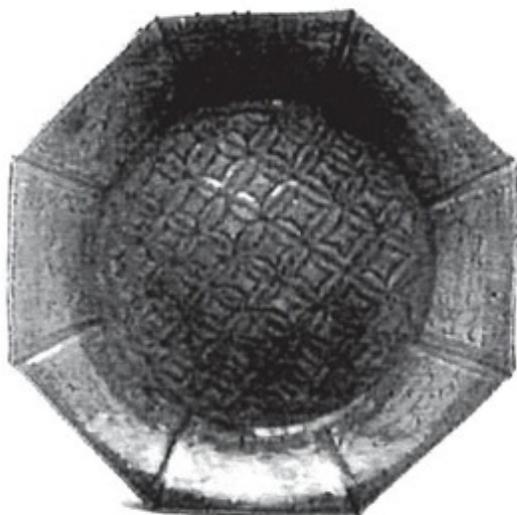
1



2

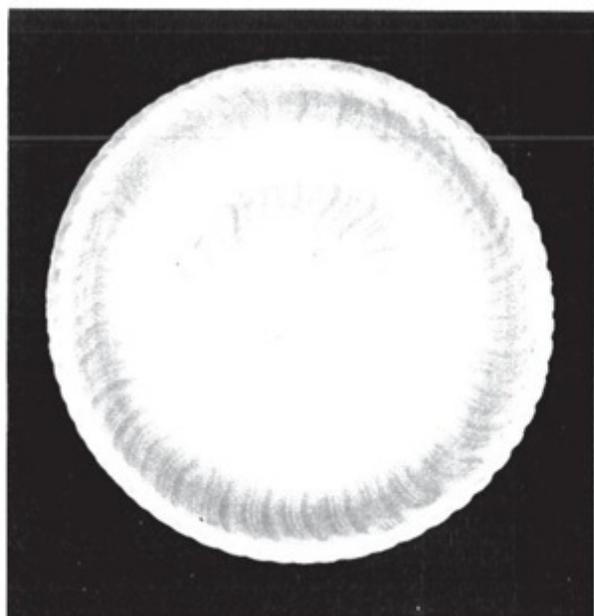


3

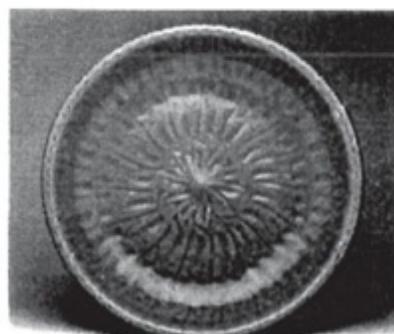


4

1: 竜泉市小梅鎮大窯 2: 緗雲洋山紅磚廠工地 3: デイビッド財団コレクション 4: トプカブ宮殿



1

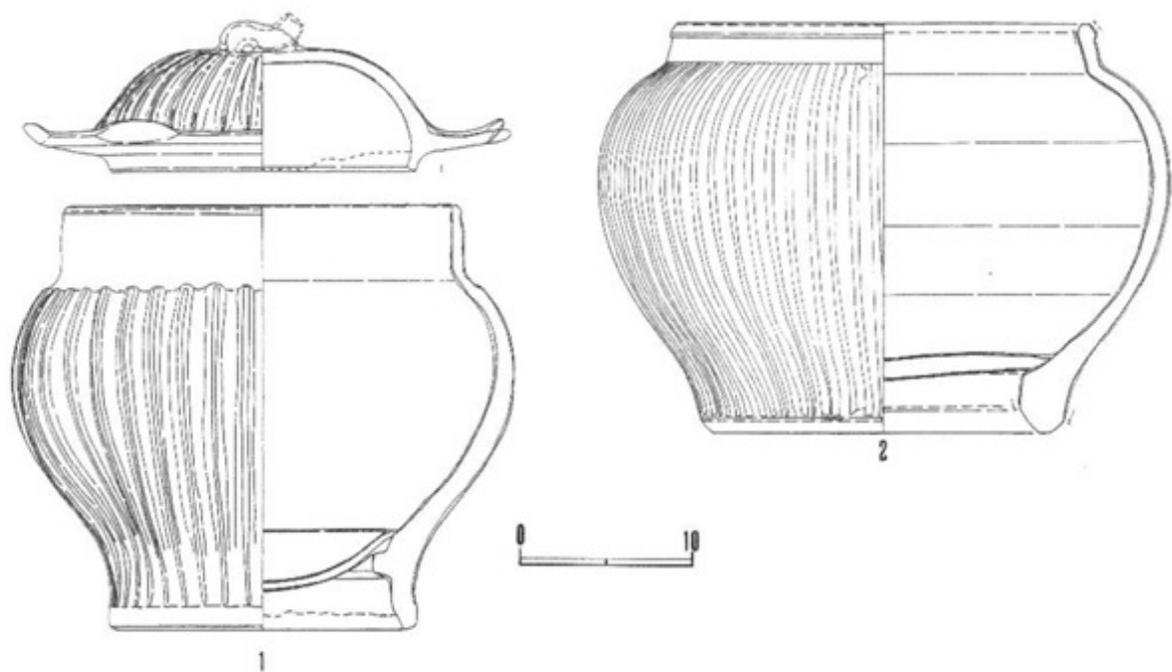


2



3

1：町田市立博物館 2、3：トブカブ宮殿



1: 今小路西遺跡 (北谷3面) 2: 首里城京ノ内 3: 集寧路故城内 4: 永新県窖藏 5: 高安県窖藏
6: 石家庄後太保 (M1)